

飛騨の怪談

岡本綺堂

青空文庫

(一)

綺堂君、足下。

聡明なる読者諸君の中にも、この物語に対して「余り嘘らしい」という批評を下す人があるかも知れぬ。否、足下自身も或は其一人であるかも知れぬ。が、果して嘘らしいか真実らしいかは、終末まで読んで見れば自然に判る。

嘘らしいような不思議の話でも、漸々に理屈を詮じ詰めて行くと、それ相当の根拠のあることを発見するものだ。

勿論、僕は足下に対して、単にこの材料の調書を提供するに過ぎない。之を小説風に潤色して、更に読者の前に提供するのには、即ち足下の役目である。宜しく頼む。

大正元年十一月

XY生

*

*

*

*

*

*

こんな手紙と原稿とを突然に投げ付けられては、私も少しく面食わざるを得ない。宜しく頼むと云われても、これは余ほどの難物である。例えば、蟹だか蛸だか鮫鱈だか正体の判らぬ魚を眼前へ突き付けて、「さあ、之を旨く食わして呉れ」と云われては、大抵の料理番も聊か逡巡ぐであらう。況んや素人の小生に於てをや。この包丁塩梅甚だ心許ない。

随つて實際は真実らしい話も、私の廻らぬ筆に因つて、却つて嘘らしく聞えるかも知れぬが、それは最初から御託を申して置いて、扱ひよいよ本文に取かかる。これは今から十七八年以前の昔話と御承知あれ。

北国をめぐる旅人が、小百合火の夜燃ゆる神通川を後に、二人輓きの人車に揺られつつ富山の町を出て、竹藪の多い村里に白粉臭い女のさまよう上大久保を過ぎると、下もおおくほ、笹津の寂しい村々の柴焚く烟が車の上に流れて来る。所謂越中平の平野はここに尽きて、岩を噛む神通川の激流を右に視ながら、爪先上りに峻しい山路を辿つて行くと、眉を圧する飛驒の山々は、宛がら行手を遮るように峭り立つて、気の弱い旅人を脅かすように見えるであらう。

けれども、地図によれば此処らは未だ越中の領分で、足腰の疼痛に泣く旅人も無し、山

霧に酔う女もあるまいが、更に進んで雲を凌ぐ庵、峠を越え、川を抱いたる片掛村を過ぎて、越中飛驒の国境という加賀澤に着くと、天地の形が愈よ変つて来て、「これが飛驒へ入る第一の関門だな。」と、何人にも一種の恐怖と警戒とを与えるであろう。乱山重疊、草鞋の穿けぬ人の通るべき道ではない。

この加賀澤から更に二十里ほどの奥であると云えば、其の地勢などは委しく説明する必要もあるまい。そこに戸数八十戸ばかりの小さい駅がある。山間の平地に開かれた町で、学校もあれば寺院もあり、且は近年其附近に銀山が拓かれるとか云うので、土地は漸次に繁昌に向い、小料理屋のようなものも二三軒出来て、口臙脂の厚い女が斯んな唄を謡う様になつた。

行くにや辛いがお山は飛驒よ

黄金白 金花が咲く

「小旦那……小旦那……。昨夜も亦、彌作の内で鶏を盗られたと云いますよ。」

「鶏を……。誰に盗られたろう。又、銀山の鋤夫の悪戯かな。」と、若い主人は少しく

眉を顰めて、雇人の七兵衛老翁を顧つた。

「何、何、鉢夫じゃアねえ。」と、七兵衛は頭を掉つて、「それ、例の……。」

「例の……。」

「ですよ。」

「むむ、山か。ははははは。ここらでは未そんなことを云つてるのか。」

若い主人は一笑に附し去ろうとしたが、七兵衛は固く信じて動かぬらしい。

「小旦那は幾ら東京で学問したつて、そりやア駄目です。現在、が出て来るんだから仕方がねえ。論より証拠だ。」

(一一)

若主人の名は市郎、この駅では第一の旧家と呼ばれる角川家の一人息子である。斯ういう山村に生れても、家が富裕であるお庇に、十年以前から東京に遊学して、医術を専門に研究し、開業試験にも首尾好く合格して、今年の春から郷里に帰つた。年は二十七歳で、色の浅黒い活発の青年である。

ここは山村で昔から良い医師が無い。市郎の父は之を憂いて、倅には充分に医術を修業させ、将来は郷里で医師を開業させる心組であつた。市郎も固より其覚悟であつたので、帰郷の後、半年ばかりは富山の某病院の助手に雇われ、此頃再び帰郷して愈よ開業の準備に取懸つている中に、飛驒の山里は早くも冬を催して、霜に悩める木葉は雨のように飛んだ。

十月の末ではあるが、朝の霜は白い。其の白きを履んで散歩する市郎の許へ、彼の七兵衛老爺が駈けて来て、大きな眼と口とを頬に働かせながら、山の一件を注進したのである。

対手が余り熱心であるので、市郎も無下に跳ね付ける訳にも行かぬ。

「然うかねえ。」と、軽く笑つて、「僕等も小児の時には其んな話を聞いたことがあるが、真実に が出るのか。」

「確に出来ますよ。幾らも見れた者があるんだから争われねえ。」

「そこで、昨夜も彌作の許で鶏を盗られたんだね。」

「何でも夜半のことだと聞きましたが、裏の鶏舎で羽搏の音が烈しく聞えたので、彌作が窃と出て見ると、暗い中に例の が立っている。彌作薙消て息を殺していると、 は

鶏舎の中から一羽を握み出して、ぎゅうと頸を捻つて、引抱えて何処へか行つて了つたと云いますよ。」

「ふむ。」と、市郎は首を拵つて、「で、其の　　という奴何んなものだね。」

七兵衛は慌てて遮つて、更に前後を見廻して、若い主人を叱るように、

「奴なんぞと云うじゃアねえ。何処に立聞をしていて、何んな祟をするか知れねえ。幾らお前様が理屈を云つたつて、　　に逢つたが最後何んな人間だつて敵うものじゃねえから……。」

「じゃア、奴というのは先ず取消にして、兎にかく其の　　とかいう者に一度逢つて見たいもんだね。」

「馬鹿云わつしやい。」

若い主人は又叱られた。

ここで鳥渡其の　　なるものを説明して置く必要が有る此の土地に限らず、奥州にも九州にも昔から山男又は山　　の名が伝えられている。勿論、繁華の地には無いことであるが、山間の僻地では稀に其姿を見ることがある。要するに猿とも人とも区別の付かぬ一種奇怪の動物で、中には人間の詞を少しは解する者もあるとかいう。山　　ゐろは恐く和

郎ろうという意味であろう。で、大いおおきのを山男やまおとこといい、小さいのを山やまと云うらしいが能くは判らぬ。まだ其他そのほかに山姥やまうばといい、山女郎やまじょうろうと云う者もある。これは恐く彼等の女性であろう。

兎とに角かくに彼等かれらは一種の魔物として、附近の里人から恐れられている。山深く迷い入った獵かりゆうど夫とが、暗い岩蔭うそぶに嘯うそぶいて立つ奇怪の襦みれば、銃を肩にして早々に逃げ帰る。万これ一これ之これに一発の弾たまを与えたならば、熱病其他そのたの怖るべき祟たたりこうむを蒙かぶつて、一家は根絶ねだやになると信まじられている。彼等かれらは勿論深山の奥に棲んで、滅多に姿を見せることは無いが、時としては里に現われて食物を獵あさる。其場合そのには矢張り一般の盜賊ぬすびとの如くに、成べく白昼ひるを避けて夜陰に忍び込み、鶏や米や魚や手当り次第さだに攫さらつて行く。其その素捷すばやいことは所謂いわゆる猿さるの如くで、容易そのに其影そのを捕捉とらすることは能できぬ。

又たとい其姿そのを認めた者があつても、臆病な里人は決して之これを追おうとは試みない。若もし迂濶うかつに妨害を加えたらば、彼等かれらは何時なんじき如何いかなる復讐ふくせうをするかも知れぬので、何事も殆どが為すままに任して置く。

に対する奇怪の伝説や歴史は、ま鹿このほか他ほかにも沢山あるが、概括して云えば先ずこんなものである。

(一一一)

市郎も此の土地に生れたので、小児の時から山の話やまわろを聞いていた。「そんなに悪いたず戯らをすると、山毎やつて了しまいますよ。」と、亡母なきははから嚇おどされたことも有った。が、

多年東京の空気に混まじっている中に、そんなお伽話うたのような奇怪な伝説は、彼の頭脳あたまから悉す皆忘っかりれられていたのを、今や再び七兵衛老爺おやじから叱おこるが如ごとくに諭さとされて、彼は夢のよう少年当時の記憶おぼを呼び起すと同時に、彼の山なるもの就つて尠すくなからぬ好奇心を生じた。

「とは何だろう矢やはり猿ひびか狒ひび々の一種いか知ら。」と、市郎は頻しきりに考かえた。

七兵衛が去いつた後の裏庭しずかは閑静しずかであつた。旭日あさひの紅い樹の枝えだに折々ことり小禽こどりの啼なく声が聞きえた。差さしたる風かぜも無いに、落葉はは相変あらずがさがさと舞まつて飛とんだ。

「市郎、大分寒ひやくなつたな。」と、父の安行やすゆきが背後うしろから声こゑをかけた。安行は今年六十歳との筈はずであるが、年齢としよりも遥はるかに若わかく見みられた。

父がここへ来たのは丁度ちやうど幸さいいである。市郎は彼かの就つて父の意見いを訊ただすべく待まち構かまえていた。が、父の話はなしは其そんな問題もんだいで無なかつた。

「時に忠ちゆういち」さんから何か消息たよりがあつたか。」

「何でも来月初旬には帰郷するということでしたが……。」

「そうか。それは好都合だ。」と、父は満足の笑えみを洩らした。

「ですが、私の為に態々わざわざ帰郷させるのも気の毒ですから、此方こつちは別に急ぐ訳でもないから、冬季休業まで延期しろと云つて与りました。」

「そう云つて与つたか。」と、安行は少しく不平らしい口吻くちぶりで、「当人が帰ると云うなら、帰つて来いと云つて与れば可いのに……。成ほどなる、今の所でお前の婚礼を急ぐにも及ばないが、決つた事は早く行つて了しまうに限る。吉岡の阿母おつかさんも急いで居るんだからな。」

「でも、一月ひとつきや二月ふたつきを争うこともありませんまい。」

「むむ。阿母おつかさんはまあ何うでも可いとしても、冬子ふゆこさんが嘸ぞ待つているだろう。」

市郎は少しく顔を染めた。

「まあ、可い。」と、父は首肯うなずいて、「そんなら其様そのように吉岡の阿母おつかさんの方へも云つて置せがれこうよ。倅せがれは何うも冬子さんを嫌つて居るようですから、婚礼は当分延のほしますと……。はははははは。」

安行は我子むかに対つても、何時いつも平気で冗談を云うのだ。市郎も笑つて聞いていたが、や

がて例の一件を思い出した。

「阿父さん。あなたに伺つたら判るでしょうが、昨夜彌作の家で鶏を奪られたそうですね。」

「むむ。七兵衛がそんなことを云つたよ。」

「私も七兵衛から聞いたんですが、山 奪つたとか云うことです。一体、
ものが實際居るんですかね。」

「さあ、居るとも云い、居ないと云うが、俺にも確然とは判らないね。」

「けれども、彌作は確に視たと云いますが……。どうも不思議ですよ。」

「不思議だね。」とばかりで、父は此話を余り好まぬらしい。

「ねえ、阿父さん。外国でも遠い田舎へ行くと、種々不思議な話があるそうで……。約
り一種の迷信ですね。この山 なんて云うもの数は其の一つでしょう。わたくしは
之を十分に研究したいと思うんですが……。忠一君も曾てそんな話を為たことが有りまし
たよ。」

「 を研究したい。」と、安行穠や真面目になつて、我子の顔を凝と視た。

「そうです。恐く猿か何かでしょうな。」

「猿でも猩々でも、そんなものには構わずに置くが可い。先年駐在所の巡査がを追つて山の奥へ入つたら、其留守に駐在所から火事が始つて、到頭全焼になつて了つたことが有る。加之も駐在所が一軒焼で、近所には何の事も無かつた。其の巡査も後に病氣になつたそうだよ。」

物の道理を相当に心得ている筈の父安行すらも、矢はりを恐るる人であるらしい。市郎は肚の中で可笑く思つた。

(四)

わろ
た。 に対する市郎の好奇心は愈よ募つて来たので、彼は何とかして父を釣り出そうと試みた。

「あなたも が怖いんですか。」

「怖いとも思わないが、好んで其んなものに関係う必要も無いじゃアないか。」

と、安行は情なく答えた。

「祖父さんは を見たそうですね。」

「誰から聞いた。」

「死んだ阿母さんから聞いたことがあります。」

「祖父さんは 　に殺されたのだ。」と、父は思わ歎息を吐いた。

市郎は驚いて飛び上った。

「え、祖父さんは 　に……何うして殺されたんです。」

「そんな話は止そうよ。」

一旦は斯う云ったが、到底黙つて承知しそうなでもない我子の熱心な顔を見て、安行は又思い直したらしい。

「では、話して聞かせるから、まあ此方へ来い。」と、父は先に立つて、日当りの好い小屋の前に進んだ。

午前十時、初冬の日には愈よ暖かく麗かになつて、白い霜の消えて行く地面からは、遠近に軽い煙を噴いていた。南向の小屋の前には、二三枚の蕙が拵けて乾してあつた。父子はここに腰を卸して、見るとも無しに瞰上げると、青い大空を遮る飛驒の山々も、昨日今日は落葉に痩せて尖つて、宛ら巨大なる動物が肋骨を露わした様にも見えた。其骨の尖角の間から洩るる大空が、気味の悪いほどに澄切っているのは、臆て真黒な雪雲を

運び出す先触さきぶれと知られた。人馬の交通を遮さえぎるべき厳寒の時節も漸ようやく迫り来るのである。 「今から丁度五十年前の事だから、俺も真実ほんとうの話は能くも知らない。後に他ひとから聞いたのだが……。 」と、安行は我子を顧みかえつて、「矢やはり今時分のことだ。お前の祖父おじいさんが隣村まで用達ようたしに出かけて、日が暮れてから帰つて来た。其晩は好い月夜で二三町先まで能く見える。祖父おじいさんは少し酔つていたので、何か小唄を謳うたいながらぶらぶら来ると、路みち傍ちばたの樹の蔭から可怪おかしな者がちよこちよこ出て来た。猿のような、小児こどものような者で、矢やはり真直まつすくに立つて歩いて行く。はて、不思議だと思ひながら、拔ぬき足あしをして窃そつと尾つけて行くと、不意に赤児の泣声が聞えた。熟視よくみると、其奴そいつが赤児を抱えていたのだ。 」

市郎は息を詰めて聴いていた。

「そこで、祖父おじいさんも考えた。これは例の山 魁ひとの赤児を攫さらつて行くに相違ない。対手あいてが対手あいてだから大抵の事は見逃して置くが、人間を攫さらつて行くのを唯打捨ただうっちゃつて置く訳には行かぬ。其当時そのの事だから、祖父おじいさんも腰に刀を佩さしていたので、突然いきなりにひらりと引ひき抜ぬいて、背後うしろから「待てツ」と声をかけた。対手あいては振返ふりかえつて屹きつと此方こつちを視みたが、生憎あいにくに月を背後うしろにしているので其顔そのは能く判らなかつた。 」

「顔は判りませんでしたか。 」と、市郎は失望の息を吐ついた。

「顔は判らなかつたが、暫時は此方を睨んで居たらしかつた。が、何分にも此方は長い刃物を振翳していたので、対手も流石に気怯れがしたと見えて、抱えていた赤児を其処へ投げ出して、直驀地に逃げて了つた。」

「何地の方へ……。」

「あの山の方へ……。」と、安行は北を指さして、「勿論、飛ぶように足が疾いのだから、到底追いつく訳には行かない。そこで、祖父さんは其の赤児を拾つて歸つて、燈火の下で熟視すると、生れてから十月位にもなるうかと思われる男の児で、色の白い可愛い児であつた。いづれ近所の人の児であろうと、明る朝方々へ問い合はして見たが、この駅では小児を奪られた者は一人も無い。隣村にも無い。約り何処から持つて来たのだから判らずに了つた。」

「其の小児は何うしました。」

「まあ、漸々に話す。其の小児の事よりも、先ず祖父さんの方を話さなければならぬ。祖父さんは強い人であつたから、別に何とも意にも介めずにいた処が、対手の方では執念深く怨んでいて、三日の後に残酷な復讐を為たよ。」

安行の聲は少しく顫えて聞えた。

(五)

「復讐……。山やまわろ が……。一体どんなことを為しました。」と、市郎も思わず摺すりよ寄ると、安行は今更のように嘆息した。

「それから三日目の晩に、祖父おじいさんは用があつて又隣村まで行つたが、夜が更けても歸つて来ないので、家うちしゅう中の者も心配して、松たいまつ明を点けて迎むかへに出た。其晩そのは真闇まっくらで、寒い山風が吹き下おろしていた。で、先夜山かみ児こどもを奪とりかえ返したという場所へ来ると、祖父おじいさんは血だらけになつて死んでいた。さあ大騒うしろぎになつて、よくよく死骸あたらたを検めると、人か獣か知らないが何でも鋭い牙のある奴やつが、背後うしろから飛び付いて喉笛のどを食い破つたらしい。祖父おじいさんも幾らかは防まもりだと思おもひ、手や足にも引ひつ搔かかれた爪つめの痕あとが沢山ひとあつた。勿論もちろん、死し人にんに口無くちしで、誰だれに何なにううされたのか判わからないが、祖父おじいさんは他ほかから恨うらみを受けるような記憶おぼえも無し、又普通の追おいはぎ剥はならば斯こんな残酷な殺し方をする筈はずがない。突然いきなりに人の喉笛のどに噛み付くなどと云うことは、普通の人間には容易できに能できる芸わざで無い。それ等の事情から考えると、同じ場所と云い、残酷な殺し方と云い、どうしても例の山やまが先夜の復讐

に來たとしか思われぬのだ。いや、確にそれに相違ないということに決着して、死骸は寺に葬つた。すると、まだまだ驚くことが有る。」

斯う云つて父は一息吐いた。市郎も余りに奇怪なる物語に氣を吞まれて、何とも詞を挿む勇氣が無かつた。

「それから初七日の日に、親類一同が式の如く寺参りに行くと、祖父さんの墓は散々に掘り返されて、まだ生々しい死骸が椿の樹の高い枝に懸けてあつた。勿論、誰の仕業か知れないが、これも大抵は判つている。其以來、土地の者は愈よ山を恐れるようになって、今日まで誰も指をさす者が無いのだ。まあ、そんな訳だから何も好んで山に閑係うことは無い、打捨つて置く方が可いよ。」

「成ほど不思議ですな。」と、市郎も何だか夢のように感じた。天狗や山男や、そんなものは未開時代の昔語と一閃に信じていた彼の耳には、此話が余りに新し過ぎて、殆ど虚実の判断に迷つた。が、彼は一概に之を馬鹿馬鹿しいと蔑して了うほどの生物識でもなかつた。市郎は飽までも科学的に此の怪物の秘密を許こうと決心したのである。

「それで、明治以後にも相変らず其んな怪談が屢々ありましたか。」

「さあ。」と、父も考えて、「今も云うような訳で、此方では誰も手出しを為さないから、

對手あいての方でも別に悪い事は為しないらしい。時々時々に里へ出て来て鶏や野菜などを搔かつ攫さらつて行くけれども、まあ其位そののことは打捨うちちやつて置くのさ。」

「警察でも構くわないんですか。」

「昔は女や小児こどもを攫さらつたと云うことだが、今は滅多にそんな噂を聞かない。で、人でも殺せば格別だが、小泥坊こどろぼうをする位のことでは、警察でもまあ大目に見逃して置くらしい。先刻さつきも云つた通り、巡査が一度追掛おつかけたことも有つたが、到頭とうとう捉つかまらなかった。何しろ、猿と同じように樹にも登る、山坂を平気で駈かける、到底人間の足では追おい付かかないよ。併しかし近所に銀山も拓ひらけて、漸々だんだんここらも賑にぎやかになるから、も山奥へ隠しまれてつて、余り出なくなるかも知れない。」

「そうですねえ。ここらも昔に比べると余よほど開けて来ましたから……。」

「土地の繁昌は結構だが、銀山の鉱夫などが大勢入いりこ込んで来たので、怪しげな料理屋などが追々おいおい殖殖えて来るのは些ちつと困る。」と、安行は苦笑苦笑いした。

「今に山も料理屋あが壱あがつて、甚九じんくでも踊るようになるかも知れません。ははははは。」
父子おやこは笑いながら内へ入つた。

今日は些ちつとも風のない温かい日であつた。午餐ひるめしの済済んだ後、市郎は縁側に立つて、庭

の南天の紅い実を眺めていると、父の安行が又入つて来た。

「好い天気だな。何うだ。運動ながら吉岡の家へ一所に行かないか。吉岡の阿母さんに逢つて、お前の婚礼を延すことを一応断つて置こうと思うから……。」

「はあ、お伴しましょう。」

市郎は散歩が好であつた。加之も未来の妻たるべき冬子の家を訪問するのであるから、悪い心地は為なかつた。早速に帽子を被つて家を出た。

近来賑かになつたと云つても、矢はり山間の古い駅である。町の家々は昼も眠つていように見えた。

富山の友人から貰つたトムと云う大きな西洋犬が、主人父子の後を遅々と躡いて行つた。

(六)

長くもない町を行き尽して、やがて駅尽頭の角に来ると、冬を怨む枯柳が殆ど枝ばかりで垂れている傍に、千客万来と記した角行燈を懸けて、暖簾に柳屋と染め抜いた小料

理屋があつた。雪国の習で、板葺の軒は低く、奥の方は昼も薄暗い。

安行父子が今やこの門を通ると、丁度出合頭に内から笑いながら出て来た女があつた。年は二十三でもあろう、髪は銀杏返しの小粋な風であつた。

市郎の顔を見るや、彼女は俄に衣紋を繕つて、「あら、若旦那……。」と、叮嚀に挨拶した。市郎も黙つて目礼した。

「よいお天気になりました。」と、女は笑を含んで再び詞をかけた。

「好い天気になりましたなあ。」と、市郎も鸚鵡返しに挨拶して、早々にここを歩き過ぎた。女は枯柳の下に立つて、暫時は其の後姿を見送つていた。

「お前はあの女を知っているのか。」

五六間行き過ぎてから、安行は低声で訊いた。

「いえ、知つてると云う程でも無いんですが、この夏、吉岡の忠一君が帰省した時に、一所にあの家へ飲みに行つたことが有るんです。何、唯つた一度ですよ。」

「そうか。併し狭い土地だから、お前が角川の息子だと云うことは、先方でも知つてるだろう。あんな許へ余り出入するなよ。世間の口が煩さい。」

「そうですとも……。あんな家へは決して二度と足踏は為ませんよ。」と、市郎は潔よ

く答えた。が、何を思い出したか、嫣然笑いながら、「それでも忠一君は彼の女に思惑でも有つたと見えて、頻に戯つて騒いでいましたよ。」

「若い者には困るな。」と、安行も共に笑いながら、「あれは酌婦だろう。何という名だ。」

「たしかお葉と云いました。」

「お葉か。忠一が今度帰つたら冷評で与ろうよ。」

「詰らない。お止しなさいよ。あれでも表面は真面目なんですから……。」

「それだから戯つて与るんだ。」

斯ういう暢気な親父が、何故山なんぞを恐れるのだろうと、市郎は不思議に思いながら、不図顧ると、自分達の後を追つて来たトムの姿が見えない。

はて、何処へ行つたかと思廻すと、犬は彼の柳屋の前に止つて、お葉から何か食物を貰っているらしい。

「トム、トム……。」と、二三度呼んだが、犬は食物に気を奪られて、主人の声を聞付けぬらしい。市郎は舌打しながら引返して来た。

「トム、トム……。」と、少しく声を暴くして呼ぶと、犬は初めて心付いたらしく、食

物を捨てて駈け出そうとしたが、早くも背後からお葉に抱かれて了った。

「この犬は良い犬ですね。」

「無闇に吠えて困るんです。」

「でも、温良いわ。妾、此犬が大好よ。」

「トム、トム……。」と、市郎は又呼んだ。犬は尾を掉つて行こうとしたが、お葉は相変らず緊乎抱いていた。

「トム、トム……。」

市郎は重ねて呼びながら、犬の頸に手をかけると、お葉は傍へ寄つて来て、低声で少しく怨恨を含んだように、

「あなた、あの時限り被入つて下さらないのね。」

市郎は黙っていた。

「後生ですから、あなた最う一度来て下さいな。え、お厭ですか。え、どうしても厭……。来て下さらないの。」

「厭という事も無いんだが……。」と、市郎は返事に困つて、思わず父の方を顧ると、安行は小半町ばかり先の木蔭に立つて、此方を凝と見詰めているので、市郎は何とも無し

に赤面した。

「兎にかく又来ますよ。」

詞短かに云い捨てて、無理に犬を牽き出すと、お葉は漸く手を放したが、今度は市郎の腕に手をかけて、

「あなた、必然ですか。可ござんすか。欺すと山を頼んで、意趣返し脅せますよ。」

お前ならば山女郎の方が可かろうと云おうとしたが、戯っていると長くなる。市郎は黙って首肯いて、早々に立去った。

(七)

「おや、角川のおじさん被入しやい。市郎さんも……。さあ、どうぞ……。」

吉岡の母お政は、喜んで安行父子を迎えた。吉岡も隣村では由緒ある旧家で、主人は一昨年世を去ったが、お政との間に二人の子供があつた。総領は忠一と云つて、帝国大学の文科に学んでいる。妹の冬子も兄と共に上京して、某女学校に通っていたが、昨年無事に卒業して今は郷里の実家に帰っている。地方には能くある習、角川の市郎と冬子とは所

謂い許なづけ嫁いの間柄なづけで、市郎が医師を開業すると同時に、めでたく祝しゅうげん言げんという内相談ないそうだになつてゐる。勿もちろん論ろん、二人の間に異存は無かつた。

斯こういう關係であるから、昔から両家は殆ど親類同様に親しく交際してゐた。殊に主人が死んだ後は、吉岡の家では何かに付けて角川一家を力と頼んでゐた。

安行おやこ父子が座敷へ通ると、今年二十歳はたちの冬子も笑顔を作つて出て来た。

「東京の倅せがれの方から一昨日手紙が参りまして、冬子の婚つひ礼れいに就つて来月初旬には必然きつと歸かへつて来ると云うことでした。」と、お政が先まず口を切つた。

「いや、其事そのことですが……。」と、安行は市郎を顧みかえつて、「倅せがれの云うには、それが為ために忠一ちゆういちさんを態わざわざ々々呼よび戻かへすにも及およばまい。どうで歳暮くれには帰郷するのだから、其時そのまで延のばしても差さしつかえ支えはあるまいと……。」

「それも然そうですが……。」と、お政は娘の顔を視みた。市郎は何の気も注つかずに、「実は私から忠一君の方へ、然そう云いつて与やつたんですが……。」

「まあ。」と、お政は更に市郎の顔を視みた。

「私も今朝初めて聞いたのだが、延期しては何か御都合が悪いかな。」

安行の問といに対して、母子おやこは即坐すまに何とも答こたえなかつた。お政は霎しばらく時とき考かんがへて、

「いいえ、別に都合の悪いと云うこともありませんが……。善は急げとか云いますから、一日も早く御婚礼を済まして、妾も安心したいと思うのですが……。是非来月で無ければ成らないと云う訳ありませんから、約り貴下や市郎さんの思召次第で……。妾の方はどつちでも宜しいのです。唯、妾の方では……。こんなことを申しては何ですけれども、市郎さんも未だお若いのですから、何かの間違ひのない中に些とも早く……。と斯う思つて居りますので……。ほほほほほ。」

お政は冗談のように笑つて云つたが、其詞の底には何かの意味があるらしくも聞えた。冬子も恨めしそうな眼をして、市郎の顔を視ていた。斯うなると、何だか聞捨にもならぬような意もするので、安行も稍や真面目になつた。

「御承知の通り、倅もまだ書生上りで小兒も同然だから、私も平生から厳しく監督していますが、冬子さんの婚礼は昨日今日に初つた話でも無し、たとい一月や二月延びたからと云つて、決して間違ひの起るなどと云うことは……。」

「それは然うですとも……。」と、お政は遮つて、「ですから、妾の方でも決して心配は為ませんが……。それでもお若い方と云うものはね。」と、又笑つた。

市郎も何だか黙つてはいられぬ羽目になつた。

「じゃア、おばさん、私が何か不都合な事でも為っていると被仰るんですか。」

「別に不都合ということは無いのですけれど、他の噂を聞くと、市郎さんは此頃柳屋とか云う家にお馴染が出来たそうで……。皆なが然う云っていますよ。」

「へえー。」と、市郎は眼を丸くした。柳屋と聞いて、安行の眼も少しく晃った。

「嘘です、そりやア實際嘘ですよ。」と、市郎は口早に、「そんなことは決してありませんよ。今も親父に話したのですけれども、此の夏、忠一君が帰省した時に、唯つた一度行つたことが有るだけで、其後は柳屋の鬩も跨いだ事は無いんです。」

「そうですかねえ。」と、お政はまだ笑っていた。其の疑惑は融けぬらしい。

(八)

「市郎、お前は真実に柳屋へ出入するのさ。」と、今度は安行が問うた。

「いいえ、嘘です、嘘ですよ。何かの間違いでしょう。」と、市郎は慌てて弁解した。

「でも、忠一も其時に云っていましたよ。市郎君は色男だ、柳屋の女が大層チャホヤしていたと……。ねえ、然うでしょう。」

如才じよさいないお政は絶えず笑顔を見せているが、対手あいては甚だ迷惑に感じた。と云つて、ここで何時いつまで争つても究竟つまりは水掛論みずかけろんである。市郎も終末しまいには黙つて了しまつた。

安行も考えた。何方どちらの云うことが真実ほんとうか知らぬが、先刻さつき市郎の話では、忠一が女と巫ふ山戯ざげたと云う。今又この話では、市郎が女と情交わけがあるらしいと云う。何方どちちにしても、対手あいては客商売の女である。要するに二人の客に対して、等分に世辞せじ愛あい嬌きようを振りまいたと云うに過ぎまい。随したがつて其時そのだけの遊興あそびならば兎とこうの論は無いが、若し市郎が其後そのごも柳屋へ通つている様ようならば、少しく警戒を加えねばならぬ。彼かのお葉という女は、どんな索性来歴せうせいの者か知らぬが、豪家ごうかの息子を丸め込んで、揚句あげくの果はてに手切れとか足切れとか居直るのは、彼等社会に珍ためししからぬ例である。殊ことに此方こちちは婚礼を眼の前に控えているから、それを附目つけめに何かの面倒を持ち込まれては、吉岡家に対しても気の毒、自分達も世間に対して余計な恥ちぢを晒さらすようにもなる。何どうか其そんなことの無い様ようにしたいものだ、心窃こころみそかに無事を祈いのつた。

が、誰の考かんがえ慮りも同じことで、ここで何時いつまで争つた所で水掛論に過ぎない。これだけに釘を刺して置けば既もう可いいと思つたのであろう、お政は相変あひらず嬌然にこにこ笑わらいながら、更に話を他ほかに反そらした。

「好塩梅にお天氣が続きますね。併し来月になったら、急にお寒くなりましょう。来年のお正月も又雪でしようかねえ。」

旧曆に依る此土地では、正月は恰も大雪の最中である。年々の事とは云いながら、三尺、四尺、五尺、六尺と漸次に振積んで、町や村にあるほどの人々を、暗い家の中に一切封じ込めて了う雪の威力を想像すると、何と無く一種の恐怖を懐かぬ訳には行かぬ。四人は今更のように庭を眺め、空を仰いで、日毎に襲い来る冬の寒気を染々と感じた。

この時、表では犬の啼く声が頻に聞えた。トムは何物を視たか知らぬが、狂うが如くに吠え哮るのであった。

「何をあんなに吠えるのだろう。」と、手持無沙汰の市郎は、之を機に起上つて門へ出た。

この家は小さい陣屋のような構造で、門の前には細い流を引き繞らし、一間ばかりの細い板橋が架してある。家の周囲は竹藪に包まれて、其の藪垣の間から栗の大木が七八本聳えていた。トムは橋の中央に走り出でて、凄じい唸声を揚げていたのである。

「トム、トム……。」と、市郎は先ず声をかけながら不図視ると、トムの五六歩前には一人の怪しい女が立っていた。

女は六十前後でもあろう。灰色の髪を芒のように乱して、肩の下まで長く垂れていた。彼女が若かりし春の面影は、恐く花のようにも美しかったであろうと想像されるが、冬のお樹の枯れ朽ちたる今の姿は、唯凄愴いものに見られた。身には縞目も判らぬような襪の上に、獣の生皮を纏っていた。其の風体が既に奇怪であるのに、更に人を脅かすのは其窪んだ眼の光で、凡そ此世界にありと有らゆる物は、総て我敵であると云わぬばかりに睨み詰めているらしい。

狂人か、乞食か、但しは彼の山の眷族か、殆ど正体の判らぬ此の老女を一目見るや、市郎も流石に悸然とした。トムが怪んで吠えるのも無理は無い。

併し彼女は別に何をするでもなく、門前の往来に飄然と立っているだけの事であるから、市郎も改まって咎める訳には行かぬ。唯暫時は黙って睨んでいると、老女は何と感じたか、黄い歯を露出して嫣然笑いながら、村境の丘の方へ……。姿は煙の消ゆるが如くに失せて了つた。

市郎は夢のように其の行方を見送っていると、トムの声を聞き付けて、この家の下男も内から出て来た。其話によると、彼の怪しの老女は北の山奥に棲むお杉という親子連の乞食であると云う。乞食とあれば是非もないが、何だか唯者では無いように市郎は

感じた。

「あれは山　の女房だとも云いますよ。」と、下男は更低声で囁やいた。

(九)

「トムは何を吠えていたのだ。」

市郎が旧の座敷へ戻つて来ると、安行は煙草を喫みながら徐に訊いた。

「いや、表に変な女が立つていましてね。後で聞けばお杉とか云う乞食だそうで……。」

「ああ、お杉ですか。」と、お政母子は眉を顰めて首肯いた。

「何です、彼女は……。頗る変な奴です。狂人でしょうか。」

「さあ、幾らか気も変になつていないか知れないが、所謂狂人と云うのでも無いようだ

。」と、安行は考えて、「彼女も俺の家に満更縁が無いでも無いのだ。お前も知っているだろう。」

「いえ、些とも知りませんね。一体、彼女は何です。」と、市郎は父の顔を覗いた。

「今朝お前に話した通り、祖父さんが五十年ほど昔に、山に攫われた小児を助けたこ

とが有る。」

「けれども、それは男の児こでしょう。」

「まあ、黙つて聞くが可いい。それには又種いろいろ々の可怪おかしな話が絡かんでいるのだ。」

山 と怪あやしの老女、この関連い愈よいよ市郎の好奇心を湧わかした。お政も冬子も珍めづしそうに耳みみを敬そべた。

茶を一杯、それから安行はこんなことを語り出した。

市郎の祖父、即ち安行の父は山 の復讐ふくせうの為に無残むぜんの死を遂つげた併しかし其手そのに救すくわれた

赤児あかごは、角川家の情なさけに困よつて無事むじに生長せいじやうした。固もとより何者なにものの子とも判わからぬので、仮かりに重じゆう

蔵ぞうと名なを付けて、児飼こがいの雇やとい人にんのようにして養やしなつて置おいた。角川の家は代々だいだいの郷土きやうどで、

傍かたわらに材木きりだ伐き出しの業わざを営いんでいたので、家の雇人こひき等も木挽こびきの職人しやくにんと一所いっ所に山奥やまおくへ入いるこ

とが屢しばしば々しばしばある。重蔵じゆうぞうも十二三歳じふにさんさいの時ときから山へ入いつた。

何でも彼かれが十五六歳じふごろうさいの秋あきであつた。小児こどもの癖くせに氣きの暴あら重蔵じゆうぞうは、木挽こびきの職人しやくにんと何か喧嘩けんか

をした結果けつ、同じおなじ氣きの早はやい職人しやくにんは「どうでも勝手かたにしる。」と、山小屋やまこやに重蔵じゆうぞう一人ひとりを置お

去きりにして歸かへつて了しまつた。而しかも其処そこには伐きり倒たおされた杉すぎや山毛やまけ櫛なの材木きりだが五六本ごろうほん残のこつてい

たので、飽あくまでも強情きやうじやうな重蔵じゆうぞうは、自分おのれ一人ひとりで之これを麓ふもとまで担かぎ出だそうとしたが、長ながく大きい

材木は少年の肩に余つて、到底峻しい山坂を降る訳には行かぬ。兎こうする中に日は暮れかかる。彼も流石に途方に暮れている処へ、恐く例の山 であろう。人か猿か判らぬ一個の怪しい者がふらりと出て来た。

並大抵の者ならば、驚いて慌てて逃げ出すべきであるが、重蔵は頗る大胆であつた。咄と嗟の間に思案を定めて、腰に提げたる割籠から食残りの握飯を把出して、「これを与るから手伝つて担いで呉れ。」と手真似で示すと、舎点したと見えて悠々と材木を担ぎ出した。斯くして彼は先棒となり、倭棒となつて、幾本の重い材木を無事に麓まで担ぎ下したのである。

これが一種の縁となつたとしても云うのであろう、其後も は折々に山小屋へ姿を見せた。但し他人のいる時は決して近寄らず、重蔵一人の時を窺つて忍んで来る。其都度に重蔵は自分の握飯を分つて、 に仕事を手伝わせていた。が、或時これを見付けた者が有つて、重蔵は山 を友としているという噂怨ち拡がった。角川家でも大に心配して、其以来彼を山小屋へ遣らぬ事とした。

それから又二三年過ぎた。其間 別に変つた事も無かつたが、一旦山 と親しんだという風説が、甚だ此の青年に禍して、彼は附近の人々から爪弾きされた。若い者の寄

合りあいにも重蔵一人は殆ど除外のけものとなつて了しまつた。随したがつて彼の性質も愈いよいよ僻ひがんで来て、仕事を怠ける、喧嘩をする、酒を飲む、甲それから乙それへと墮落して、果はては第二の親とも云うべき角川一家の人々からも見放される様ようになつた。

が、其そのあいだ間に於て独り重蔵に同情した女があつた。即ち彼かのお杉である。お杉は此この駅しゆくはすれ尽頭の蕎麦屋の娘で、飛驒小町と謳うたわれる程の美人であつたが、何どういう訳か不思議に縁遠いので、三十に近いまで独身で過すした。

(十)

お杉が評判の美人であるにも拘かかわらず、盛さかりを過ぎるまで縁遠いに就つても、山里には有勝ありがちの種々しゆじゆの想像説が伝えられた。其そのなか中なかでも、彼女かれは蛇まづの申子もうしごで、背中に三つの鱗うろこが有るということが、一般の人々に最も多く信ぜられていた。

お杉は重蔵に比べると、殆ど十歳とばかりの姉であつたが、何時いつか此この二人が狎馴なれなじ染んで、一旦は山の奥へ身を隠した。お杉の家でも驚いて、その森や彼処かしこの谷合たにあいを獵あさり尽した末に、一里ばかりの山奥にある虎とらヶ窟がいわやという岩穴に、二人の隠れ潜んでゐるのを発見し

て、男は主人方に引渡され、女は実家へ連れて戻られたが、其の翌る夜に二人は又もや飛び出した。今度は他国へ遠く奔つたらしい。遂に其行方を探り得なかつた。

それから十年ほど経つ中に、お杉の家は死絶えて了つた。二人の名も大方忘れられて了つた。然るに某日のこと、樵夫が山稼ぎに出かけると、彼の虎ヶ窟の中から白い煙の細く颯るのを見た。不思議に思つて近寄つて窺うと、岩穴の奥には怪しい女が棲んでいた。十年前に比べると、顔容は著るしく衰れ果てたが、紛う方なき彼のお杉で、加之も一人の赤児を抱いていた。驚いて其仔細を訊したが、彼女は何にも答えなかつた。赤児は恐らく重蔵の胤であると思われるが、男の生死は一切不明であつた。

それから二十余年の間、彼女は此の窟を宿として、余念もなく赤児を育てていた。赤児も今は立派な大人になつて、其名を重太郎と呼ぶそうである。で、此の母子は何に因つて衣食しているか判らぬが、折々に麓の駅に現われて物を乞うのを見れば、先ず一種の乞食であろう。勿論、これまでも警官から度々立退を命ぜられたが、今日逐われても明日は又戻つて来るという風で、殆ど手の着け様がない。駐在所でも終末には持余して、彼等が悪事を働かない限は、其まに捨てて置くらしい。

虎ヶ窟は其昔、若き恋に酔えるお杉と重蔵との隠れ家であつた。彼女は今や白髪しらがの嫗うばと

なつても、思い出多き此窟を離れ得ぬのであろう。

で、単に是だけの事ならば仔細も無いが、このお杉婆に就て又もや一種の怪しい風説が起つた。と云うのは、この母子が折々に里へ出て物を乞う時、快く之に与うれば可矣。若し情なく拒んで追い払うと、彼等は黙つて笑つて温順く立去るが、其家は其夜必ず山に襲われて、鶏か種かを奪われる。或は偶然かも知れぬが、其間に何かの關係が有るらしくも思われるので、人々は自ずと此のお杉を忌み且恐るるようになった。で、お杉は山を手先遣うとも伝えられた。お杉は山の女房であるとも伝えられた。固より確な証拠がある訳でもないが、こんなような意味からして、老たるお杉は一種の魔女の如くにも見られていた。

或時には又こんな事もあつた。お杉が門に立つて米を乞うた時に、或人が一合ばかりの米を与えて、冗談半分に斯う云つた。「お前も知っている通り、飛驒の国は米が少いのだから、之を十倍にして返して呉れるか。」お杉は黙つて首肯して去つた。すると、其晩の中に一升ほどの白米が、其家の前に蒔き散らされてあつた。

又、或家に夜も昼も泣く赤児があつて、お杉が門に立つた時にも、其児は火の付くように泣いていた。彼女は黙つて其額を撫でると、赤児は其以来些とも泣かなくなつた。

善か、悪か、狂か、兎にも角にも彼女は普通の人間でない、一種不思議の魔力を有つて
いる女の様にも見えた。

お杉に就て安行の知つてゐるのは、先ず此位の程度であつたが、迷信の多い人々の説を
聞いたら、まだ此上にも種々不可思議の実例があるらしい。

こんな話に時の移るのを忘れてゐる中に、庭に囀ずる小禽の声も止んで、冬の日影は余
ほど薄くなつた。

「もうお暇為ようか。」

安行と市郎は暇乞いして、吉岡の家を出た。

(十一)

飛驒といふ詞は巖を意味して、一国の中に山多く、さながら衣に巖多きが如くに見ゆる
所から、昔の人が此国の名を斯く呼んだのである。随つて飛驒と云えば直に山を聯想す
るまでに、一国到る処に山を見ざるは無い。この物語の中心となつてゐる町も村も、殆ど
三方は劍の如き山々に囲れてゐた。

お杉が棲んでいる虎ヶ窟というのは、角川家のある町と吉岡家の居村とを境する低い丘から、約一里の山奥にあつた。一里といえば人里から左のみ遠からぬ処であるにも拘らず、ここは殆ど通路の無いほどに岩石嶮しく峭り立っているのと、昔から此辺は魔所と唱えられているので、かりゆうど 獵夫も樵夫も滅多に通わなかつた。苔蒸す窟は無論天然のものであつたが、幾分か人工を加えて其入口を切り拓いたらしくも見える。奥は真暗で其深さは判らぬ。背後は屏風のような絶壁で、右の方には大なる谷が繞つていた。窟の入口には薄黒い獣の生皮を敷いて、Xという字のように組まれた枯木と生木とが、ほのお 紅い炎焰や白い烟を噴いていた。其火に對つて子然と胡坐を搔いているのは、二十歳ばかりの極めて小作りの男であつた。

何処やらで滝の音が聞えて、石燕が窟の前を掠めて飛んだ。男は燃未了の薪を把つて、鳥を目がけて礮と打つと、実に眼にも止まらぬ早業で、一羽の石燕は打つに随つて其手下に落ちた。男は拾うより早くも其羽を筆り取つて、燃え颯る火に肉を炙つた。やがて落葉を踏む音して、お杉婆は諷然と歸つて来た。男は黙つて鳥を咬つていた。二人共に暫時は何の詞をも交さなかつたが、お杉の方から徐に口を切つた。

「重太郎。何か他に喫べる物は無いか。」

男は彼女の倅の重太郎であつた。其風采は母と同じく異体に見えたが、極めて無邪氣らしい、小児のような可愛い顔であつた。髪を蓬に被つた頭を掉つて、

「何にも無いよ。」

一日や二日の断食は此母子に珍しくもないらしい。お杉は唯首肯して其処に坐つたが、俄に思い出したように少しく詞を改めた。

「重太郎。お前に少し話して置きたい事があるのだ。」

「阿母さん、何だ。」

「妾は既う十日の中に死ぬかも知れない。死んだら必然仇を取つてお呉れよ。」

「可いとも……。どんな奴でも、俺ア必然仇を取つて与る。唯は置くものか。」

重太郎は腕を叩いて潔よく答えたので、お杉も快げに微笑んだ。

「そこで、お前に見せて置く物が有る。今まではお前にも秘して置いたが、此の窟の奥には大切な宝が蔵つてある。何か大事が出来て、お前が何うしても此処に居られない様な場合になつたら、其れを持出して逃るが可い。相当な買人を探して売払えば、お前は乞食を為ないでも済むのだ。」

母は起つて奥へ入ると、重太郎も黙つて其後につづいた。窟の奥は昼も真暗であつたが、

お杉の点すとち一いつち挺ちようの蠟燭ろうそくに因よつておぼろおぼろに明るくなつた。

行くこと七八間けんにして、第一の石門せきもんが有あつた。これから先は路みちが狭く、岩が低くなつて、到底真直とちまっすぐに立つては歩けなかつた。母子おやこともに頭かしらを屈かがめて進むと、更に第二の石門が行手を塞ふさいでいた。蝙蝠かわほりのような怪しい鳥が飛んで来て、蠟燭の火を危あやうく消けそうとしたのを、重太郎は矢庭やにわに引ひつつかんで足下あしもとの岩に叩たたき付けた。

第三の石門には、扉かどのような大きな扁平ひらたい岩が立て掛けてあつて、其下そのしたの裂目から蝦ひ蟻ぎがえるのきように身を縮すくめて潜もぐり込むのである。二人は兎とも角かくも此この石門を這はい抜けて、更に暗くい冷つめたい石室いしむろに入いつた。

「さあ、覗のぞいて御覽ごらん。」と、お杉は蠟燭を高く撃うげた。

石室の隅には広い深い岩穴があつて、穴の遠い底には、風か水か知らず、ごうごうと微かすかに鳴なっていた。若もし一步を誤あやれば、この暗い地獄の底に葬かられねばならぬ。重太郎も足あしも下かを覗のぞいて流石さすがに悚然ぞつとした。

お杉は無言で蠟燭を翳すと、深い岩穴の中腹かとも思われる所に、さながら大蛇の眼の如き金色爛々の光を放つものが見えた。

「判つたか。」と、お杉が蠟燭を退けると、穴は旧の闇に復つて、金色の光は夢のように消えた。重太郎は呆れて立っていた。

「阿母さん、あれは何だい。」

「何でも可い。いざと云う時に持ち出して他に売れば、お前は金持になれるのだ。」
穴の中では猿のような声で、キキと叫ぶ者があつた。

「騒々しい。静にお為よ。」と、お杉は鋭い声で叱り付けると、怪しい声は忽ち止んだ。

お杉は再び無言で歩み出すと、重太郎も黙つて続いて出た。

二人が旧の入口に出た頃には、山峡の日は早く暮れて、暗い山霧が海のように拡がつて来た。重太郎は再び枯木を焚くと、霧は音もせず手下まで襲つて来て、燃え颯る火の光は宛ら紗に包まれたる様に朧になつた。

窟の奥から人か猿か判らぬ者が、ちよこちよこと駈け出して来た。四辺が薄暗いので正体は知れぬが、人ならば先ず十五六歳の少年かとも思われる。髪を颯と振乱して、伸上りつつ長い手をお杉の肩にかけた。小児が親に甘えるように……。

「どこへ行くんだえ。」と、お杉は顧みかえつて、「お前、里へ行くなら頼たのみたい事が有るんだよ。」と、彼の耳に口を寄せた。

怪しの者は首肯うなずいて、忽たちまちひらりと飛び出したかと思える中に、樹根岩角きのねいわかどを飛越とびこえ、跳は越ねえて、小さい姿は霧の奥に隠れて了しまつた。お杉は白い息を吐はいて呵から々と笑つた。

「阿母おつかさん、阿母おつかさん。」と、重太郎は思い出したように声をかけた。

「何だえ。」

「お前は十日の中に死ぬと云つたね。俺おら先刻さつきも約束した通り、必然きつと其仇そのを取る。其代そのりお前にも頼たのんで置くことが有るんだ。お前が居ゐなくつても、俺おらが困こらない様ように……。」

「だから、宝たからの在所ありかを教おえて置おいたじゃアないか。あれさえ有あれば些ちつとも困こることは無いよ。」

「そればかりじゃ無い。」と、重太郎は少しく云い淀よどんで、「あの、俺おらに嫁よめを貰くつて呉くれないか。」

「嫁……。」と、お杉は寂しく笑つた。

「むむ。実は俺おら嫁よめに貰くいたい女おんながあるんだ。阿母おつかさん、知しつてるかい。」

母は黙もつていた。重太郎も流石さすがに面目きまりが悪わるいか、燃未了もえさしの薪たきぎを撥ほじりながら、

「あの、何を……。柳屋にいるお葉という女……。好い女だね。俺ア大好だよ。」
 人か獣か判らぬような生活をしている此の青年にも恋は有った。彼は何日か柳屋のお葉を見染めたものと思われる。お杉は憫れむように我子の顔を見た。

一口に酌婦とは云うものの、お葉は柳屋の一枚看板で、東京生れの気前は好し、容貌も好し、山の中には珍しい粹な姐さんとして、ここらの相場を狂わしている流行児である。恋に間隔は無いと云え、此方は宿無の乞食も同様で、山の兄弟分とも云うべき身の上では、余りに間隔が有り過ぎて、到底お話にも相談にもなる訳のもので無い。けれども、それは普通の人の考える単純の理屈である。小児の時から人も通わぬ此の窟を天地として、人間らしい(?)のは阿母一人で、昔物語に聞く山姥と金太郎とを其のままに、山や猿や鹿嶋蝠を友としつつ、此に二十余年を送り来った重太郎自身に取っては、人間の身分や階級などは、何の値も無いものであった。彼は唯自己の情の動くがままに働くのである。彼がお葉を嫁に貰いたいと云い出したのも、決して不思議でも無理でもない。

「お前がそんなに彼の女が欲ければ、妾がお嫁に貰って上げるよ。」
 お杉は極めて無雑作に受合った。

(十三)

角川安行の父子が吉岡家を辞して、帰途に就いたのは午後四時を過る頃であつた。こちらの冬の日は驚くばかりに早く暮れて、村境を出る頃には足下が漸く暗くなつた。「吉岡のお婆さんは、何だか私が柳屋の女に關係でもあるように思っているらしいので、実に困りましたよ。」と、市郎は歩きながら語り出した。

「それだから気を注げなければ不可い。世間では針ほどの事を棒のように吹聴するのだから……。併し眞実にお前は彼のお葉とか云う女に關係はあるまいな。」

「大丈夫です。決して無いです。」

風は無いが、夜の気は漸々に寒くなつて来た。あなたの丘で狐の啼く声が聞えた。

「明後日は市の立つ日だな。」と、安行は独語のように、「何うか天氣に為たいものだ。」

「そうです。月に一度の市ですから……。」

この時まで主人の後に温和く尾いて来た彼のトムは、猝に何を認めたか知らず、一

声高く唸つて飛鳥の如くに駈け出した。

「トム、トム……。」と、市郎は呼び返したが聞えぬらしい、犬は直驀地にあなたの森へ向つた。市郎も心許なさに其後を追つて行くと、唯ある樅の大樹の蔭でトムが凄しく吠えていた。加之も堆かき枯葉を蹴つて、何者かと挑み闘うように聞えた。

何か知らぬが、猶予はならぬ。市郎は洋杖を把直して、物音のする方へ飛び込んで見ると、もう遅かつた。僅に一足違いで、トムは既に樹根に倒れていた。敵は髪を長く垂れた十五六の少年で、手には晃めく洋刃のようなものを振翳していた。薄闇で其形は能くも見えぬが、人に似て人らしく無い。

「若や山か。」と、市郎は咄嗟に思い付いた。で、先ず其正体を見定める為に、袂から燐寸を把出して、慌てて二三本擦つた。この時、敵は血に染みたる洋刃を揮つて、更に市郎を目がけて飛び蒐つて来たが、其の眼前に恰も燐寸の火が澆と燃ゆるや、彼は電気に打たれたように、猝に刃物をからりと落して、両手で顔を掩つたまま、霎時そこに立縮んで了つた。

この刹那に、市郎の眼に映つた敵の姿は、頗る異形のものであった。勿論、顔は判らぬが、膚は赭土色で手足は稍長く、爪も長く尖つていた。身丈は低いが、小兒かと

見れば大人のようにでもあり、猿かと思えば人のようにでもある。この寒空に全身殆ど裸で、僅に腰の辺に獣の皮を纏うているのみであった。

が、斯う見えたのも一瞬時で、燐寸の火は忽ち消えた。火が消えると同時に、彼は再び強くなった。地に落ちたる洋刃を手早く拾い取って、更に市郎に對つて突いて来た。彼は闇中でも多少は物が見えるらしい。

市郎は透さず第二の燐寸を擦ると、彼は再び眼を掩つた。彼は野獸に均しく、非常に火を恐るるらしい。市郎は勝つに乗つて、続けさまに燐寸を擦ると、敵は既う此方を向く勇氣が失せたらしく、頭を回らして一散に逃げ出した。市郎は何処までもと其後を追つたが、敵は非常に逃足が疾い。森を出抜ける頃には、既に十五六間も懸隔たつて了つた。「畜生……到底駄目だ。」と、市郎は呟きながら引返して来ると、安行も丁度駈付けた。トムは咽喉を深く抉られて、既に息が絶えていた。

「可哀想な事を為しましたな。今の奴は何うも山　らしかったですよ。」

「そうか。」と、安行は低声で云つた。

兎に角、愛犬を路傍に捨てては置かれぬので、市郎は血に染みたるトムの死骸を抱えて起つた。

「市郎、衣類きものが汚れるぞ。」

「けれども、ここへ残して置くのは何だか不安心ですから……。」

自分達が去った後へ、再び山が現われて、トムの屍骸を盗み去らぬとも限らぬ。愛犬の骨を敵に渡すのは、何だか口惜くやしい様ようにも思われるので、市郎は到頭とうとうトムを抱えて帰った。

(十四)

其翌そのあつの日も申分のない天気であつた。霜は日増ひましに深くなつて来るが、朝の日影は麗うららかであつた。

鉾山のお客だとか云う三人連づれが、昨夜ゆうべから柳屋の奥に飲み明あかして、今朝けさも早そうてん天てんから近所構わずに騒いでいたが、もう大抵騒さわぎ草臥くたびれたと見えて、午頃ひるごろには生なまよ酔いも漸だんだ々に倒たれて了しまつた。酌婦しよまの笑い声も聞えなくなつた。内も外も蕭寂ひっそりとなつた。

心さびしや飛驒ゆ行く路みちは

川の鳴瀬と鹿の声

低声こゝえでこんな唄うたを謳うたいながら、お葉は微醉ほろよ酔機嫌かどで門かどに出た。お葉は東京深川生れの、色の稍蒼やや白い、細面ほそおもての、眉の長い女であった。彼女は自ら謳うたうが如く「心さびしい」のであろう、少しく眉を顰ひそめつつ晴れたる空を仰いでいた。

「お葉さん、お葉さん。」

奥から続いて出て来たのは、お清せいという酌婦、色白の丸顔で、お葉よりも二三歳ふたつみつ若く見えた。これも幾らか酔よっているらしい、苦しそうに顔を皺しかめて、

「お前さん、何を見ているの。」

「何、昨夜ゆうべから飲み続けて、余り頭あたまが重いから、表へ些ちつと出て見たのさ。」と、お葉は懶ものうげに答えた。

「ほんとうに鉾山かほりの人は忌いやね。お酒を飲むと、無闇むげんに悪巫山戯わるふざけをして……。それでも鉾山が出来たお庇かげで、ここらも漸だんだん々に賑にぎやかになつたんだと云うから、仕方がないけれど……。

「芋掘いもほりも忌いやだが、鉾掘かほりも忌いやだねえ。どうせ樂たのしみは能できないのさ。こんな商売になつちや

ア仕様がないうよ。好^{すき}なお酒でも飲んで紛^{まぎ}らしているのさ。」

「お前さん此^{このころ}頃は何だか鬱^{ふさ}いでばかり居るね。平生^{ふだん}から陽気な人でも、矢張^{やっぱ}り苦勞がある^あると見えるんだね。」

「呼んでお呉^くれよ。」と、お葉は突然^{いきなり}にお清の腕を掴んだ。

「誰^{たいて}を……。」と、対手^{あいて}は笑った。

「察^{さつ}してお呉^くれな。角川の若旦那を……。お前も知^しつてるじやアないか。」

「何故^{なに}、あれ限^ぎり来ないんだらう。」

「究竟^{つまり}妾^{あたし}達が意^{いき}に適^いらないからさ。けれども、妾^{あたし}ア必然^{きつと}呼んで見せる。昨日^{ちゆうど}も丁度^どここで逢^あつたから、腕を掴んで引摺^{ひきずり}上げて与^やろうと思^{おも}つただけれど、生憎^{あいにく}阿父^{おとつ}さんが一^{いっしょ}所^{ところ}だつたから、まあ堪忍^{かんにん}して置いて与^やつたのさ。嫌^{いや}うなら嫌^{いや}うが可^いい、妾^{あたし}ア必然^{きつと}崇^とつて与^やるから……。」

「だつて、そりやア無理だ。」と、お清は益々^{ますます}笑い出した。

「無理なもんかね。昔^{むかし}から云^いう安珍^{あんちん}清姫^{きよひめ}さ。嫌^{いや}えば嫌^{いや}うほど執念^{しつねん}深く崇^とつて与^やるのが当^{あたりまえ}然^{ぜん}だ^だだね。先方^{むこう}が何^{なに}とも思^{おも}わなくつても、此方^{こつち}が惚^{おぼ}れていりやア仕方がないじやアないか。お前さんは馬鹿^{ばか}だよ、素人^{すねり}だよ。」

お清は対手あいてにならずに、相変らず笑っていた。お葉は口惜くやしそうに、

「今に見ておいて。必然きつとあの人を呼んで、お前さん達に見せ付けて与やるから……。嫌われ
たからと云つて、すすご指を啣くわえて引込ひっこむようなお葉さんじゃアないんだから……。確し
乎っかり頼むよ。」

お清の腕を掴んで又小突こづいた。

「痛いよ。だつて、お前さん。角川の若旦那には判然ちやんとお嫁さんが決きまつてると云うじゃア
ないか。」

「決いつていても可いいよ。そんな悪魔は妾あたしが追おつ攘ばらつて了しまうから……。」

「お前さんの方が余よッ程ほど悪魔だ。御親類わろかも知れないよ。」と、お清は笑いながら不
図と思い出したように、「と云えば、角川の若旦那ゆうべに逢あつたつてね。」

「若旦那が……。まあ而そうして何どうしたの。」と、お葉は俄にわかに真面目まじめになった。

「でも、若旦那の方が強ちやうかつたので、は逃にまげて了しまつたとき。」

「ほんとうかい。担きぐと肯きかないよ。」

「何でも犬は殺されたとき。」

「あ、あの犬が……。可哀想あはれにねえ。お前、ほんとうかい。」

「この人は疑り深いね。ここらじやア今朝から大評判だわ。それを知らない様じやア、お前さんは馬鹿だよ、素人だよ。」

「他真似をお為でないよ。馬鹿……。」

「馬鹿……。」

お清は笑いながら奥へ入つて了つた。人通りの少い往来には、小禽が餌を獵つていた。

(十五)

お葉は其のままふらふらと歩き出した。の噂が何となく意に閑つたのであろう、彼女は他ながら恋人の様子を探ろうとして、行くとも無しに角川家の門前まで来て了つた。門の前には彼の七兵衛老爺が、銀杏の黄なる落葉を掃いていた。横手の材木置場には、焚火の煙が白く渦巻いて、鋸の音に雑る職人の笑い声も聞えた。

お葉は酔っていた。七兵衛の傍へ進み寄つて、馴々しく声をかけた。

「あの、若旦那は昨夜にお逢いなすつたッて、真実ですか。」

「はあ、酷い目に逢いましたよ。」

「怪我でも為すつて……。」

「何、若旦那は何うも為ねえが、大事の洋犬を殺られたので、力を落していなさる様だよ。」

お葉は首肯うなずいて奥を覗いた。七兵衛は無頓着に落葉を掃いていた。

この時恰あたかも市郎の姿が見えた。市郎は庭の空地にトムの亡骸なきがらを葬り了つて、鍬を片手に奥の方へ行くらしい。お葉は其姿を見ると共に、有合ありあう小石を拾つて投げ付けると、礫つぶては飛んで市郎の袂たもとに触れた。振返ふりかえると門前にはお葉が立っている、加之も笑を含んで小手招てまねぎをしている。市郎も其の図迂ずうずう図迂ずうずうしいのに少しく惘あきれた。

前にも云う如く、市郎が冬子の兄忠一と連立つれだつて、彼の柳屋に遊んだのは、今から三四ヶ月前のことで、それも唯一ただ度、別に深い馴染なじみというでもないのに、其後はお葉が兎とかく附纏つきまとつて、往来で逢えば馴なれなれ々ことばしく詞をかける。あわ好よくば自分の家へ誘い込もうとする。随したがつて根も葉もない噂も立ち、吉岡の母にも有らぬ疑うたがいがい惑まどを受けうける様ようになった。実に馬鹿馬鹿しい。身の潔白を立てる為には、今後何処どこで行逢ゆきあおうとも決して彼女かれとは口を利くまいと、窃ひそかに決心している矢先へ、恰あたか彼のお葉が現われた。加之も先方むこうから真白まっびるま昼押掛おしかけて来て、平氣でお出いでお出いでを極めるとは、図迂ずうずう図迂ずうずうしい奴、忌々いまいましい奴と、市

郎は惘れを通り越して、稍勃然とした。

見ればお葉は嫣然して、相変らず小手招ぎをしている。市郎は黙って霎時睨んでいた。

「何故そんな怖い顔をして被在るの。妾、じゃなくつてよ。妾罰で、貴下はに酷い目に逢つたと云うじゃありませんか。」

お葉は首を掉るようにして、ははははと高く笑つた。彼女は酒の強い方であつたが、昨夜以来飲み明かした地酒の酔は漸次に発したと見えて、今は微酔どころでない。

「老爺や。其女を追つ攘つて了え。」と、市郎は声を暴くして云つた。

「お前は酔っている様だ。早く帰らッせえよ。」と、七兵衛は箒を輟めて顧つた。

「大きにお世話よ。後生だから若旦那をここまで呼んで来て頂戴。」

「そんなこと云わねえで、帰らッせえと云うのに……。」

「どうしても呼んで呉れないの。」

「不可ねえと云つたら……。」

この押問答の中に、市郎は奥へつかつかと入つて了つた。

「若旦那……市郎さん……。」

お葉も続いて内へ入ろうとするので、七兵衛は驚いた。

「どこへ行くのだ。」

「若旦那に逢わして下さいよ。」

「馬鹿云うものでねえ。」

一酷老翁いっこくおやじの七兵衛は、箒で手暴てあらく突き退のけると、酔よっているお葉は一堪ひとたまりもなく転んだ。だらしなく結んだ帯は解とけかかって、掃はきき寄せた落葉の上に黒く長く引いた。「随分酷いのね。」と、お葉は落葉を掴おきんで起上あがつたが、やがて畜生ちきしょうと叫んで、其葉そのを七兵衛の横よこ面に叩たたき付けた。眼潰めつぶしを食くつて老翁じじいも慌あわてた。

「阿魔あま、何をするだ。」

腹立はらたちまき紛まれに箒とりを取直なおして、お葉の弱腰はたを礎なと薙なぐと、女は堪たらず又倒れた。

「あら、老翁じいさん。どうしたの。」

優しい声に驚おどいて願みかえった七兵衛、俄にわかに色やわらを和なめて、

「や、吉岡の嬢様……。被入いらせえまし。」

市郎が途中でわろに襲おそれたという噂は、早くも隣村まで伝えられたので、吉岡の家でも甚だ心配して、冬子が取敢とりあえず見舞に來たのであつた。來て見ると此この始末で、仔細わは知らぬが七兵衛老爺じしの箒もとの下に、一人の女が殴り倒されているので、制めとずには居いられぬ。

「老爺じいさん、まあ其そんな乱暴なことを為しないで……。一体、どうしたの。」

「何、この淫売婦じごくおんなが家の若旦那うちを呼び出しに來たから、追つ攘ばらつて了しまう所で……。」「

「若旦那を呼び出しに……。若もしや柳屋の……。」「と、冬子は眼を輝かしてお葉はつを凝じつと視みた。お葉は落葉の上に倒れていた。

「そうですがすよ。」と、七兵衛は首肯うなずいて、「お前めえ様よく知つていなさるね。這奴こいつ、若旦那を釣出つりだそうと思つたつて、然そうは行かねえ。」

七兵衛は憎さげみかえに顧ねたつた。冬子も嫉ねたげに顧ねたつた。この四つの眼に睨よこたまれたお葉は、相變らず落葉を枕まくらにして、死んだ者のように横よこたわつていた。

「酔よつている様ようね。」と、冬子は少しく眉ひそを蹙ひそめた。

「這奴こいつら等ア毎日毎晩、酒ばかり食くらつているのが商しょう売うだからね。お前めえ様も用心しなせえ。こんな阿魔あまが蛇へびのように若旦那を狙ねらつているんだから……。」「

「何しろ、何どうか為しなくつちやア不可いまい。兎とも角かくも起おこして与やつて……。」「

「さあ、さあ、寝た振なんぞ為ねえで、起きろ、起きろ、横着な阿魔だ。」

口小言を云いながら、七兵衛は進んでお葉を抱え起そうとすると、彼女は其手を跳ね退けて衝と起つた。例えば疾風落葉を巻くが如き勢いで、さつと飛んで来て冬子に獅噛付いた。あれと云う間に、孱弱い冬子は落葉の上に捻倒されると、お葉は乗し掛つて其の底髪を掴んだ。七兵衛は胆を潰して、直に背後から抱き縮めたが、お葉は一旦掴んだ髪を放さなかつた。

「阿魔、放せ。嬢様を何うするだよ。」

七兵衛は息を切つて制したが、お葉は唯冷笑うのみで何とも答えなかつた。余りの意外に驚いたのであろう、冬子は声をも立てなかつた。

「これ、馬鹿為るでねえ。放さねえか。」と、七兵衛は無理に其手を引放そうとしたが、お葉の握つた拳は些とも弛まなかつた。彼女は冬子の前髪を掴んだままで、凝と対手の顔を睨んでいた。

寂しいと云つても往来である。この騒ぎを見て忽ち五六人駈け付けた。材木置場からも職人が駈出して来た。大勢寄つて兎も角も二人を引き起したが、何うもならぬのはお葉の手であつた。彼女の石の如き拳は、如何までも冬子の黒髪を握り詰めて放さなかつた。

大勢は声を揃えて「放せ」と叫んだが、お葉の口は決して答えなかった。大勢が力を協あわせて、無理に引放ひきはなそうとしたが、お葉の拳は決して開かなかつた。彼女かれは黙つて冬子の髪を掴んでいるのである。

打ぶつても叩いても仕方がない。此このうえ上は、お葉の白い手を切るか、冬子の黒い髪を切るか、二つに一つを択えらぶの他ほかは無かつた。

「強情な阿魔だなあ。」

何いずれも惘あきれて顔を見合せている処へ、この騒さわぎを聞いて市郎も奥から出て来た。人々から委細の話を聴いて、彼も驚かすには居られなかつた。お葉の傍そばへ進み寄つて、

「お前、何故そんなことをするんだ。」

お葉は初めて口を開いた。

「此これ女はあなたのお嫁さんでしょう。」

市郎は返事に困つた。

「妾あたし、死んでも放しませんよ。」

実際、死んでも放すまいと思われた。掴まれた冬子はと見れば、不意の驚おどろ愕おそと恐怖おそれとに失神したのであろう、真ま蒼さおな顔に眼を瞑とじて、殆ど息も為しない。酔よも漸しだ次に醒さめたと

見えて、お葉の顔も蒼くなつて来た。

見物人は追々に殖ふえて来た。柳屋のお清も駈けて来たが、唯ただわやわや云うばかりで手の着つけようがない。其その雑踏ひじごみを掻き分けて、ぬつと顔を出したのは彼かのお杉婆しばあであつた。彼女かれは例の如く黄きいろい齒むきだを露出して笑つていた。

(十七)

前にも云う如く、お葉が角川家の前に来たのは、別に深い意味があるので無かつた。

の一件き惹きにかかると、二つには何と無しに此地こちちの方へ足が向いたと云うに過ぎないのである。けれども、彼女かれは酔つていた。酔よに乗じて種いろ々の捫もん着ちやくを惹ひき起おこしている中に、折おり悪あしくも其処そこへ冬子が来合あはせてしたので、更にこんな面倒な事件を演し出だす事となつて了しまつた。

恋の仇かたきと睨にらまれた冬子の災難は云うまでもないが、市郎もこれには頗すこぶる弱よつた。この場合あに理屈を云つても仕方がない、嚇おどしても仕方がない、こんな狂きちがい気染いじみた女なは宥なだめて還かへすより他はあるまいと思つた。

「お葉さん。何しろ、この通り人立がしては、お前も外聞が悪かろうし、私の家でも迷惑するから、まあ堪忍して呉れ。此方に不都合があるなら、何んなにも謝るから……。」

お葉は冷笑つて答えなかつた。

「ね、後生だから堪忍して与つて呉れ。必然お前の意の済むようにするから……。」

迂濶口を滑らせると、黙つていたお葉は屹と顧つた。

「妾の意の済むようにするんですね。」

否とも云われぬ、市郎は首肯いた。

「じゃア、二度と此の女をこの家へ入れないようにして下さい。若し此の女がこの門を潜つた所を見ると、妾は何日でも押掛けて来て、頭の毛を一本一本引ツこ抜いて与るか、然う思つてお在なさい。」

無理は最初から知れているが、一時逃れに市郎は承知した。

「可、可。それだから最う堪忍して与つて呉れ。頼むから……。」

「必然ですね。」

「むむ、必然だ。間違はない。」

市郎は心にもない誓を立てた。これで漸く意が済んだのであろう、お葉は勝利の笑を洩

して、掴んだ手を初めて弛めようとする時、お杉婆が衝と寄つて来て、例の凄愴い顔をぬツと突き出した。

「いや、不可い、不可い。それは嘘だ。」

「え。嘘だ……。」

市郎も驚いて顧ると、怪しの婆は傍若無人に呵々と笑つた。

「此娘を二度とこの家へ入れないと云うのは嘘だ。お前の顔に判然と書いてある。はは

ははは。」

「喧しい、引込んでいろ。」と、市郎は疔癩を起して呶鳴付けた。

「ははははは。怒つても駄目だ。お前の嘘は妾が知っている。お前も此の娘も相互に惚れ合っている。どうして二度と逢わずに居られるものか。ははははは。」

忌々しいとは思ふけれど、婆の云うことは確に眞実である。市郎も少しく怯んだが、ここで弱味を見せては落着が付かない。

「ええ、貴様の知つたことじゃアない。余計な口を出すな。彼方へ行け。」

「はは、妾はお前に云っているのじゃアない。このお葉さんに教えて与っているのだ。お前さん、意をお注けよ。幾ら何うしたつて、この男と娘とは離れるんじやアないからね。」

お葉の火の手が折角鎮まりかかった処へ、又もや斯んな狂氣婆が飛込んで来て、横合から余計な藁を炙べる。重ね重ねの面倒に小悶の来た市郎は、再び大きい声で呶鳴付けた。

「喧しい、煩さい。もう彼方へ行け。」

「ははははは。」

お杉は嘲るように高く笑った。如何にも他を馬鹿にした態度である。もう斯うなつては我慢も堪忍も能ぬ。市郎の疝癩は一時に爆発した。

「彼方へ行けと云うのに……判らないか。おい、這奴を彼方へ引摺って行け。」

左右を顧つて又呶鳴つたが、直には声に応ずる者もなかつた。これが余人ならば知らず、一種の魔力を有っているかの様に思われているお杉婆に対つて、迂濶に手を下すのは何だか不気味でもあるので、何れも眼と眼を見合わして、真先に進んで出る勇者を待っていた。この臆病者等が怯んで動揺めく醜態をじろじろ見廻して、

「ははははは。」

お杉は又もや凱歌の笑声を揚げた。

(十八)

この時、群集を押分けて、捫着の中へ割つて入つたのは、駐在所の塚田巡查。年の壯い、色の黒い、口鬚の薄い、小作りの男であつた。

彼は職掌柄、平生からお杉婆に就ては注意の眼を配っている処へ、恰もこの騒動を見付けたのであるから、容赦は無い。

「こら、お前はここへ来て何をして居る。この家の迷惑になるから、早く立去れ。」

お杉は依然笑つて答えず、腰にぶら下げた皮袋から山毛櫨の実を把出して、生のままで悠悠と咬り初めた。

「実に困るんです。どうか追攘つて頂きたいもので……。」と、市郎も口を出した。

「よろしい。」と、巡查は首肯いて、「さあ、早く行け。他の迷惑になるのが判らんか。斯ういう所に何時までもぐずぐずしていると、道路妨害で引致するぞ。」

相手は相変らず平気で笑つているので、巡查も少し悶れ出した。

「こら、行けと云うのに……。何故ぐずぐずして居るのか。判らん奴だ。」

お杉の瘦腕を掴んで一つ小突いたが、彼女は些とも動かなかつた。見掛は枯木のよう

でも容易に倒れない、さながら大地に根が生えたように突ッ立っていた。巡査はいよいよ悶れて、力一ぱいに強く曳くと、彼女も流石に一一足ばかり踉蹌いた。

「さあ、行け、行け。」

突遣つても又ふらふらと戻つて来る。市郎も見兼ねて突き戻した。巡査も亦突き戻した。血気の男二人に、突き戻され、押遣られて、強情なお杉も漸次に後へ退つたが、やがて口一杯に啣んだ山毛櫨の実を咬みながら、市郎の顔に向つてふツと嘖き付けた。

市郎はあツと顔を押えながら、腹立紛れの殆ど無意識に、お杉の胸の辺を強く突くと、彼女は屏風倒しに撲地と倒れた。袋の山毛櫨は四方に散乱した。

この騒ぎを聞き付けて、安行も奥から出て来た。

「こりやア一体どうしたのだ。」

人々はわやわや云いながらお杉の周囲に群れ集ると、婆は齒を食縛つて正体もない。巡査は小膝を突いて抱え上げた。

「偽死でもないらしい。急所でも打ったかな。」

市郎も立寄つて検めた。彼は医師である。左右の人々に吩咐けて、兎も角もお杉を我家へ昇き入れさせた。

けれども、お葉の方はまだ埒が明かぬ。彼女は依然として生贄の冬子を掴んでいるのであった。市郎は気が気でない。忙しい中にも駈け寄って、

「この通りの始末だから、委しいことは後で話す。兎も角も今日の処は何うか堪忍して呉れ。」

拝むようにして只管頼むと、お葉は誇りがに首肯いた。

「可ござんす。じゃア、先刻の約束は忘れませんね。」

「忘れない、必然忘れない。」

お葉は初めて手を弛めた。荒鷲の爪から逃れ出た温め鳥のように、冬子は初めてほつと息を吐いたが、髪を振り乱した彼女の顔には殆ど血色を見なかった。

それも関心ではあるが、猶一方には気を失っているお杉が有る。市郎は倉皇として内へ駈込んだ。塚田巡査も続いて入った。

お杉は南向の縁側に横えられた。市郎の人工呼吸其他の応急手当が効を奏して、彼女は間もなく息を吹き返した。

「どうだ、既う気が注いたか。」と、巡査が問うた。

「何、死ぬものか。」

ひとりごと
 独語のように云つて、お杉は轟然と起ち上つたかと思つた中に、左右の人々を一々睨め廻しながら、彼女はふらふらと歩き出した。加之も今の騒動は忘れたように、諷然と表へ出て行つた。居合わす四五人は其後を尾けて行くと、お杉は顧りもせず、町の真中を悠々と歩いていった。

町の尽頭まで来た時に、お杉は初めて立止つた。尾行して来た人々も既う散つて了つた。お杉は柳屋の門に寄つて、皸枯れた声で、

「お葉さん、居るかい。」

(十九)

思うがままに恋の仇の冬子を呵責んだお葉は、お清に扶けられて柳屋へ歸つた。

「お前さん、随分酷いことを為たねえ。」

「ああ、これで清々した。」と、お葉は酔醒の水を飲んだ。お清は惘れて其顔を眺めている処へ、彼のお杉婆の声が聞えたのである。

「お葉さん……お葉さん。」

わが名を呼ばれて、お葉はふらふらと起つた。お清は慌てて其袂を曳いた。

「お止しよ、お前さん、もう外へ出るのは……。あんな奴にお構いでないよ。」

「お葉さん。」と、外では又呼んだ。

「あいよ。」

お葉はお清を突き退けて、門へ出た。門にはお杉が笑いながら立っていた。

「お前さん、少し話があるから一所に来てお呉れでないか。」

「あい、行きますよ。」

お葉は弛んだ帯を結び直して、店口みせぐちに有合う下駄を突ツ掛けると、お清はいよいよ危あやぶんで又抑留ひきとめた。

「お前さん、どこへ行くんだよ。」

「可いいよ、うるさい人だねえ。」

「早くお出いでよ。」と、外では又呼んだ。

「あい、あい。」

お杉は瘦せた手をあげて差招さしまねくと、お葉は宛さながら死神の迎むかいを受けた人のように、唯ただふらふらと門かどぐち口へ迷い出た。お清もつづいて追つて出ると、婆ばばは徐あしずかみかえに願ねがって、

「お前に用は無いよ。」

鋭い眼でじろりと睨まれて、気の弱いお清は思わず立縮んだ。其間にお杉は出て行く。お葉も後から躡いて行つた。正午に近い冬の日は明るく晴れて、蒼い空には黒い鳥の一群が飛んで渡つた。

お葉は酒の酔が未だ醒めぬのかも知れぬ、或は何かの夢か幻を視ているのかも知れぬ。兎にかくお杉婆の魔力に引かれたように、殆ど無意識でふらふらと歩いていた。彼女は一種の催眠術に罹つた人の様であつた。

町を歩き尽して村境に出た。昨夜トムととが鬪つ樅の林を過ぎると、路は爪先上りに嶮しくなつて来た。落葉松や山毛櫨や扁柏の大樹が日を遮つて、山路は漸次に薄暗くなつて来た。何処やらで猿の声が聞えた。

天正十三年、所謂「飛驒の三方崩れ」という怖るべき大地震が、ここら一帯の地形を一変して、麓近い路にまで剣なす岩石が突出した。其中には怒れる人の顔のような真蒼な岩もあつた。百千人の生血を灑ぎ掛けたような真赤な岩もあつた。岩と岩の間は飛んで渡るより他はない、二人は蛇のような山蔦の太い蔓に縋つて、宛ら架空線を修繕する工夫のように、宙にぶら下りながら通り越した。

お杉は通い馴れた路であるから不思議はないが、お葉が何うして此の難所を跳越え、渡り越えたかは疑問である。恐く夢のようで自分にも判るまい。

虎ヶ窟の入口には彼の重太郎が佇立んでいた。其の傍には猿のような、小児のような、一種の怪しい者が蹲踞んでいた。

「帰つて来たよ。」

お杉が声をかけると、重太郎は無言で顧つた。母の後には、帯も裳もしどけなく、脛も露出に立つたお葉の艶なる姿が見えたので、重太郎は山猿のような笑い声を出して、猶予なく其前にひらりと飛んで行つた。怪しい者も同じく叫んで、後から続いて行こうとすると、忽ちお杉に叱られた。

「お前は彼方へ行つてお出よ。」

怪しい者は小さくなつて、窟の奥へ逃げ込んで了つた。お葉は茫然と立っていた。重太郎も黙つて其顔や容に見惚れていた。

山風がどつと吹き下して、岩と岩との間を掻き廻すと、そこらに積っていた真赤な落葉は、さながら火粉を散らす如くに、はらはらと乱れて飛んだ。

(二十)

お杉が去り、お葉が去つた後の角川家は、所謂大風の吹いた後であつた。塚田巡査も近所の人々も漸次に歸つて了つた。

冬子も一時は失神の状態であつたが、これも市郎の手当に因て回復して、南向の座敷に俯向いて坐つていた。傍には安行と市郎の二人が同く黙つて坐つていた。

「冬子さん、何うだね。気分は既う悉皆快いのかね。」と、安行は霎時して口を切つた。

「はあ、有難うございます。お庇さまで、もう悉皆快くなりました。」

とは云つたが、冬子の顔は未だ蒼ざめていた。市郎は心許なげに、

「ほんとうに既う快いんですか。まだ血色が不良いようだが……。何しろ、飛んだ災難でお気の毒でしたねえ。」

冬子は黙つて俯向いていた。

「災難……実に飛んだ災難だつたよ。」と、安行も首肯いて、「あんな狂気染みた奴が飛び込んで来るといふのは、何う云う訳だろう。私が早く知つたら、何とか無事に納めた

のだが、あの七兵衛めが一酷いっこくなことを云うもんだから、到頭とうとうあんな騒ぎを演出しで来て
了しまつて……。そこへ出ツ食くわした冬子さんは、実に運うが悪あかつたのだ。それでも怪我けがを為しな
いのが勿怪もつげさいわいの幸さいで、大事の顔かほへ疵きずでも付つけられようものなら、取返とりかえしが付つきやアしない。
何しろ、お葉とか云う奴は呆ふれた女だ。」

「實際、呆ふれた奴ですなあ。あれも少し氣きが触ふれているんじゃないやありませんか知ら。黝すくく
もヒステリー患者ひステリーですな。」と、市郎も眉まゆを蹙ひそめた。

「何どうして又、ヒステリーに罹なつたんでしよう。」と、冬子は不意に顔かほを擡あげた。お葉に
掴つかみ毀こわされた前髪ひざしの庇くすは頰ほれたままで、搔かき上げもせぬ乱れ髪かみは黒幕くろまくのように彼女かれの蒼い顔
を鎖とぎしていた。其その中なかから輝きらくのは葉末はすえの露つゆの如ごとき眼まなこの光ひかりであつた。

「さあ、何どうしてと云つて……。」と、市郎も考かんえて、「ああ云う女おんなには能よくあるんです
よ。其その上に酒さけにも酔よつている様ようでしたから……。」

「酔よつているばかりでも有ありますまい。妾わたくしが二度と御当ごち家ちやへ来こればあの人が又また暴あれて来こ
そうですね。あの人は何故なにそんなに妾わたくしを恨にくんでいるんでしょう。妾わたくしには些ちとも訳わけが判わりま
せん。」

口くちでは「判わりません」と云いうけれども、冬子は大抵たいてい推量すいりやうしている。自分達おやこ母子ぼしが予かねて疑う

つてゐる如く、お葉という女は市郎と情交わげがあるに相違ない。左もなければ自分に対して、あんな乱暴を働く筈がない。市郎が婚禮延期などを主張するのも、畢竟ひつきようは彼の女を恐れている為であろう。自分の夫たるべき男を他に奪ひとられて、加之おまけに自分が斯こんな酷ひどい目に逢うとは、債権者が債務者から執達吏しつたつりを差向さしむけられたようなもので、余りに馬鹿馬鹿しい理屈である。自分には何の科とがが有つてこんな理非顛倒りひてんとうの侮辱を受けるのであろう。考えれば考えるほど、冬子は口惜くやしくつて堪たまらなかつた。

けれども、彼女も若い娘である。流石さすがに胸一杯の嫉妬うらみと怨恨うらみとを明白あからさま地には打出うちだし兼ねて、先まず遠廻ましに市郎を責めているのである。自分が折角見舞に來た の問題などは、もう何どうでも可いいことになつて了しまつた。

「いや、誰にも判りませんよ。彼の女は云う通りのヒステリー……究竟狂人つまりきちがいも同様なんですから……。」と、市郎は嘆息するように答えた。

「でも、狂人きちがいになるには何か仔細わげがあるでしょう。」と、冬子は目眦まなじりを昂あげて追つい窮きゆうした。

「余あんまり酒でも飲み過ぎたんでしよう。」

「そうでしょうか。」と、冬子は少しく冷笑あざわらつて、「あなたは其原因そのを御存知ないんで

すか。」

「知りません、一向知りません。」

「知らない筈は無いでしよう。」

冬子の声が稍鋭く聞えたので、市郎も聊か面食つて思わず其顔を屹と視ると、露の如き彼女の眼は今や火のように燃えていた。

「ああ、判つた。あなたは僕を疑っているんですね。それは冤罪です、全く冤罪です。

昨日も云う通り、僕は唯つた一度彼家へ行った限りで、あの女と何等の関係も無いんです。先方では何う思っているか知らんが、此方は清浄潔白です。」

「それならば何故あんな乱暴を為たのだろう。可怪いな。」

父も我子の味方ではなかつた。

(二十一)

お葉の問題に就て市郎を責めるのは、實際気の毒であつた。本人が自白する通り、過ぎし夏に冬子の兄忠一が帰郷した砌、若い同士が連れ立って唯一度彼の柳屋へ遊びに行った

ことが有る。忠一は元氣の好い男で、酔って随分騒いだ。市郎も温順くしては居なかつた。けれども、二人ながら唯酔つて騒いで帰つた丈のことで、別に後日の面倒を惹起すような種は播かなかつたのである。

右の通りで、此方では何の種も播かなかつたが、結局は此方が自ら刈らねば成らぬような羽目に陥つたのは、市郎の不幸であつた。此方には何の考慮もなかつたが、恋の種はお葉の胸に播かれた。東京の深川に生れて、十六の年から神奈川、豊橋、岐阜と東海道を股にかけてウエンチ生活の女が、二十三という此年の夏に初めて眞の恋を知つた。

市郎は其後再び柳屋の門を潜らなかつたが、元來が狭い町で、恋しい人の家屋敷は眼と鼻の間にあるのだから、女は男を呼び出す術が無いでもなかつた。況てお葉は男を恐れるような弱い女では無かつたが、恋に柔げられた此女は日頃の気性に似も遣らず、自分の男を捉えて来ることは躊躇して、唯往來で折々逢う毎に、馴々しく詞をかける位を切てもの心遣りに、二月三月を過す中に、飛驒の涼しい秋は早くも別れを告げて、寒い冬の山風が吹いて來た。柳屋の門の柳が霜に瘦せると共に、恋に悩める女にも漸次に瘦が見えた。持病のヒステリーも嵩じて來た。果は酔うて狂うて、前の如き椿事を演出したのである。

けれども、其^{その}対^あ手^ての市郎は云うに及ばず、父の安行も周囲^{まわり}の人々も、お葉の恋を斯^かばかりに熱烈なるものとは想像し得なかつた。昔から世間に能^よくある習^{ならい}で、田舎のお大^{だい}尽^{じん}を罫に掛ける酌婦の紋切形であろう位に、極めて単純に解釈していた。況^{まし}て市郎は、最初^{はじめ}から彼^かのお葉という女を意中^{おろか}は愚^{おろか}、眼中にも置いて居なかつたのであるが、今日の一件に出逢^{いさざ}つて聊^{いさざ}か意外の感を作^なした。固^{もと}より半^{はん}狂^{きやう}氣^きの酒乱のような女が、何を云うか判^わつたものでは無いが、彼女^{かれ}は自分の未来の妻たるべき冬子に対して、一種の根強い嫉妬心を懷^{いだ}いているのは事実らしく、加^{しか}之^もも自分に対しても、二度と此^この女をここの家^{うち}へ入れるなど誓^{ちか}わしめたのを見ると、其^{その}底^{そこ}意^いは善^よか悪^{わる}か知らず、兎^とにかく自分に対して何等かの執着心を有^もつているらしく思われる。随^{したが}つて、冬子にも疑^{うたが}われ父にも怪^{あやし}まれるのも無理はない。

「この疑^{うたが}惑^{がい}を何^どうして解^とくか。」

市郎も考^{かん}へた。が、彼^かの柳屋に就^つて事實の有無を証^{しやう}拠^こ立^たてるより他に仕様もない。

「じゃア、阿^お父^{とつ}さんと冬子さんと三人で柳屋へ行^いつて、私^{わたし}が其^{その}後^ご遊^{あそ}びに行^いつたことが有^あるか無^ないか訊^きいて見^みましよう。」

「馬鹿^{ばか}な。」と、安行は叱^{のたま}るが如^{ごと}くに苦笑^{くわう}いした。「親^{おや}と一^{いっ}所^{しょ}に訊^ききに行^いつたつて、先^ま方^{かた}で真^ま実^{じつ}のことを云^いうと思^{おも}うか。」

これは至極道理である。市郎も叱られて閉口して了った。冬子も声を顫わして、「妾は死んでもあんな家へは行きません。」と云った。これも道理である。

「だが、お前は真実にお葉という女と関係は無いんだな。」と、霎時して父は問うた。「實際です、實際関係は無いんです。」

市郎は之より他に、自分の潔白を表明すべき詞を知らなかった。わが子を信ずる安行は僅に首肯いたが、疑惑と嫉妬とが蟠まれる冬子の胸は、まだ容易に解けそうにも見えなかつた。

「冬子さん。」と、安行は声を和げて、「倅も此の通り云うんだから、よもや嘘じやありませんまい。で、今日のことは阿母さんが心配しないように、能く云って置いて下さい。何れ私からも委しいお話を為ますから……。」

差当り斯んなことを云つて、冬子を宥めるより他は無かつた。冬子も何時まで憤つても居られないので、解けぬ疑惑を懐いたままで、やがて我家へ帰る事となつた。が、途中が何となく不安である。

「可、私と七兵衛とで送つて上げよう。」

安行と七兵衛は冬子を送つて出た。

(二十二)

虎ヶ窟の前に立つたお葉は、雲しぼらく時夢のようであった。襟えりに沁しむ山風に吹き醒さまされて、少しく正氣かえに復かえつて見ると、自分の白い手は人か山やまわろか判らぬような重太郎に掴つかまれていた。お葉は驚いて慌ふりはなてて振ふり放はなした。

「重太郎、お前のお嫁うなずさんを連れて来たよ。」と、お杉は笑いながら云った。重太郎も笑えみを含うんで首肯うなずいた。

飛とんでもない話である。誰がこんな奴の嫁になるものかと、お葉は寧むしろ可笑おかしくなった。が、これ之に伴う不安が無いでもなかった。さりとして逃げる訳にも行かぬ。彼女は相変らず黙もくつて立たつていた。

「お葉さん。お前は倅せがれの嫁よめになつて呉くれるだろうね。」と、お杉は徐しずかに問うた。

お葉は矢やはり黙もくつていた。重太郎は堪たまり兼ねて又飛とんび付つこうとするのを、母は制かして、「まあ、お待ちよ。ねえ、お葉さん。妾わたしたち達も時々ときに町へ出るから、お前さんとも予かねてお馴染なじだが、妾わたしたち達は二十年このかた以来いこの窟いわやに棲すまんで、山やまと所いっしょに暮くしている。けれども、妾

の倅の重太郎は　じゃアない是これでも立派な人間だ。其その人間の重太郎がお前さんに惚れたのも無理ではあるまい。そこで、是非お前さんを嫁に貰くつて呉くれと云うから、今日お前さんを選んで来たのだ。何どうぞまあ仲好くしてお呉くれよ。」

云う人は極めて真面目であるが、云われる方は余り馬鹿馬鹿しくて御挨拶でが能できぬ。お葉は唯とある岩角に腰おろを卸おろして、紅い木葉このはを弄いじつていた。

重太郎は漸だんだん々に熱あつして来たらしい、又飛とび菟かかつてお葉の手を捉とろうとするのを、母は再さいび遮さえぎつた。

「そんなことをすると、お葉さんに嫌われるよ。ねえ、お前さん。ここまで一所に来る位だから、肯きいて呉くれるのだろうね。」

「妾あたしはそんな意つもりで来たんじゃありません。」

「それじゃア何なにしに来た。」

「お前さんが呼よんだから……。」

「呼よばれて来るからには、承知しやうちだろう。」

「いいえ。」と、お葉は頭かぶりを掉ふつた。

併しかし斯こうなると、お葉も我ながら判わからなくなつて来た。自分は何の為にここまでお杉に

附いて来たのであろう。呼ばれたから来た……とばかりでは、余りに他愛が無さ過ぎる。何か他に相当な理屈が無ければならぬ。が、何う考えても夢の様で、何の為に悪所絶所を越えて斯んな処へ入込んだのか、其理屈は一切判らぬ。まだ酒に酔っていた故か知らず、無理に理屈を付けても見たが、それも何だか覚束ない様にも思われた。

酒の酔も醒め、ヒステリーの発作も漸く鎮つた今の彼女は、所謂「狐の落ちた人」のように、従来^{これまで}の自分と現在の自分とは、何だか別人の様にも感じられた。

お杉は又もや徐に問うた。

「お前さん、重太郎が忌なのかえ。」

問わずとも判つた話だ。お葉は矢はり黙っていた。

「何故、忌なのだえ。」

お葉は相変らず俯向いていた。

「はは、判つた。お前は彼の市郎に惚れているのだろう。無効だからお止しよ。先方じゃアお前を嫌い抜いているのだから……。」

「嫌われていても可ござんすよ。」と、お葉は屹と顔を上げた。

「嫌われても思いを通すというのかえ。それは道理だ。が、お前が市郎に嫌われても、

自分の思いを通そうと云うのと同じ訳で、重太郎も幾らお前に嫌われていても、必然自分の思いを通すよ。然う思ってお在。」

お杉は嬌然笑つていた。

逃げようと思つても逃げられる筈は無い。傍には重太郎が獣のような眼を晃らして見張つている。窟の奥には山らし怪物も居る。路は人間も通わぬ難所である。こんな処へ導かれて来て、こんな怪物共に取囲れたからは、自分の智恵や力で自分の運命を左右する訳には行かぬ。運を天に任すと云うのは、洵に今のお葉の身の上であつた。

(二十三)

窟の中から怪しい者の影が又現れた。加之も二つ、うす暗い奥から此方を覗いていたが、やがて入口の方へちよこちよこ駈出して来た。

「わろが又来たよ、煩さいねえ。」と、お杉は重太郎を顧つて「少し焚火をお為よ。」

重太郎は燐寸を有つていた。有合う枯枝や落葉を積んで、手早く燐寸の火を摺付けると、澆々云う音と共に、薄暗い煙が渦巻いて颺つた。つづいて紅い火焰がひらひら動いた。

火の光を見ると、怪しい者共は俄に恐れたらしい。キキと叫んで、早々に窟の奥へ逃げ込んで了った。

「お葉さん、寒いだろう。此方へ来てお当りな。」と、お杉は徐に焚火の傍へ寄った。お葉は岩に腰をかけたままで、返事も為なかつた。

「幾らお前が強情を張った所で、一旦ここへ連れて来た以上は、もう帰す気配いはないから、其意で悠々してお在。夜も寒くない様に、毛皮も沢山用意してあるから……。」
大事の花嫁さんに風邪でも引かせると大変だからね。ははははは。――

焚火はいよいよ燃え上つて、其の紅い光は、お杉の尖った顔と、重太郎の丸い顔と、お葉の蒼い顔とを鮮明に照した。

昼も暗い山峡では、今が何時頃だか判らぬ。あなたの峰を吹き過ぐる山風が、さながら遠雷のように響いた。

三人は霎時黙っていた。やがてお杉は轟然と起った。

「お葉さん、何を考えているんだえ。もつと此方へお出でよ。」
相手は矢はり黙っているので、お杉は笑いながら其傍へ歩み寄った。

「判らない人だねえ。何でも可いから妾の云うことを肯いて、素直にここの人にお成りよ。」

お前が惚れている市郎も、今にここへ連れて来て上げるから……。可いだろう。」

「若旦那がここへ……。」

「ああ、妾が必然きつと連れて来て見せるから、温おとなし順くして待つてお在いで。え、それでも忌いやかえ。ねえ、お葉さん、確しつかり乎返事をお為よ。」

お杉は窪んだ眼を異様に輝かして、対手あいての顔を穴の明くほど凝じつと見詰めると、お葉は少しく茫ぼうとなつて来た。

「え、判つたかえ。」

低声こゝえに力を籠めて云うと、お葉は小児こどものように首肯うなずいた。彼女は漸次しだいに酔つて来たように感じた。

「可いいかえ。はいと返事をお為し。」

「はい。」

「重太郎のお嫁になるかい。」

「はい。」

お葉は夢心地で答えた。

「可よし、可よし。さあ、妾と一いっしょ所にお出いで。」

進んで其手を把ると、お葉は拒みもせず、にふらふらと起ち上つた。お杉は此の捕虜を窟の暗い奥へ連れ込んで了つた。焚火に映る重太郎の顔は、火よりも熱して赤く見えた。

やがて窟の奥からお杉の声で、

「重太郎、火を消してお了いよ。」

重太郎は云わるるままに焚火を踏み消すと、四辺は俄に暗くなつた。奥から母が再び出て来た。後につづいて例の怪しい者が二つ飛んで来た。

お杉は宙を歩むように、傍の小高い岩角へするすると登つた。天を凌ぐ山毛櫨の梢の間から、僅に洩るる空の色を仰いで、

「もう日が暮れるのに間もあるまい。今夜はお前達に大事の仕事があるんだよ。」

「阿母さん、何だ。」

「角川の市郎はお前の仇だ。彼奴が無事に生きて居ては、お葉は何日まで未練が残つて、長くお前に附いて居まいよ。」

重太郎は眼を瞋らして首肯いた。

「それから彼奴は妾にも仇だ。先刻妾を突き倒して、半殺しの目に逢わした奴だ。お前達は其の復讐をしてお呉れ。頼んだよ。」

「可、大丈夫だ。」

勢い込んで駈け出そうとするのを、母は呼び止めて何事をか囁き示す中に、日も漸く暮れかかったらしい。例に依て濛々たる山霧が潮の如くに湧いて来た。

「早く行つてお出でよ。」

お杉の声を後に聞きながら、重太郎も

も霧の中衝いて出た。お杉は笑いながら再び

焚火を撥り初めた。

(二十四)

冬子を送つて隣村まで出向いた安行と七兵衛とは、日が暮れるまで戻らなかつた。が、それは左のみ珍しいことでも無い。安行が吉岡家を訪問して、半日ぐらい話し込んでいることは、従来にも屢々あつた。

此頃は日が滅切詰つて、午後四時には燈火が要る。麗かな日も、今日は午後から俄に陰つて、夕から雨を催した。五時を過ぎても、六時を過ぎても、二人は帰らないので、市郎も少しく不安を感じ初めた。殊に昨夜の一件もあるので、途中が何だか劍呑に

も思われた。家うちにいて心配するよりも、迎いながら町はすれ尽頭まで出て見ようと決心して、市郎は洋杖すてつきを振りながら門を出ると、恰あたかも七兵衛の駈かけて戻るのに逢った。

「小旦那……。」

彼は呼吸いきを喘はずませていた。暗よくて能くは判らぬが、恐おそく顔の色も蒼あざくなっているだろうと思われた。

「どうしたんだ。」と、市郎も慌わづしく駈かけ寄よつて訊ねた。

「大旦那様は戻ったかね。」

「まだ帰らない。お前は親父と一いつしよ所じやアないのか。」

「一いつしよ所だつたが……途中で失はれて……一体どうしただろう。」

七兵衛が口早に語るのを聞くと、二人は冬子を吉岡家へ送り届けて、母のお政に昨夜の一件や、今日のお葉の一条などを話していうちへに、思いの外ほかに時が移うつって、冬の日は早くも傾かきかかった。二人は暇いとまを告げて立出たちでると、お政は途中の用心に松明たいまつを貸かして呉くれた。

七兵衛が先に立つて松明を振ふりて照らしながら、村と町との境まで来きかると、路みちは全く暗くななった。昨夜山ゆうべに襲おそわれたの此この辺へんなどと話していると、行手の木蔭から一人の小作

りの男がひらりと飛んで出た。何者かと松明を突き付ける間もなく、彼は蝗の如くに飛んで来て、七兵衛の持った松明を叩き落した。加之も落ちたる松明を取って、傍の小川に投げ込んで了った。

火の消えるのを相図のように、同じ木蔭から又もや怪しい者がばらばらと飛び出して、安行を手取り足取り引担いで行こうとする。安行も無論抵抗した。七兵衛も進んで主人の急を救おうとすると、最初の小さい男が這つて来て七兵衛の足を掬った。彼は倒れながらに敵の腕を取って、一旦は膝下に捻伏せたが、体に似合わぬ強い奴で忽ち又跳返した。二人は起きつ転びつ筆り合っている中に、安行は自分の敵を突き退けて十間ばかりは逃げたらしい。敵もつづいて追つて行つた。

主人の身の上が関心ではあるが、自分も一人の敵を控えているので何うすることも出来ない。七兵衛は声をあげて救いを呼んだ。この声を遠く聞き付けて、後の村から二三の人が駆けて来た。其蹙音を聞くと、敵も流石に狼狽えたらしく、力の限りに七兵衛を突退け退けて、あなたの森へ逃げ込んで了った。

が、主人の行方も安否も判らぬ。救いに來つた人々に仔細を話して、七兵衛も共々に其處らを尋ね廻つたが、何分にも暗黒と云い、四辺には森が多いので、更に何の手懸りも

無かつた。或は首尾好く町の方へ逃げ延びたかも知れぬと、彼は念の為に兎に角も駈戻つたのである。

以上の報告を聞いて、市郎も色を変えた。對手は、か或は其れに似寄の曲者か知らぬが、何れにしても彼等に襲われた父の運命は、甚だ心許ないものと云わねばならぬ。

「七兵衛、早く駐在所へ行つて来い。」

七兵衛が駐在所へ駈付ける間に、市郎は家中の者を呼び集めて、右の始末を慌しく云い聞かせると、一同は眼を睜つて駭いた。何しろ一刻も早く捜査に出ると身支度する処へ、塚田巡査も出張した。提灯や松明が点された。

「角川の大旦那が攫われた！」

誰云うとなく此声が、駅中に拡がると、まだ宵ながら眠れるような町の人々は、不意に山海嘯が出たよりも驚かされた。日頃出入の者は云うに及ばず、屈竟の若者共は思い思いの武器を把つて駈集まつた。

塚田巡査は町の者共を従え、市郎は我家の職人や下男を率いて、七兵衛老翁に案内させ、前後二手に分れて現場へ駈向つた。夜の平和は破られて、幾十の人と火とが、町尽頭の方へ乱れて走つた。

(二十五)

午後から陰くもつた冬の空は遂に雨を齎もたらして、闇を走る人々の上に冷つめたい糸の雪しゆくを落した。が、そんなことに頓着いずしている場合でない。松明たいまつの火を消すほどの強雨つよふりでも無いのを幸いに、何いずれも町を駈いけ抜けて、隣村の境まで来て見ると、暗い森、暗い川、暗い野路のみち、見渡す限り唯真黒な闇に鎖とぎされて、天地寂せき寞ぼく、半時間前に怖るべき椿事ちんじがここに起おこつたとは、殆ど想像の付かぬ位であつた。

「老翁じいや、この辺へんかい。」と、市郎は立止たちどまって顧みかえると、七兵衛は水涕みずばなを啜すすりながら進み出た。

「はあ、丁度ちやうどここらでがすよ。あれ、あの縦もみの木の蔭かげからわろが出て来たので……。それから何でも大旦那は彼地あつちの方へ逃げたように思うのですが……。」「

人々は松明を振照ふりてらして、七兵衛の指さす方かたを仔細に検査したが、別に手懸りとなるべき足跡もなく、遺留品も見出し得なかつた。

「どうも判らんな。」と、塚田巡査も失望の嘆息といきを洩もらした。

が、兎とに角かくに其儘そのままでは済すまされぬ。巡查の率すべいる一隊は、森に沿やまみちうて山路やまみちを北に登る事こととなつた。市郎の一隊は現げん場じょうを中心しんとして、附近の森や野原や村落あきを獵あさる事こととなつた。斯かくて夜半やはんまで草を分けて詮議せんぎしたが、安行の行方は依然不明であつた。加しか之も夜の更さらけると共に、寒い雨が意地悪いぢあくく降ふり頻しきるので、人々も寒かん氣きと飢うえとに疲つかれて来た。

「到底とて今夜こゝものことには行くまい。」と、弱い音ねを吹ふく者ものも出て来た。が、市郎は容易やすに諦あきらめることは能できなかつた。疲れた一隊を慰なぐさめ励むまして、其附近その約三里の間を東西に南北に駆け廻まわつたが、遂ついに何の手懸てりも無なかつた。懐中時計を見ると、既もう午前一時である。松明の火も漸ようやく尽つきて来た。

此この上うへは矢やはり山やまへ向むかうより他ほかは無ない。で、曩さきに巡查等しんさとうが登のぼつた路みちとは方角かつかくを変かえて、西の方かたから山路やまみちへ分わけ入いらうとする途中ちゆうちゆうに、小さい丘かみが見みえた。ここらに多い山毛櫨ぶなが茂さかつて、丘かみの麓ふもとには名なも無ない小川こがわが繞めぐつていた。

「や。人が死んでゐる！」

先に立たつた一人ひとりが松明しょうめいを翳かざして驚おどき叫こゑぶと、余よの人々も慌あわてて駈かけけ寄よつた。見ると、山毛櫨ぶなの大樹おほいの根ねを枕まくらにして、一人の男おとこが赤裸あかだで雨あめの中に倒たふれていた。

市郎は殆たいていど夢中むちゆうで駈かけ寄よつた。消けえかかる幾多いくたの松明の火ひが一時ひとときにここへ集あめられた。其そ

の光に照し出されたる屍体の有様は、身の毛も悚立つばかりに残酷なるものであった。男は前にも云う如く、身には一糸を附けざる赤裸で、致命傷は咽喉であろう、其疵口から滾々たる鮮血を噴いていた。更に驚くべきは、鋭利なる刃物を以て其の顔の皮を剥ぎ取つたことである。随つて其の顔は判然せぬが、僅に灰色の髪の毛に因つて、其の六十近い老人であることを確め得た。

「阿父さんだ。」と、市郎は屍体を抱いて叫んだ。七兵衛も声を揚げて泣いた。

この意外なる光景に胆を挫がれて、余の人々は唯動揺めくばかり、差当り何うするといふ分別も出なかつた。が、流石は職業であるから、市郎は先ず其疵口を検査すると、疵は刃物でなく、鋭い牙と爪とて咬破り搔裂いたものらしい。彼は再び驚くと共に、敵は正しくであることを悟つた。

この時、あなたの山の方から幾箇の松明が狐火のように乱れて見えた。巡査の一隊は尋ね飽んで、今や山を降つて来たのであろう。斯くと見るより此方の人々は口々に叫んだ。「大旦那はここに居たぞ。おうい、おうい。早く来いよ。」

先方でも声に応じて駈けて来た。が、惨憺たる此場の光景を見て、何れも霎時は呆気に取られた。巡査は劍鞘を握つて進み出た。

「残酷なことを行りましたなあ。　　でしようか。」

「無論、　　です。　　の仕業です。」と、市齧嚙はがみをした。

「顔の皮を剥いだのは、犯跡はんせきを晦くらます為でしようか。」

「そんなことかも知れませんか。」

巡査うみなすは首肯うなずいて、これも一応屍体あられたを検めたが、やがて少しく眉ひそを蹙めた。

(二十六)

「角川さん。」と、塚田巡査は市郎みかえを顧つて、「もう一度この老人の口を……歯を能く見て下さい。」

市郎は死人しにんの口を開けて見た。

「どうです。違ちがや為しませんか」と、巡査は首ひねを拈ひねつた。

成程なるほど、違ちがつていた。今まで気が顛倒てんとうしていたので、流石さすがにそこまでは意きが注つかなか

つたが、安行の前歯は左が少しく缺かけていた。この男の前歯は左右とも美事に揃そろっている。髪の色こそ似ているが、確たしかに人違ちがいだ、我父では無い。市郎は吻ほっとした。

「違います。違います。成程、これは親父じやアありません。」

「それでしよう。」

「違った、違った。」と、人々は喜よろこ悦びの声を揚げた。七兵衛は嬉しさに又泣き出した。人々は消えかかった松たいまつ明つが再び明るくなった様ように感じた。

が、これが安行でないとすると、何いずこ処この何者であろう。たとい角川家の主人其そのひと人ひとにあらずとも、一ひしり個この人間が惨殺されて此ここ処こに横よこわつているのは事実である。塚田巡査は職務上これを捨すて置おく訳わけには行かぬ。取とり敢あず其その屍し体たいを町へ運ばせて、己おのれは其その報ほう告こ書しょを作る準備じゆんに取とりかかつた。

夜はいよいよ更けて、雨は益々烈しくなつて来た。此このまま雨中う中に立ち尽しては、或あるいは凍こえて死ぬかも知れぬので、遺憾いながら安行の搜索さくさくは一旦中止して、一同も空しく町へ引ひ揚きげて来た。市郎いちろうは其その夜よ一睡しも為なかなかつた。

「阿父おじつさんは何どうしたろう。」

彼の冴さえたる眼まなこには、彼かの惨殺さんころされたる老人の屍し体たいがありありと映うつつた。自分の父も矢やはり彼あのような浅あましい姿すがたになつて、人の知らぬ山奥たにあいか谷や間まに倒たふれているのではあるまいか。それにしても、あの老人は何者であろうか。父の行方不明と彼かの惨殺事件との間に、

何等かの関聯があるのではあるまいか。こんな事を際涯もなく思い続けている中に、夜は白んだ。幸いに曉方から雨は晴れた。

遠近では鶏が勇ましく啼いた。市郎は衾を蹴つて跳ね起きた。家内の者共は作夜の激しい疲労に打たれて、一人もまだ起きていない。が、何だか沈着いても居られないので、市郎は洋服身軽に扮装つて、兎も角も庭前へ降立つた。

「今日は先ず何地の方面から捜して見ようか。」

頬を吹く雨後の寒い朝風は、無数の針を含んでいる様子にも感じられたので、市郎は思わず襟を締めながら、充血した眼に大空を仰ぐと、東は漸く明るくなつたが、北の山々は夜の衣をまだ脱がぬと見えて、顔れかかつた砲墨のような黒雲が堆く拡がっていた。一昨夜はトムを殺された、昨夜は父を奪われた。彼の山なるものは、何が故に執念深く自分等に祟るのか、市郎は殆ど判断に苦んだ。が、彼は不図こんな事を思い泛べた。トムは一昨日吉岡家の門前で、彼のお杉婆に吠え付いた。而して其晩に殺された。自分は昨日我家の門前で、同じくお杉婆を突倒して気絶させた。而して其晩に父が行方不明になった。果して世間で伝うる如く、お杉婆と山との間に、何か不思議の因縁が結びつけられてあるとすれば、昨夜の禍も或はお杉婆に關係が有るのではあるまいか。

「そうだ、必然きつとそうだろう。」

斯こう考えると、彼は矢も盾も堪たまらなくなつた。家内の者共を呼び起おこすまでもなく、一人で彼かの虎ケ窟を探ろうと決心した。で、一旦内へ引ひっかえ返して、応急の薬剤と繻ほうたい帯とを用意して、足早に表へ出ようとするとする時、七兵衛父しじい翁が寝惚ねぼけまなこ眼を擦りながら裏口のそのを遅そ々出て来た。出逢頭であいがしらに喫驚びっくりして、

「や、小旦那……。朝飯も食わねえで何処どこへ……。駐在所かね。」

「いや、虎ケ窟へ……。私は一足先へ行くから、皆みんななが起きたら直すぐに後あとから来るように然そう云つて呉くれ。」

「虎ケ窟へ……。」

七兵衛が危あやぶむ顔を後あとにして、市郎は早々に飛び出して了しまつた。

(二十七)

市郎が駅しゆくを抜けて村境むらさかいに着いた頃には、旭日あさひが已すでに紅あかあか々と昇つた。遠近おちこちの森では鳥が啼いて、眼も醒めるような明るい朝の景色は、彼に前途の光明を示すようにも見え

たので、市郎は自ずと心が勇まれた。

例のもみばやし林の落葉を踏んで行くと、漸次しだいに山路やまみちへ差蒐さしかかる。岩は俄にわかに峻けわしくなつて来た。

「多寡たかが一里だ。知れたものだ。」

市郎は勇を鼓こして登のぼつた。が、彼は所謂いわゆる虎ヶ窟こなるものの在所ありかを委くわしくは知らなかつた。小児こどもの時に友達ともだちと一いっしょ所に、一度ばかり登のぼつたことが有るように記憶するが、今となつては其方角そのも頗すこぶる覚束おぼつかないものであつた。何でも本道から西へ入ると聞き伝えているので、心の急せく彼は遮しや二無にむ二西にしへと進んだ。昨日彼かのお葉はが踏ふんだ路みちである。彼も大小の岩を飛び越えねばならなかつた、山やま蔦つたに縋すがつて危あぶない綱渡りをせねばならなかつた。洋服でたちの彼は、草鞋わらじを穿はいて来なかつたのを悔くいた。

彼は又、曾かつて読よんだ八犬伝うちの中で、犬飼いぬかい現げん八はちが庚申山こうしんざんに分け入るの一段を思い出した。現八は柔術やわらに達していたので、岩の多い難なんじよ所を安々と飛び渡つたと書いてある。

市郎には生憎あいにくそんな素養が無かつた。

「多寡たかが一里だ。」と、彼は難所に逢う毎に自ら励あました。が、或あるは路みちを踏み違えたのかも知れぬ。已すでに二時間余あまりを費したかと思うのに、目指す窟いわやを未だ探り得なかつた。この寒

いのには彼は全身に汗を覚えた。岩の蔭から瞰上れば、日は己に高く昇ったらしい。

幾ら気が張つていても、疲労には勝たれぬ。市郎は昨夜雨中を駈廻った上に、終夜殆ど安眠しなかつた。加之も今朝は朝飯も食わなかつた。疲労と不眠と空腹とが重つた上に、又もや此の難所を二時間余も彷徨つたのであるから、身体の疲れと気疲れとで、彼は少しく眼が眩んで来た。脳に貧血を来したらしい。ここで倒れては大変だ。

「これでは到底歩かれない。」

市郎は唯ある岩角に腰をかけて、用意の氣注薬を啣んだ。足の下には清水が長く流れているが、屏風のような峭立の岩であるから、下へは容易に手が達かぬ。少しく体を前へ屈めると、鬮筋斗打つて転げ墜ちるであろう。斯う思うと、飲料を用意していない彼は愈よ渴を覚えた。

「自分は医師でありながら、何故斯う不注意だろう。」と、彼は自己を叱つても追付かない。市郎は余りに慌てて我家を出たのであつた。

「それにしても、七兵衛や他の者は何うしたろう。」と、彼は心細さに斯んな事も考えた。が、今更引返すべきではない。進め、進め、倒れるまでも進めと、市郎は勇気を振り起して又歩き出した。あなたの梢では大きな山猿が、他を嘲るように笑っていた。

市郎は何処を何う歩いたか、半は夢中で無闇に進んで行つた。それから約一時間ばかりも経つたと思う頃、彼はあなたの大きい岩の狭間から、一縷の細い煙の迷い出づるを見た。「占めた！」

彼は喜んで躍つた。で、思わず声を揚げて呼ぼうとしたが、遠方から敵を驚かしては妙でない。窃に近寄つて其不意を襲うに如くと、市郎は故意に登音を偷んで、煙のなびく方へ岩伝いに辿つた。

この辺には大樹が多かつた。大樹の聳ゆる下に落葉焚く煙が白く颯つて、彼のお杉婆は窟を背後に、余念もなく稗の粥を煮ていたが、彼女の耳は非常に敏かつた。忽ち人の登音に心附いたと見えて、灰色のおどろ髪を振り乱しつゝ此方を屹と顧つた。市郎はつかつかと其の眼前に現れた。

お杉は騒ぐ気色もなく、徐に起ち上つて軽く会釈した。

「昨日は何うも飛んだ御邪魔を致しました。」

「いや、僕の方でも大変失礼した。」と、市郎も尋常の挨拶をして、「時に今日来たのは他でもないが、家の親父が昨夕から行方知れずになつたので……。」

「まあ。」と、お杉は驚いた顔をした。

(二十八)

市郎は少しく躊躇したが、更に詞を次いだ。

「そこで、心当りを方々探しているのだが、何うも判らないので困っている。」

「それは困りましたねえ。」と、お杉も心配そうに眉を寄せた。

「村の者の話に拠ると、親父は山の方へ登ったとも云うんだ。若し然うならば、万一此地の方へでも迷い込んで来やアしないかと思つて……。」

「いいえ、お見掛申しませぬね。」

お杉は昨日に引替えて、極めて叮嚀な口吻であつた。が、市郎は中々油断しなかつた。

「親父は来なかつたかね」と、考えて、「そこで、些と云い難いことだが、折角ここまで来たもんだから、念の為に窟の中を一応調べさして貰いたいんだが、何うだろうね。」

「判りました。あなたは妾を疑つていらっしゃるでしょう。妾はこんな姿をして、乞食同様の生活をしていますが、人を攫つたり、殺したりした記憶はありません。山とは違います

からね。」

「それは僕も知っているが、まあ念晴ねんばらしだ。検あらためても可いいだろう。」

お杉は黙もつて市郎の顔かほを視みていた。

「可いいだろう、鳥渡ちよいしと検しらめても……。」

「何どうとも勝手かたてにお為しなさい。だが、碎せがれの帰かえらない中うちに早く願ねがいますよ。」

「碎くだは何処どこへ行いつた。」

「そこらへ木実きのみを拾ひろいに行いきました。」

「そうか。」

市郎は窟くつへ五六歩踏ふみこ込んだが、奥おくは暗くいので何なににも見みえなかつた。お杉は黙もつて窟くつの入口いりぐちに立たつていた。

「中なかは真暗まつくらだね。」と、市郎は外みかえを顧みかえつて呼よぶと、お杉もつづいて入いつて来きた。

「何か松たいまつ明あか蠟燭ろうそくのようなものものは無ないかね。暗くくつて仕し様さまがない。」

「松明たいまつもあります、蠟燭ろうそくもあります。」

「何方どつちでも可いいから貸かして呉くれないか。」

お杉は黙もつて蠟燭ろうそくに火ひを点つけた。

「あなた、どうぞお早く願いますよ。ここへ倅が帰って来ると不可いませんから……。彼あれは正直者ですから、他ひとから嫌疑うたがひを受けて家捜やさがしをされたなどと聞くと、必然きつと憤おこるに相違ありませんから……。」

「可よし、可よし。判よつた。」

お杉が照す蠟燭の淡い光を便宜たよりに、市郎は暗い窟の奥へ七八間ほど進み入ると、第一の石門せきもんが眼の前に立っていた。市郎はお杉の手から燈火あかりを受取うけとつて、左右の隅々くまぐまを照し視みたが、上も下も右も左も唯一面ただの嶮けわしい岩石で、片隅の低い岩の上には母子おやこの寢道具ねどうぐかと思われる獣の生皮二三枚と、茶碗と箸と葉罐やかんのたぐいが少しばかり転がっているのみで、他には別に眼いに入る物もなかった。市郎は念の為に獣の皮を一枚づつ引き剥めくつて見た。

「何か見付みつかりましたか。」と、お杉は冷笑あざわらうような口吻くちぶりで問うたが、市郎は何とも答へなかつた。これより更に奥深く進むと、第二の黒い石門せきもんが扉ふたのように行手を塞ふさいでいて、四辺あたりの空気は凍るばかりに寒かつた。

「この先にも路みちがあるかね。」

「ありますから、まあ入つて御覽なさい。石の下から潜もぐつて行くんですよ。」

市郎は一旦立止たちどまつたが、此このまま半途で引返ひっかえしては何にもならぬ。彼は障しょう碍がい物ぶつ

競走をするような形で、兎も角も冷たい石門の下を這つて通ると、其後からお杉の痩せた身体が蛇のようにすると抜け出して来た。

「ここが行止りだね。」

お杉は首肯いた。市郎は一度消えた蠟燭に再び燐寸の火を点けて、暗い石室の中を仔細に照して視たが、所々の岩の窪みに氷のような水を宿している他には、矢はり何物も眼に入らなかつた。

「何か見付りましたか。」と、お杉は重ねて問うた。其声が四方の低い石壁に響いて、何となく凄愴いように聞えた。市郎は黙つて立つていた。

(二十九)

市郎が唯一の希望の光も消えた。あれほどの難所を越えてようよう此処を尋ね当てた効も無く、暗い窟の奥には何の秘密も無かつた。彼はお杉に有らぬ疑惑を掛けたのを、今更大に後悔した。

「どうも僕が悪かつたよ。」

「じゃア、もう可いんですか。」

「むむ。ここまで詮議すれば心残りは無い。もう帰ろうよ。」

とは云つたが、まだ幾分の未練が有るらしい、市郎は壁に沿うて室内を一巡りした。

「や、あの隅に大きな穴がある……。」

お杉の眼は晃然と光つた。市郎は進んで蠟燭の火を翳すと、岩穴は深さ幾丈、遠い地の底でごうごうという音が微に聞えるばかりで、蠟燭の細い光ぐらいでは到底達きそうも無い。穴の奥は深い闇に埋まっていた。

市郎は更に跪ずいて底を覗いたが、底は唯暗いのみで何にも見えなかつた。お杉は黙つて其背後に突つ立っていた。

低い狭い石室の中は、墓場のように鎮り返っていた。が、其の寂寞は忽地に破られた。市郎は我が背後で微に物の動く氣息を聞いたので、何心なく顧ると、驚くべし彼のお杉婆は手に磨ぎ澄したる小刀を振翳して、あわや彼を突かんとしているのであつた。

「何をするツ。」

市郎が驚いて叫ぶ間もありや無しや、お杉の兇器は其の頸筋へ閃いて来た。が、咄嗟

の間に少しく体を躲したので、鋭い切尖は僅に其の肩先を掠つたのみであつた。空を撃つたお杉は力余つて、思わず一足前へ蹠跟く機会に、恐く岩角に蹠いたのであろう、身を翻えして穴の底へ真逆さまに転げ墜ちた。蠟燭は消えて真の闇となつた。

意外の出来事に市郎も一時は呆氣に取られたが、お杉が自分を殺そうとしたのは、恐く昨日の復讐ばかりではあるまい。彼女は此の岩穴の中に何等かの暗い秘密を蔵しているのだ、其の発覚を恐れて斯る兇行を企てたに相違ない。矢はり自分が最初に疑つていた通り、生死不明の父は此穴の底深き処に葬られているのかも知れぬ。それにしても、お杉は何うしたろう。岩石に骨を砕かれて即座に命を隕したか、或は案外の軽傷で無事に生きているか、先ず其安否を確かめねばならぬ。いかに悪人にもせよ、此のまま見殺しにするという法はあるまい。

「兎も角も穴へ入つて見よう。」

父の行方とお杉の安否とを探る為に、市郎は直ちに此の冒険を試みようとして決心した。彼は燐寸を擦つて再び蠟燭に火を点けた。其光に因て又もや穴の中を窺うと、底の底は依然として真暗であつたが、彼は幸いに或物を見出した。それは一条の細い綱である。

今までは些とも眼に注かなかつたが、綱は人間の髪の毛に因て固く編まれたもので、所

謂「毛綱」の類であつた。其の一端は穴の降口とも思しき処の岩角に結び付けられて、他の端は暗い底の方に長く垂れていた。試みに之を手繰つて見ると、綱は古代の大蛇のよう
 手に際限もなく長いもので、繰れども繰れども容易に其端には達かなかつたが、根よく
 手繰つている中に、漸く残りなく引揚げた。長さは幾丈あるか鳥渡は想像が付かぬ位で、
 黒い固い綱は狭い室内に蟠蜒を巻いて、其端は蛇の鎌首のように突つ立つた。これが総
 て人間の髪毛であるかと思うと、市郎は何となく薄気味悪く感じた。

が、今は猶予している場合でない。市郎は其綱の片端を自分の胸に緊と結び付けて、海
 燕の巢を獵る支那人のように、岩を伝つて真直に降り初めた。岩は殆ど峭立つたよ
 うに峻しいが、所々には足がかりとなるべき突出の瘤があるので、それを力に探りな
 がら徐々と進んだ。

降るに従つて、深い穴の底はいよいよ暗かつた。彼が僅に頼みとするのは、鬼火のよう
 に燃ゆる一挺の蠟燭の他は無かつた。

市郎は半夢中であるから、約何のくらい降りて進んだか判らぬ。兎にかく手がかり足がかりの岩を辿つて、下へ下へと危くも降りてゆくと、暗い中から蝙蝠のようなものがひらりと飛んで来て、市郎の横面を礎と打った。あつと顔を背ける機に、冷い空氣の煽りを受けて、頼みの蠟燭はふツと消えた。

「あ、失敗つた！」と、市郎は思わず舌打した。が、現在の位置にあつて再び蠟燭を点けると云うことは、殆ど不可能であつた。彼は左の手に蠟燭を持ち、右の手に岩を抱いて、辛くも其身を支えているのであるから、到底燐寸を擦るべき余裕は無い。迂濶に手を放せば、彼は底知れぬ暗黒に転げ墜ちて、お杉と同じ運命を追わねばならぬ。さりとして此のまの暗黒では仕方が無い。

彼は霎時途方に暮れたが、此の場合兎も角も進んで行くより他は無いので、市郎は探りながらに徐に降りた。それから二三間ほど進んだかとも思う時に、彼の左の足は硬い物に触れた。靴で幾度か探つて見ると、これは突出した岩の角で、岩は可成に広いらしい。ここならば両手を放しても立つて居られそうに思われたので、「可、ここで燐寸を点けようか。」と、市郎は更に右の足を踏み締めると、足の下は意外に柔かであつた。左は硬く、右は柔かい。少しく可怪いとは思つたが、柔かいのは恐らく粘土であろうと想像

して、彼は先まずここに両足を踏み固めた。

で、何よりも早く蠟燭を点けねばならぬ。市郎は手早く燐寸を擦ると、余りに慌てた結果、火は点いたが又忽たちまち消えた。が、この瞬時の光に因よつて、彼は我が足下あしもとに人の横よこたわつてゐるのを見た。男か女か確しかとは判らぬ、唯蒼白い顔が朦朧ぼんやりと浮き出したかと思ふ間もなく、四辺あたりは再び旧もとの闇に隠れて了しまつた。

「阿父おとうさんか、お杉か、但ただしは別人か。」

市郎は急せいて又燐寸を擦つたが、胸の動悸に手は顫ふるえて、幾たびか擦すり損じた。彼は愈いよいよよ悶じれて、一度に五六本の燐寸を掴んで力任せに引ひ擦ると、火は漸ようやく点いた。

わが足下あしもとに横よこたわつてゐるのは、尋ぬる父の安行であつた。わが右の足で踏んでいた柔かい物は粘ねばつち土つちで無い、老たる父の左の股ももであつた。市郎は驚いて声も出なかつた。慌てて飛退とびのいて更に熟視よくみると、人違いでない、確たしかに父の安行である。が、其顔そのは生ける日と些ちつとも変らず、極めて平和な温順な人相を現あらわして、斯かかる変死者に往おう々おう見る所の苦痛や煩悶の死相は少しも見えなかつた。父は恐おそらく不意に殺されたのであろう。父は怖るべき危害の迫り来るを予知せず突然死んだのであろう。

市郎は蠟燭を岩の罅さげ間に立てて、一先ひとまず父の亡骸なきがらを抱かかり起おこしたが、脈は疾とうに切れて、

身体は全く冷えていた。併し一通り見た所では、何処にも致命傷らしい疵の痕は無かった。多分この岩の上へ突き落されて、脳震盪を起して死んだのではあるまいか。勿論、これとても想像に過ぎない。

「阿父さん……。」

切てももの心床しに、市郎は父の名を呼んだが、魂魄の空しい人は何とも答えなかつた。

「阿父さん……。」

彼は再び呼んだ。呼んで返らぬとは知りながら、再び呼んだのである。

市郎は一人児であつた。小児の時に生の母には死別れて、今日まで父一人子一人の生涯を送つて来たのである。父は年齢よりも若い、元気の好い人であつた。わが子に対つても平気で冗談を云うような人であつた。加之も我子を又無く愛する親であつた。遠からず我子に嫁を迎えて、自分は隠居する意の親であつた。

この父と子と突然に別離を告げたのである。それも尋常一様の別離でない。父は夢のように姿を隠して、夢のように死んだのである。加之も人間の通わぬ窟の奥、暗い蠟燭の下で其悲しき死顔を見たのである。

市郎は父の亡骸を抱いて泣いた。

(三十一)

この時、背後の方から不意に物の氣息が聞えて、何者か忍び寄るようにも思われたので、市郎は手早く蠟燭を把つて起上ると、余りに慌てたので、彼は父の死骸に蹠いた。広いと云つても一坪にも足らぬ岩の上である。彼はあつと云う間に足を踏み外して、深さも知れぬ暗い底へ転げ墜ちた。

が、幸いに彼の身体には例の毛綱が結び付けてあるので、市郎は岩から墜ちる途端に、早くも綱に取付いてずると滑り墜ちると、二三間にして又もや扁平い岩の上に止つた。横さまに跪ずいて倒れたので、左の膝を少しく痛めたが、差したることも無いらしい。彼は疼痛を忍んで直に起き上つた。其片手には消えた蠟燭を後生大事に握っていた。

斯くして彼は父の死骸から遠ざかつて了つたのである。引返そうにも足がかりが見出されぬ。降りる方は比較的容易であつたが、登るのは余ほど困難であるらしい。斯うなるからは寧そのこと、どん底まで真直に降りて行って、彼のお杉の安否を確かめた方が優か

も知れぬ。ええ、何うなるものか、行ける所まで行つて見ると、一種の自棄と好奇心とが混つて、市郎は更に底深く降りることに決心した。それに付けても唯一の味方は蠟燭である。彼は又もや燐寸を擦付けようとする時、人か獣か何か知らぬが、嶮しい岩を跳越えてひらりと飛んで来た者がある。

身を躲す間もあらばこそ、彼の怪物は早くも市郎の前に飛込んで来て、左の外股の辺を礎と打った。敵は兇器を持つていらしい、打たれた所は唯ならぬ疼痛を感じて、市郎は思わず小膝を突いた。「わろか。」と、此の刹那に市郎は忽に悟つたが、敵が余りに近く薄つているので、火を点ける余裕が無い。彼は右の足を働かして強く蹴ると、敵は足下に倒れたらしい。暗黒で固より見当は付かぬが、市郎は勝つに乗つて滅多矢鱈に蹴飛ばす中に、靴の尖には応えがあつた。敵は猿のような声を揚げてきやツと叫んだぎりて霎時は動かなかつた。

この隙を見て、市郎は忙わしく燐寸を擦つた。蠟燭の火の揺めく影を便宜にして、先ず此の怪物の正体を見定めようとする時に、一人の男がぬツと其の眼前へ現われた。市郎は悸然として熟視すると、これは では無いらしい而も とは大差ない程に見ゆる下級労働者らしい扮装で、年の頃は五十前後でもあろう、髪を長く伸して、尖つた顔に鋭い眼を晃

らせ、身には詰襟つめえりの古洋服の破れたのを着て、足には脚絆きゃはん草鞋わらじを穿はいていた。其扮そのいで装たちを見て察するに、近来この土地へ続々流れ込んで来る坑夫どかたか土方の仲間らしい。

「わたし じゃアありませんよ。御安心なせえまし。ははははは。」

男は笑いながら馴なれなれ々しく近寄つて来たが、市郎は容易に油断しない、蠟燭を突き付けたままで其顔そのを屹きつと睨にらんでいた。

「 はここに居まさあ。御覽なせえまし此この醜態ぎまだ。」

男が笑いながら指さす我が足下あしもとには、何さま異形いぎようの者が倒れていた。先夜トムを殺した奴たしかと確たしかに同種類に相違ない。赭土色あかつちいろの膚はだで、髪かみの長い、手足の長い、爪つめの長い、人か猿か判らぬような怪物である。彼は市郎の靴で額の真向まっこうを蹴破くられたと見えて、濃黒どくろくいような鮮血なまぢが其凄愴そのものすごい半面を浸ひしていた。

併しかし彼は死んだのでは無かった。其その眼前めさきに蠟燭の火を差付さしつけられると共に、又もやきやツと叫んで跳ね起きて、血だらけの顔を抱えながら岩から岩へ、何処どこへか飛んで行つて了しまつた。

斯かくして真実ほんとうの は逃げ去つたが、類似るいじの怪しい鬼まば眼の前に残っている。此この男は果はたして善か悪か、敵か味方か、市郎も其判断そのに苦くるんで佇立たたずんでいると、男は愈いよいよよ馴なれな

々れ
らしい。

「旦那、御心配なせえますな。　　なんて云うものは、意気地のねえ奴ですから、も蒐つて来る気配ありませんよ。はははは。」

彼は勇士である。人の恐るる山　　を物燭とも思っていないらしい。

(三十二)

何しろ、得体の判らぬ男であるが、何時まで睨み合っているも際限がないと、市郎の口も解れ初めた。

「お前さんは此穴に棲んでいるのか。」

「そうじやアありませんが、大抵勝手は心得ていますよ。」

「底までは未だ余ほど遠いかね。」

「何、もう直です。御覧なせえまし、唯た三四間の所でさあ。」

蠟燭を照して視ると、底は近い。獣の牙のような大小の岩が聳えていた。

「今、人が墜ちたんだが……。」と、市郎は伸上って底を覗くと、男は首肯いた。

「もう少し前に、上から墜ちて来た者がありましたよ。かと思つていたが、然うじゃア無かつたか知ら。」

男は先に立つて岩を降りた。市郎も続いて降りた。やがてどん底まで辿り着くと、果して其処にお杉の死骸が倒れている。彼女は牙のような岩と岩との間に挟まれて、さながら巨大なる野獣に咬まれたような形で死んでいた。

男は少しく眉を顰めて、お杉の死顔を凝と眺めていた。市郎は念の為に脈を取つて見たが、これも手当を施すべき依頼は切れていた。

「一体、この女は何うして墜ちたんだらう。旦那は此女を御存知ですか。」

善悪判らぬ此男に対して、市郎は真を語らなかつた。

「さあ、僕も知らない。僕は唯この窟を探険に来たのだ。」

「じゃア、書生さんだね。」

「まあ、然うさ。」

こんなことを云つている中に、市郎は漸次に足の疼痛を感じた。今までは気が張つていたので、何も彼も殆ど夢中であつたが、曩に岩の上へ転げ墜ちた時に彼は左の膝を痛めた。続いて、の為に左股を傷けられた。加之も二度目の傷は刃物で突かれたと見えて、洋袴

に滲み出る鮮血の温味を覚えた。究竟彼は左の片足に二ヶ所の傷を負っているのであつた。

父の行方も探し当て、お杉の生死も確か得たので、彼も今は気が弛むと共に、市郎は正しく立つに堪えられなくなつて来た。跛足を曳きながら傍の岩角に踞りかかつて、倒れるように腰を卸した。男も其側へ腰をかけた。

「旦那は何うか為すつたんですか。」

「些と怪我をした。」と、市郎は顔を皺めて、「そこでお前さんに頼みたいことが有るんだが……。僕は此の通り、足を痛めているんで到底歩けそうもない。お前さんは此処の勝手を知っていると云うなら、後生だから僕の家まで行つて来て呉れないか。而して、僕がここに居るから迎いに来て呉れと……。」

「旦那の家は遠いんですか。」

男は余り気の進まぬような返事であつた。市郎は衣兜の紙入から紙幣を探り出して、黙つて男の手に渡すと、彼は鳥渡頂いて直に我が洋袴の衣兜へ捻込んで了つた。

「じゃア、行つて来ましよう。旦那のお宅は何方です。」

「この山を降りて樅の林を抜けると、町は直に見える。僕の家は角川と云うんだから、町

で訊けば直すぐに判る。」

角川と聞いて、男の顔色は少しく動いた。市郎の顔を再び覗いて、

「あなたは角川の若旦那ですかい。」

「むむ。僕は角川の倅せがれだ。」

「へえ、そうですか。」と、考えて、「大旦那はまだ御健康おたつしやですかい。」

「え、お前さんは僕の親父を知っているのか。」と、市郎は不審の眼を晃ひからせると、男は忽ち頭たちましらを掉ふつた。

「いいえ、お目にかかったことは有りませんが……。何しろ、それじゃア直すぐに行つて来ましようよ。」

「何分頼むよ。」

「よろしい。待つてお在いでなせえまし。」

男は口早に、身軽に起たちあが上あつて、衣兜かぶしから新しい手拭を把とつて頬ほ包おかむりした。

「旦那、この綱は大丈夫ですかい。」

「むむ、上の岩に緊しっかり乎なり結び付けてある。」

市郎は自分の胴かたえに巻いた毛綱けづなを解いて、傍かたえの岩角に結び付けると、男は之これに縫すがつて登り

初めた。かれは鉾山生活に慣れていゝらしい、手は綱に縋り、足は岩に踏みかけて、案外無造作にするすると登つて行つた。穴の入口に達した時に、彼は下に向つて声をかけた。

「旦那、行つて来ますよ。」

(三十三)

虎ヶ窟に於て是ほどの事件が 出 来 してゐる間に、彼のお葉と重太郎とは、何処に何をしていたであらう。二人に関する昨夜以来の成 行 を、ここで簡 短 に説明せねばならぬ。

前にも記す如く、お葉は自分にも判らぬ心理状態の中に此の山 中へ誘われ、此の窟の奥に囚われて了つた。重太郎と山 とは夜の更けるまで歸つて来なかつた。

「妾は何うして斯んな処へ来たんだらう。」と、時の経つに従つて、お葉は夢から醒めたように考へた。今日一日のお葉は、自分ながら何が何うしたのか殆ど判断が付かなかつた。或は酔い、或は醒め、或は夢み、自分の頭脳は種々の混乱を来した末に、お杉婆の威嚇的命令の下に重太郎の嫁たるべく約束した。が、考へて見ると斯んな馬鹿馬鹿しいことは

無い。妾は気でも狂つたのか知らと、お葉はつくづく自分の馬鹿馬鹿しさに愛想を竭した。で、何は扱措いても、斯んな処に長居すべきでない。自分は東京深川生れのお葉さんである。自分の身状が悪い為に、旅から旅を流れに渡つて、「行くにや辛い」と唄にまで謳わるる飛驒の山家に落ちて来たが、それでも自分には自分の生命が有る、自分には自分の恋が有る。こんな山奥へ引摺込まれて、人だか　だか判らぬよう怪物共の玩弄にされて堪るものか。他面白くもない、好加減に馬鹿にしると、彼女は持前の侠肌を發揮して、奮然袂を払つて起つた。

が、お葉も流石に彼のお杉婆に對しては、何となく不気味の感が無いでもなかつた。窟の奥から窃と抜け出して、先ず表の有様を偷み視ると、夜は既う更けたらしい、山霧は雨となつて細かに降っている。お杉は消えかかる焚火を前にして、傍の岩に瘦せた身体を凭せかけたまま、さながら無言の行とでも云いそうな形で晏然と坐っていた。生きているのか、死んでいるのか、眠っているのか、起きているのか、一向に見当が付かない。

捉まつたら其れまでと度胸を据えて、お葉は拔足をして外へ出た。お杉婆は身動きも為なかつた。お葉は折柄の雨を凌ぐ為に、有合う獸の皮を頭から引被つて、口には日頃信ずる御祖師様の題目を唱えながら、磬音を偷んで忍び出た。

それから一時間も過ぎた後に、重太郎が帰つて来た、山も帰つて来た。彼等^{やまづた}幽^{おぼ}藪^らで引^ひ縛^くつた角川安行を抱えていた。

「阿母^{おつか}さん、阿母^{おつか}さん。」

重太郎が呼んでもお杉は答えなかった。重太郎は先^まず窟^くの奥へ駈^かけ込んだが、霎^{しほ}時^{らく}して狂気の如く飛んで来た。

「阿母^{おつか}さん、お葉は……。お葉は何^{どこ}処^こへ行つた。」と、彼はお杉の腕を掴んで、力任せに引^ひ摺^{すり}廻^りした。

「何、お葉が居ない。」と、お杉も初めて眼を睜^{みひら}いた。

「阿母^{おつか}さん、寝ていたのか。」

「例^{いつも}の通り、眼を瞑^{つぶ}つて神様に祈つていたのさ。」

「そんなら判りそうなものだ。お葉は居ない、お葉は逃げた。」

重太郎は足^{あし}摺^{すり}して泣き出した。

「お葉が逃げた……。」と、母も眼を晃^{ひか}らしたが、「心配お為^しでない。何^{どこ}処^こへ行くものか。家^{うち}へ帰つたら又連れて来るから……。」と、さびしく笑っていた。

「何^{いつ}日^つ連れて来て呉^くれる。」

「明日でも、明後日でも……。」

十日の中には死ぬと予言したお杉婆にも、流石に明日の自分の運命は判らなかつたと見える。彼女は沈着払つて我子を慰めた。が、若い血の燃ゆる重太郎には、明後日は愚明日をも待たれなかつた。彼は宛がら狂える馬のように跳り上つた。

「否だ、否だ。今夜中に連れて来て呉れ。」

「でも、今夜は不可い。妾は他に用が有る。明日までお待ちよ。」

重太郎は既う耳にも入れなかつた。これから直にお葉の行方を追う意であろう、彼は旧来し方へ直驀地に駆けて行つた。

(三十四)

お葉は虎ヶ窟から虎口を逃れた。

逃れたのは嬉しいが、扱其先に種々の困難が横わつていた。路は屢々記す通りの難所である、加之も細雨ふる暗夜である。不知案内の女が暗夜に此の難所を越えて、恙なく里へ出られるであろうか。

けれども、今はそんなことに頓着する場合で無かった。お葉は唯無闇に行手を急いだ。昼ならば一度越えた路に就て、多少の心覚えや目標も有ったか知らぬが、真暗黒では何が何やら些とも判ろう筈が無い。同じような岩や、同じような谷や、同じような坂が、そこにも此処にも路を遮つて、彼女を遣らじと抑留めるようにも思われた。

「死んでも構うものか」

お葉は覚悟を極めた。見たような奴等の玩弄になる位ならば、寧ろ死んだ方が優である。彼女は足の向く方へと遮二無二と進んだ。其勇氣は健気とも云うべきであつたが、此種の冒険は気の強いばかりでは押通せるものでない。猫夫や樵夫の荒くれ男ですら之を魔所と唱えて、昼も行悩む三方崩れの悪所絶所を、女の弱い足で夜中に越そうと云うのは、余りに無謀で大胆であつた。

彼女は裳を高く褰げて、足袋跣足で歩いた。何を云うにも暗黒で足下も判らぬ。剣なす岩に踏み懸けては滑り墜ち、攀上つては転び落ちて、手を傷け、脛を痛めた。況して飛驒山中の冬の夜は、凍えるばかりに寒かつた。霧に似たる細雨は隙間もなく瀟々と降頻つて、濡れたる手足は麻痺れるように感じた。

併し彼女は飽までも強情であつた。倒るるまでは進むという覚悟で、方角も知らずに起

きつ転ころんづ、盲探めくらさぐりに辿とつて行くと、兎とも角かくも普通の山路やまみちらしい処ところまで漕こぎ着きけた。東あづまに迷まよい、南みなみに迷まよい、彼女かれは実まことに幾時間いくじかんを費たしたか知らぬが、人ひとの心こころは怖おそしいもので、何なにうやら斯ごとうやら彼の難所かたがたのなんじよを乗切のりきつたらしい。

ここまで来ると、流石さすがのお葉はなも寒氣かんきと疲勞つかれとに堪たえ兼ねて、唯とある大きな岩いわの蔭かげに這這寄よつたが、再び起たち上ある元氣げんきは無なかつた。彼女かれは殆たいていど夢ゆめのように倒たれて了しまつた。

雨あめは何時いつか降ふり歇やんで、其夜そのよも明あけ放はなれた。暁あかつきの霧きりは晴はれて、朝日あさひは昇あつた。父ちちを尋たずぬる市郎いちろうも、同じ時刻おなじじこくに此この山路やまみちへ迷まよい入いつて、或あるは此このあたりを過あぎたかも知しれぬが、お葉はなは遂ついにに見出みだされずに了しまつた。

ここで市郎いちろうに見出みだされたら、お葉はなは何なにんなに幸福しあわせであつたらう。ここで重太郎じゅうたろうに見出みだされたら、お葉はなは何なにんなに不幸ふしぎであつたらう。飽あくまでも運うの悪いお葉はなは、第二だいにの籤くじを取とらねばならぬ不幸ふしぎに陥おちつた。彼女かれはここで重太郎じゅうたろうに見出みだされたのである。

重太郎じゅうたろうはお葉はなの跡あとを追おつて、これも東西とうざいの嫌きらい無しに山中やまじゅうを駈かけ廻まわつたが、容易やすに女むすめを捉とえ得えなかつた。嶮岨けんそに馴なれたる彼かれは、飛とぶが如ごとくに駈かけ歩あるいて、一旦ひとたは麓ふもとまで降ふつたが又また思おもい直ただして引返ひっかえした。お葉はなは矢やはり山中さんちゅうに迷まよつていと信しんじたからであらう。

斯かくて此こ処こよ其そ処こよと捜たずし廻まわる中うちに、夜よが明あけた。彼かれは目眩まぼゆき朝日あさひの光ひかりを避よけて、岩いわの

蔭を縫つて歩いてみると、不図我眼の前に白い物の横わつて見付けた。

「お葉だ、お葉だ。」と、重太郎は跳つて近いた。

彼は半死半生のお葉を抱え起して、霎時は飽かずに其顔を眺めていたが、やがて傍の谷間の清水を掬い取つて、女の口に注ぎ入れた。死んだ方が寧そ優のお葉は、不幸にも又蘇生つたのである。

気が注いで見ると、自分の手は獣のような重太郎に握られていた。驚いて振放して起上ると、重太郎は再び其手を掴んだ。

「お葉さん。何故逃げるんだ。お前は俺の女房になるといふ約束じゃアないか。」

「馬鹿にしてるよ。」と、お葉は蒼い顔を瞋らして、眼を吊上げた。

「だって、昨夕約束したじゃアないか。」

「知らないよ。昨夕は昨夕、今日は今日さ。昨夕は雨が降つても、今日はお天気になるじやアないか。」

「じゃア、俺の女房にはならないのか。」

「知れたことさ。」

お葉は罵るように答えた。

(三十五)

獸のような重太郎と相対しているお葉は、頗る危険の位置にあると云わねばならぬ。彼の情が激して一旦其の野性を發揮したら、孱弱い女に対して何んな乱暴を敢せぬとも限らぬ。

お葉もそれを知らぬでは無かつたろうが、彼女も或時には其の野性を遠慮なく發揮する女であつた。或時には坑夫や土方を客にして、負けず劣らずに乱暴比べをする程の勇氣を有つていた。彼女は大抵の男を恐るるような女では無かつた。昨日彼のお杉に対して殆ど絶対的の服従を敢したのは、自分にも判断の付かぬ一種不可思議の心理作用に因つた為で、醒めたる後の彼女は依然として強い女であつた。

況てお杉はここに居ない。わが目前の敵は重太郎一人である。たとい這奴が山の同類にした所で、一人と一人との勝負ならば多寡の知れたものである。罷り間違つたらば、其の喉笛にでも啖い付いて与るまでのこと。勝負は時の運次第と、彼女は咄嗟の間に度胸を据えて了つた。

「あいて 対手が斯ういう覚悟で居ようとは、重太郎は夢にも知らぬ。彼は母に甘える小児のよう
な態度で、飽までもお葉に附纏った。」

「お葉さん。お前、何うしても俺の嫁になるのは忌か。え、お葉さん。後生だから承知し
て呉れないか。俺ア斯んな山の中に棲んでるけれども、善い宝物を沢山有っているん
だ。」

「お葉は唯冷笑うのみで、見向きも為なかつた。」

「お葉さん、真実だよ、決して嘘じやアない。俺ア昨日……いや、一昨日……阿母さん
から大事の宝物の在所を教わつたんだ。それを持出して他に売れば、一足飛びに大變な金
持になれるんだ。俺も能く知らないが、其の宝物というのは実に立派なものだ。真闇な
処でもぴかぴか光つて……。何だか斯う……。」

山育ちの彼は、之を形容すべき適當の詞を知らなかつた。重太郎は徒爾に眼を睜り、
手を拡げて、其の尊き宝であるべきことを頻に説明しようと試みた。

「そんな立派な宝物がありやア其れで可いじやアないか。お前さんが金持になりやア、何
んないお嫁さんでも貰えるんだから、妾なんぞに構つてお呉れでないよ。」

お葉は相変らず鼻で扱っているので、重太郎は愈よ急いた。

「だから、お前に頼むんだ。俺が金持になるから、お前を嫁に貰いたいんだ。何日だったか忘れたが、雨のふる日の夕方に、俺が町へ食物を獺りに出て、柳屋の門口に立つて彷徨していると、酒に酔った奴等が四五人出て来て、此の乞食め、彼地へ行けと俺を突き飛ばした。口惜いから撲つて与ろうと思つたけれども、対手が大勢だから我慢していると、そこへお葉さん、お前が出て来たんだ。」

彼は其の当時の光景を思い泛べたらしい、今更のようにお葉の顔をしげしげと眺めた。「而してお前が大きい声で、お止しよ、そんな可哀想なことをするもんじやアない。其人は妾の可愛い人なんだから……。ねえ、お葉さん。お前は然う云つたらう。俺は其時に確に聞いた。其晩、俺は窟へ帰ると、お前と夫婦になつた夢を見たんだ。それから……。それから俺は、何うしてもお前と夫婦になる氣になつたんだ。ねえ、お葉さん。判つたらう。俺は毎晩お前を夢に見ていたんだ。」

然う云われると、此方に記憶が無いでもない。成ほど過日そんなことも有つた様である。が、それは固より酒の上の冗談に過ぎないのを、世間知らずの山育ちの青年は唯一図に真実と信じて、此に飛でもない恋の種を播いたのであろう。対手に因ては迂濶冗談も云えぬものだと、お葉は今更のように思い當つた。

山 同様の分際で、深川生れのお葉さんに惚れるとは、途方もない贅沢な奴だと、今の今までは馬鹿馬鹿しくもあり、腹立しくもあつたが、斯うなつて見ると自分にも罪が無いでもない。嘘にもしろ、冗談にもしろ、自分は重太郎を可愛い人だと云つた。で、対手の方でも自分を可愛い人だと思ひ染めた。究竟は無心の小児に對つて菓子を与ると戯つた為こどもに、小児は本氣になつて是非呉れろと強請ねだつて来たような理屈である。対手が世間を知らぬ小児同様の人間だけに、斯うなると誠に始末が悪い。

(三十六)

お葉が黙つて考えているので、重太郎は又もや迫り寄つた。

「ねえ、お葉さん。お前は俺が髪をこんなはに生はしているので、忌いやなのか。それから……こんなけだもの獣類の皮を被きているので、忌いやなのか。髪は今でも直すぐに切きるよ。衣服は……金持になれば直すぐに良い衣類を買かつて被きるよ。お前にも最もツと良い衣類を被きせて与やる。それから……山に棲すんでいるのが忌いやなら、お前と一いっしよ所に町まちへ行く。何処どこへでも行く。ね、可いいだらう。ね、それから……。」

云わんとすることは未だ種々疊いろいろゐたまつてゐるらしいが、山育ちの悲しさには彼の口が自由に廻らぬ。重太郎は唾おしともしりか啞なのように、半なかばは身振や手真似で説明しながら、其その切なき胸を訴うえてゐるのである。普通の人から見れば、彼は野蠻である、兇暴である、殆どわろの眷けんぞ属くである。が、彼は決して所謂いわゆる悪人では無かつた。彼が獐しやう猛まう野獸よじゆうの如きは其そのひと人境遇じんぎやうの罪で、其そのひと人自身の罪では無かつた。

そんな理屈りくつまでは思い及ばぬにしても、お葉は氣の強いと共に涙脆なみもろい女であつた。種いろい々ろ考くわえると、最初はじめは唯憎ただたいと思つてゐた重太郎其そのひと人も、今は漸だんだん々ろに可哀あはれそうにもなつて来た。先刻さつきからの様子を見ると、彼は飽あまでも無邪むじや氣である。彼は極めて明白めいひやくに、正直ちかに、自己おのれの詐いつわりなき恋を語つてゐるのである。

形かたちは人か猿か判らぬような青年わかものではあるが、彼の恋は深山みやまの清水しみずの如く、一点人間いってんの塵ちりを交まじへぬ清いものであつた。お葉も其その誠まことには動かされた。が、此この返事は何とならう。

「お前さん、堪忍してお呉れよ。」

お葉は重太郎の手を把とつて泣いた。

「じゃア、嫁になつて呉れるかい。」

「それが不可いから謝るんだよ。妾は何うしてもお前さんのお嫁にやアなれないんだから……。」

重太郎は黙つて眼を晃らせた。

「だから、堪忍してお呉れと云うんだよ。」と、お葉は賺すように重ねて云つた。

「何、何故だ。」と、重太郎は息を喘ませて詰寄つた。

何故と聞かれると返事に困るが、お葉も重太郎と同じように片思いの恋が有る。重太郎の片思いが哀れであると共に、お葉の片思いも哀れであつた。彼女は何うしても彼の市郎を思い切れぬのである。

「お前さんは可哀想な人だねえ。」と、お葉は我身につまされて嘆息した。

「可哀想なら、嫁になつて呉れないか。」

重太郎は飽までも無邪気であつた。可愛いと可哀想とは其間に少しく距離のあることを、彼は未だ理解し得なかつた。お葉は重太郎を可哀想だとは思つたが、其同情が變じて恋とはならなかつた。

「どうしても忌か。俺が斯んなに云つても肯いて呉れないのか。」と、重太郎は泣かぬばかりに口説いた。

「堪忍してお呉んさいよ。」と、お葉は泣いて答えた。

「だから、何故だと云うのに……。」

以前のお葉ならば、「お前が忌だからさ」と、木て鼻を括つたように情なく断つたかも知れぬ。が、今は然うでない。彼女は優しく重太郎の手を把つた。

「ねえ、お前さん。妾は決してお前を嫌う訳じゃアない。それほどに妾を思つて呉れるのは、真実に嬉しいと思つている。だが、困ることには、妾にも思つている人があるんだから……。どうしてもお前のお嫁になることは出来ないんだから、何うぞ諦めてお呉んさい。ね、判つたかい。決してお前さんを嫌うんじゃないよ。世間に女は妾一人じゃアない。お前が真実に金持になれば、どんな良いお嫁さんだつて貰えるんだから……。妾よりも若い、最つと綺麗な人がお内儀さんに能るんだから……。」

重太郎は頭を掉つた。其眼には熱い涙を湛えていた。

「判らないの。」と、少しく持余したようなお葉の声も湿んで聞えた。

可哀想ではあるが、何時までも際限が無い。お葉は捉られたる袂を払つて、

「じゃア、左様なら。」

重太郎は追掛けて、又其の袂を捉えた。

(三十七)

お葉を追い捉えた重太郎は、定めて破れかぶれの乱暴を始めるかと思いの外、彼は矢張り温順い態度であった。が、其の湿んだ眼は一種異様に輝いていた。

「お葉さん。どうしても帰るのか。」

「今も云つたような訳だから……。」

「どうしても帰るのか。」と、重ねて念を押した重太郎の声には、低いながらも力が籠つていた。

彼も恐く最後の決心を固めたかも知れぬ。涙の眼は漸次に乾いて、険しい眉の間に殺気を含んで来た。物を奪い、人を殺す位のことは、彼等の仲間では別に不思議の事でもない。お葉も其の眼色を早くも悟つた。

「お前さん、妾を殺す気かい。」

重太郎は黙っていた。

「殺すなら殺しても可いよ。だが、力づくで乱暴を為ようと云うなら、妾にも料見がある

から……。」

重太郎は黙っていた。

「だから、素直にお帰りよ。」

重太郎は矢はり黙っていた。が、やがて傍の岩蔭に聳えたる山椿の大樹に眼を注げると、彼は忽ち猿のように其の梢にするすると攀登った。南向の高い枝は既に紅い蕾を着けているので、彼は其の二又の枝を掴んで折った。

何うするのかと見ていると、重太郎は其の枝を口に啣えてひらりと飛び降りたが、物をも云わずお葉の前に歩み寄つて、二又の枝を股から二つに引裂くと、何方の枝にも四五輪の蕾を宿していた。彼は其の一枝をお葉に渡した。お葉も黙つて受取つた。

二人は黙つて各自の枝を眺めていた。

「取替えて貰おう。」と、霎時して重太郎は自分の枝を出した。お葉も自分の枝を出した。春待顔に紅い蕾を着けた椿の一枝は、二人の手に因て交換されたのである。

重太郎はお葉の枝を我が胸に犇と押当てた。お葉は重太郎の枝を我が袖に抱いた。重太郎の眼には涙が見えた。お葉も何とは無しに悲しくなつた。

「じゃア、もう帰りますよ。」

重太郎は無言で首肯うみなずいた。市郎が窟くつにあると知つたら、お葉は無論引返ひっかえしたのであろうが、そんなことは夢にも知らなかつた。重太郎も知らなかつた。飛驒山中の寒あしたい朝、哀れは同じ片思いの男と女は、温かい涙を形見の花に灑そそいで別れた。

重太郎は潔いさぎよくお葉を思い切つたのであろうか。彼はお葉から受取うけとつた椿の枝を大事に抱えて、虎ヶ窟かたの方へ悄しおしお々と引返ひっかえした。

昨夜さくや彼わろがと共に山を降つて、七兵衛と闘い、安行を奪うばつたのは、市郎に對する恋の恨うらみと母の恨とであつた。が、そんなことは既もう忘れて了しまつたらしい。重太郎は唯ただこの形見の枝を保護することにのみ屈託くつたくして、夢のように岩石の間を辿つた。

窟くつの前まへに来ると、母の姿が見えぬ。少しく怪あやしんで内を覗いたが、奥にもお杉の姿は見えなかつた。

「阿母おつかさん、阿母おつかさん。」

彼は続けて呼んだ。この途端に窟の奥から一人の見馴れぬ男が飛んで出た。これは前に記した通り、市郎つかいの使つかいを頼まれて、穴の底から登つて来た坑夫ていぶ体の男である。

二人は恰あたかも入口で礎はたと出逢つた。

「誰たれだい、お前は……。」

重太郎は眼に角立てて詰つたが、男は急いでいるのであろう、返事もせずに駈け出した。窟には母の姿が見えず、加之も怪しい男が出て来たのであるから、重太郎の不審は愈よ晴れぬ。先ず飛び菟つて男の腰に組付いた。

「お前は誰だ。」

「誰でも可いよ。煩せえ。」

男は突放して又駈出そうとした。

「お前は俺の阿母さんを殺したのか。」と、重太郎は呶鳴った。

「そんなことは知らねえ。」

男は手暴く重太郎を突き退けると、彼は椿の枝を持ったままで地に倒れた。これで黙っている重太郎ではない、椿の枝を口に啣えて又跳ね起きた。此に忽ち掴み合が始まった、上になり下になり、互に転げて挑み争う中に、何方が先に足を滑らしたか知らず、二人は固く引組んだままで、傍の深い谷へ転げ墜ちた。

(三十八)

山椿の下では、お葉と重太郎との詩的な別離わかれがあつた。窟の外では、重太郎と素性の知れぬ男との蛮的な格闘があつた。こんな事件が続いてある間あいだ、市郎は暗い岩穴の底に取とり残こされて、救いの人々の来るのを待っていた。

一本の蠟燭は漸次しだいに燃え尽つくして、風なきに揺めく火の光は臙やがて其の消えんとするを示している。左さしたる重傷ではないと知りながらも、股ももと膝との疼痛いたみは漸だんだん々に激しくなつて来た。疲労と空腹とは愈よよ我を悩なやまして来た。

「七兵衛は何うしたろう。彼奴等も途みちに迷つていいのか知ら。それにしても使つかいの男が早く行いきついて呉くれれば可いが……。一体、あの男は何者だらう。土地不案内の為に、これも途中で迷つていられた日には、何時いつまで経つても際限はてしがあるまい。何どうか一刻も早く町へ出て貰もらいたいものだ。若もし彼奴あいつが不親切な奴で、金を貰もらいながら其儘そのままどこへか行つて了しまつたら何どうだらう。いや、真逆まさかにそんな事もあるまい。」

甲それから乙それへと考えながら、市郎は硬い岩を枕しぼらに暫く寝転んでいた。

「もう何時なんじだらう。」

懐中時計を取出とりだして視みると、先刻さつきからの騒さわぎで何時いつ何どうしたか知らぬが、硝子がらすの蓋ふたは毀こわれて針は折れていた。日光ひのめの視みえぬ穴の底では、今が昼か夜か、それすらも殆ど見当が付

かぬ。

待つ身の辛さは今に始めぬことであるが、取分けて今此の場合、市郎は待つ身の辛さと侘しさを染々感じた。彼は何とは無しに起き上つて、蠟燭を照しつゝ四辺を見廻すと、四方の壁は峭立の岩石であるが、所々に瘤のような突出の大岩があつて、其岩の奥には更に暗い穴があるらしい。

「は此穴に棲んでいるんだろう。」と、市郎は首肯いた。先刻自分を傷けたも恐くあの穴へ逃げ込んだのであろう。一体、彼のなるものが何匹居るのか知らぬが若し大勢が其処や彼処の穴から現われて出て、自分一人を一度に襲つて来たら到底敵わぬ。

彼は何等の武器を有つて居なかつた。而も先夜の経験に因て、彼等に対する唯一の武器は燐寸の火であることを知つていたので、市郎は慌てて燐寸の箱を検めると、剩す所は僅に五六本に過ぎぬ。彼は先刻から燐寸を濫用したのを悔いた。

で、更に念の為に蠟燭を揚げて、高い岩の上を其処ここと照して視ると、遠い岩陰に何か知らず、星のように閃く金色の光を視た。蠟燭の淡い光で熟くは判らぬが、兎にかく其処に一種の光る物があるらしい。こんな処だから何が棲んでいるか判らぬ。或は怪獣の眼かと市郎は屹と瞰上げる途端に、頭の上から小さな石が一つ飛んで来たが、幸いに身に

は中らなかつた。市郎は俄に蠟燭を吹き消した。敵の的にならぬ用心である。

「これも　の仕業だろう。」

斯う思うと中々油断はならぬ。市郎は小さくなつて岩の蔭に身を寄せた。つづいて第二の石が落ちて来た。今度のは余ほど大きいと見えて、投げると云うよりも、寧ろ転がし落したらしい。これに頭を打たれたら人間の最期である。

市郎も流石に肝を冷して、愈よ小さくなつてゐると、又もや石をがらがらと投げ落す奴がある。敵は一人ではないらしい、大小の岩石が一時に上から落ちて来た。何人も此の石攻めに逢つては堪らぬ、市郎も実に途方に暮れた。頭の上では何とも形容の能ぬ一種奇怪な笑い声が聞えた。石はつづいて落ちて来た。

「どうしたら可からう。」

此のまま小さくなつてゐるのも愚である。何とかして彼等を撃退する工夫はあるまいかと、市郎も苦し紛れに種々考へてゐると、わが傍らにひらりと飛んで来た者があるらしい。め、近寄つて来たなど、市郎直ちに用意の燐寸を摺つた。果して一人の敵は刃物を振翳して我が眼前に立つていた。

不意に燐寸の火に出逢つて、敵は例の如く立縮んで了つた。其隙を見て、市郎は我

が足下に落ちたる大石を両手に抱えるより早く、敵の真向を目がけて力任せに叩き付けると、頭が割れたか顔が砕けたか、敵は悲鳴をあげて倒れた。

(三十九)

目前の敵を一人殪したので、市郎は少しく勇気を回復した。敵もこれに幾分の恐怖を作したか、其後は石を降らさなくなつた。が、彼等は何処に隠れているか判らぬ、又何時不意に近寄つて来るか判らぬ。斯う思うと些とも油断が能ぬので、市郎は絶えず八方に気を配つていた。

併しこんな不安の状態で何時までも続いていたら、結局自分は根負けがして了うに決つてゐる。先刻から余ほど時間も経つてゐるだろうのに、救いの人々はまだ見えぬ。一旦は勝誇つた市郎も漸次に心細くなつて来た。この上は依頼にもならぬ救援の手を待つてはいられぬ、自分一人の力で此の危険の地を脱出するより他はない。

「早く然う決心すれば可かつた。」

市郎は痛む足を踏み締めて、例の毛綱を再び我が胴に緊と結び付け、綱を力に精一杯伸

び上つて、傍の高い岩に飛び付こうとしたが、何うも足が自由に働かぬ。彼は飛び損じて又墜ちた。さらでも痛い足を更に痛めた。

「到底不可い。」と、市郎は失望の声を揚げて倒れた。

この時、遠い頭の上で例の金色の光が淡く閃いた。市郎は眼を定めて熟視すると、穴の入口と覚しき所で何者か火を照しているらしく、其光に映じて例の金色が見えつ隠れつ漂うのであった。

「扱は救いの人が来たか。」

市郎は我を忘れて蹶ね起きた。精一ぱいの声を振絞つて、「助けて呉れ。角川市郎はここにいますぞ。」

声はあなたまで響いたらしい、上でも之に応じて、「おうい。」と、答えた。

市郎は重ねて呼んだ、上でも再び答えた。やれ可矣と安心する途端に、何処から飛んで来たか知らず、例の大石が磊々と落ちて来て、市郎の左の腕を強く撃つたので、彼は堪らず横さまに倒れた。生きているのか死んで了ったのか判らぬ、彼は既う再び起き上らなかつた。

上では其んなこととも知らないのであろう。大勢が声を揃えて市郎の名を呼んでいた。

其その中なかには塚田むらた巡査じゆんさの錆さびびた声こゑも、七兵衛しちべゐ老翁らうじゆんの破鐘やぶかね声こゑも混まじつて聞きえた。

この人々ひとびとは今いまや漸ようやうくここへ辿たどり着きいたのであつた。市郎いちろうが単身たんしん登山とんざんの途とに就ついた後のち、七兵衛しちべゐは慌あわてて家内かみないの人々ひとびとを呼び起おこしたが、疲れ切きつてゐる連中れんちゆうは容易りゆういに床とこを離はなれ得えなかつたので、彼等かれらが朝飯あさめしを済すまして、家いへを出でたのは午前七時ぜんしちじを過ぎすぎていた。塚田むらた巡査じゆんさも町の若者わかしよも之これに加くわわつて、一隊いちたい十四五名じゆうごなの人数にんずが草鞋わらじ穿はきの扮装いでたち甲斐あが甲斐いしく、まだ乾かわきもあえぬ朝霜あさしもを履ふんで虎とらヶ窟くつを探たづねに出でた。人々ひとびとは用心うしんの爲ために、思おもひ思おもひの武器ぶきを携もちていた。

巡査じゆんさは窟くつの案内あんないを心得こころえてゐる筈はずであつたが、何どうしたものか路みちを踏ふみ違ちがへて、あらぬ方かたへと迷まよひ入いつた。それが爲ために意外いがいの時間じかんを費つして、今いまや初はめて窟くつの入口いりぐちへ辿たどり着きいた時ときには、一隊いちたいの多くおほくは既に疲つかれ果はつて、そこらそこらに有あり合あう岩角いわかくに腰こしを卸おろして先まずほつと息いきを吐つく者ものもあつた。寒かん氣きを凌しのぐ爲ために落葉らくえつを焚たきく者ものもあつた。

けれども、巡査じゆんさは流石さすがに屈まがしなかつた。七兵衛しちべゐも頑丈がんぢやうであつた。二人ふたりが先まず窟くつの奥おくへ潜くぐり入いつて、第二だいにの石門せきもんまで仔細しさいに檢査けんさしたが、内うちには暗くい冷ひやい空そら氣きが漲みなぎつてゐるのみで、安行あんぎやうの姿すがたも見みえなかつた。市郎いちろうの影かげも見みえなかつた。

「どうしたのだらう。」

二人ふたりは愈いよ不安ふあんを感じかんじて、そこらそこらを頻しきりに見廻みわす中うちに、彼等かれらも例れいの岩穴いわあなを見付みけた。念ねんの

為に用意の松明をあげて、真暗な底を窺っている、下から救いを呼ぶ声が遠く聞えた。安行は知らず、兎にかく市郎だけは穴の底に居ることが確かめられた。

七兵衛は引返して斯くと報告すると、他の人々もどやどや入込んで来た。

「兎も角も降りて見よう。」

巡査は斯う決心して、再び四辺に鋭い眼を配ると、岩角に結び付けられたる彼の長い毛綱を見出した。これを手繰つたら、市郎の身体は無事に引揚げられたかも知れぬが、其綱の端が彼の胸に縛られてあると云うことを誰も知らなかつた。が、何人の考えも同じことで、巡査も先ず此の毛綱に縋つて、行かれる所まで行つて試ようと思ひ付いた。

片手は綱に縋り、片手は松明を把つて、塚田巡査は左右の足を働かせながら、足がかりとなるべき大小の岩を探りつつ、漸次に暗い底へ降りて行つた。他の人々は息を嚔んで其行動に注目していた。

(四十)

塚田巡査が穴を降るに就ては、市郎ほどの危険と困難とを感じなかつた。上に立つ大勢

の人々は綱あやつを操あやつつて彼の行動を助け、且かつつ幾多たいまつの松明を振ふり翳かぎして、能あたう限りの光明あかりを彼の行手に与えて居た。

巡查も亦また大胆であつた。一条の綱を力として猶予なくすると降りて行くと、彼は中腹やぶひらたの稍扁平い岩石の上に立つて、先まず彼の安行あかの死骸を発見した。驚いて其その手足あたらたを檢めると、既に数時間の前に縊こしき切れたらしい、老人の肉も血も全く冷えていた。

父が此かくの如き有様であるとすれば、其子そのの安否も甚だ心許ないものである。巡查は念の為に市郎の名を呼んだ。が、声は四方の岩に反響するばかりで、底には何の返答こたえもなかつた。十分前までは頻しきりに救助すくいを呼んでいた市郎が、俄にわかに黙つて了しまつたのは不可思議である。これも若もしや何等かの禍害わざわいを蒙こうむつたのではあるまいかと、巡查は胸を騒がした。

此上このは一刻も早く底の底まで探らねばならぬ。巡查は安行の死骸を見捨てて、更に底深く降りて行くと、途中には所々に突とつしゅつ出した大小の岩が聳そびえて、天然か人工か知らず、其その岩の上には横に低い穴が開かれています。けれども、先を急ぐ巡查は其その穴の奥を一々検査する暇は無かつた。彼は唯ただ真直まっすぐに降りて行つた。

やがて底近く来たと思う頃に、滔とうとう々たる水の音が凄まじく聞えた。松明を振ふり照てらして視みたが水らしいものは見えぬ、恐おそく地の底を流れるのであろう、岩に激げきするような音が宛さな

がら雷らいのように響いた。更に二間けんばかり降りると、自分の縄すなに何物なにかか縛くられていたのを発見した。巡查は息も吐つかず急いで降りると、それは人であった、彼の市郎であった。

巡查は今や幾十尺の底に達したのである。先其まずの綱を解といて市郎を抱おこえ起すと、彼も所々よしよに負傷して、脈は既に止とまっていた。が、これは確たしかに血温けつおんが有る。巡查は少しく安堵の眉を開いて、取敢とりあえず彼の綱を強く曳ひくと、上では直すにおうと答えた。

この時、巡查の足下あしもとを距さる一間けんばかりの所で、怪しい唸うなりごえ声こゑが聞えた。傷きずいた野獸けつが喘あえぐようである。松明をそなたへ向けて窺うかがうと、岩を枕まくらに唸うなりごえっているのは、半面ちまへ血塗ちまぶれの怪しい者であった。人か猿か判らぬ。「これが所いわゆる謂山い だな。」と、巡查も悟さとった。で、猶なほ能よく其その正体を見届ける為ために、其傍そばらへ一歩進み寄ろうとする時、頭の上から大きな石が突然転おげ墜おちて来た。巡查は慌あわてて飛退とびのくと、石は傍かたの岩角いしに中あたって、更に跳ね返かって彼のかの上に落ちた。傷きずめる顔は更に微塵みじんに碎けて、怪しい唸うなりごえ声こゑは止とんだ。

併しかし彼のかの大石は自然に落ちて来たのか、或あるは故意いに投げ落したのか、巡查には早速さそくの判断さだめが附つかなかつた。若もし故意であるとするれば、四辺あたりには同類なわ猶なほ潜ひそんでいるに相違ちがない。巡查は再度の襲撃を避ける為ために、慌あわてて我が松明を踏ふみ消した。

穴の底は再び旧の闇に復つた。遠い地の下を行く水の音が聞えるばかりで、霎時は太古の如くに静であつた。

下の松明が俄に消えたので、上の人々は又もや不安に襲われた。七兵衛を始め、一同が声を揃えて、おういと呼んだ。が、巡査は容易に答えなかつた。迂濶に叫ぶと、其声を使ふに何処からか岩石を投落される危険を懼れたからである。

そうとは知らぬ人々は愈よ不安の念に驅られて、手に手に松明を振翳しつつ穴の底を窺つたが、底の底までは到底達かぬ。この上は更に第二の探検隊を降すより他は無かつた。「可、俺が降りて見る。」

六十に近い七兵衛老爺が手に唾して奮然と起つを見ては、若い者共も黙つては居られぬ。皆口々に、「老爺さんは危ねえ、私等が行く。」と、遮り止めた。が、此の毛綱を伝つて降りると云うことは余り安全の方法でない。

「何か可い物はあるまいか。」

飛驒の山人は打寄つて、この国特有の畚を作ることを案じ出した。

(四十一)

飛驒の畚渡しは、昔から絵にも描かれ、舞台にも上されて甚だ有名である。河中に
岩石突兀として橋を架ける便宜が無いのと、水勢が極めて急激で橋台を突き崩して
了うのと、少しく広い山河には一種の籠を懸けて、旅人は其の兩岸に通ずる大綱を
手繰りながら、畚に吊られて宙を渡つて行く。勿論、今日では其仕掛に多少の改良は
加えられたが、天然の地形は未だ畚渡しの全廢を許さぬ。飛驒の奥ふかく迷い入る人は、
大切な生命を一個の畚に託して、眼も眩むばかりの急流の上を覚束なくも越えねばなら
ぬのである。

されば今この人々は早くも畚を思い付いた。七兵衛が指揮の下に、大勢は窟の外へ一旦
引返して、四辺に立つたる杉や樅の大枝を折った。或者は山蔦の蔓を折った。斯くて
約二十分の後には、大きい枝を組み合わせ、長い蔓を巻き付けて、人を容るるに足るほど
の畚を作り上げた。

「これがあれば大丈夫だ。」

彼等は再び窟に入つて、畚を卸す準備に取懸った。畚を吊るには彼の毛綱が必要であ
る。大勢が手を揃えて其綱を繰上げると、綱の端には尠からず重量を感じたので、不審な

がら兎も角も中途まで引揚げると、松明の火は漸く達いた。洋服姿の市郎は胴を縛られたままで、さながら縁日で売る亀の子のように、宙に吊られつつ揚つて来たのである。人々も驚いて声を揚げた。

「や、小旦那……。角川の小旦那……。早く引揚げろ。」

市郎は恙なく引揚げられた。が、彼は正体も無く其処に倒れて横わったので、騒ぎは愈よ大きくなつた。一隊の中でも足の達者な一人は、麓まで医師を迎えに走つた。斯うなると、巡査の身の上も益々不安である。権次という若者を乗せた畚は直ちに卸された。

畚が中途まで下つて来た時、暗い岩穴の奥から一個の怪しい者が現われた。彼は刃物を振翳して、綱を切つて落そうと試みたが、綱は案外に強いので、容易に刃が立なかつた。而も権次が無闇に振廻す松明の火に恐れて、彼は忽ち逃げ去つた。畚は滞りなく底に着いた。

塚田巡査は先刻から待侘びていたらしい、暗い中から慌しく進み寄つて、先ず其の無事を祝した。権次は畚から降り立って、合図の綱を強く曳くと、上ではおうと答えて、畚を繰ると繰上げた。

「用心しないと不可い。何処からか石を投げる奴があるぞ。」と、巡査は注意した。権次

は首を縮めて岩のかけに隠れた。

つづいて第二第三の畚が卸されて、穴の底にも大勢の味方が殖えた。もう斯うなつては、隠れたる敵も恐怖を作したのであろう、何等危害を加えようとも為なかつた。人々は持つたる松明を揚げて四辺を窺うと、そこには鬼の如きお杉婆の死顔と、猿の如き山の亡骸とを発見した。

此上の手續は委しく記すまでもあるまい。権次が一旦上まで引返して、一同に其始末を報告した上で、三個の亡骸は畚に乗せて順々に引揚げられた。第一は安行、第二はであった。最後に乗せられたお杉の亡骸は、既に頂上まで達したと思ふ頃、何うした機会か其畚は斜めに傾いて、亡骸は再び遠い底へ真逆様に転げ落ちた。更に畚に乗せて再び吊上げると、今度も亦中途から転げ落ちた。お杉の靈魂は此窟を去るのを嫌うのである。が、何うしても其儘には捨置かれぬので、最後には畚に緊と縛り付けて、遂に彼女を上まで運び出した。

これで先ず屍体の収容は済んだ。三個の亡骸を窟の外へ昇き出して明るい所で検視を行うと、安行の屍体には何等負傷の痕も無く、其顔は依然として安らかに眠っていた。が、お杉の瞋れる顔は宛然の鬼女であった。加之も高い所から再三転げ落ちて、劍の如き岩

石に撃れ劈かれたので、古い鳥籠を毀したように、身体中の骨は滅裂になつていた。更に人を駭かしたのは、彼の山の最期であつた。幾百年の昔から、口でこそ山と云うけれども、誰も明白に其形を認め得た者は無かつた。然るに今や白昼に其の怪しき形骸を晒したのである。白昼に幽霊が出たように、人々は驚異の眼を瞠つて、何れも其の周囲に集り來つた。

(四十二)

此に伶俐な觀世物師があつたら、直に前代未聞と吹聴すべき山なるものの正体は抑何んなであつたか。勿論、彼等にも牝牡はあろうが、今ここに屍体となつて現われたのは、確に女性であつた。脊丈は先ず四尺ぐらいで、腰に兔の皮を纏つている他は、全身赤裸々である。鮫のように硬い皮膚の色は一体に赭土色で、薄い毛に覆られていた。頭は小さく、眼も小さく、額の著るしく窪んでいるのが人の注意を惹いた。彼等の或者は非常に長い髪を垂れていると伝えられるが、これは殆ど禿頭と云つても可い位で、脳天に僅少ばかりの灰色の毛がちよぼちよぼと生えているのみであつた。

鼻は猿のように低かった。耳は狐のように立っていた。口も比較的きいろに小さい方で、黄くちびるい唇から不規則に露出むきだしている幾本の長い牙は、山犬よりも鋭く見えた。足の割には手が長く、指は矢やはり五本であるが、爪は鉄よりも硬く且尖かどがつていた。手掌てのひらの皮が非常に厚く硬いのを見ると、或場合あるには足の働きもして、四つ這いに歩くらしい。

これが満足で居ても既に此かくの如き異体いいていの怪物である。況まして市郎の為に、最初はじめは靴で額を蹴破られ、次に石を以て真向まっこうを打割うちわられ、最後には味方の石に因よつて顔一面を砕かれたのであるから、肉は砕け、骨は露あらわれて、其その醜ゆう、其その怪かい、実に形容も能できぬ光景ありさまであつた。人々も之これに対しては何とも云うべき詞ことばを知らなかつた。

「一体、これは何だろう。猿か知ら、人間か知ら……。」

猿か人間か到底判とちもらぬ、究竟つまりは一種の山　と云うものであると答えるより他は無かつた。塚田巡査も此この解釈には苦くるんだ。

「若もし之これが生きていたらなあ。」と、呟つぶく者もあつた。実際、之これが生きていたら、人か猿かの区別が付くかも知れぬ。万一、彼が人間の詞ことばを幾許いくばか解するとすれば、訊問の結果、どんな有益な発見が無いとも限らぬ。

「そうだ。此この機会に乗じて奴等いけどを生捕いつて与やらう。」

塚田巡査は野心に富んでいた。又、仮い野心が無いにしても、人間に対して屢々危害を加える山の如きものを唯見逃して置くという法は無い。殊に昨夜の身元知れざる惨殺屍体と云い、今日の安行殺害事件と云い、何れもに關係があるらしく思われるのであるから、警官の職分として、唯見逃しては置かれぬ。巡査は再び窟に入つて、穴居の捕獲すべく決心したのも無理ではなかつた。

巡査の決心と勇氣とに励まされ、これに又幾分の好奇心も交つて、数名の若者は其後に続いた。七兵衛等は後に残つて、生死不分明の市郎と三個の屍体とを嚴重に守つていた。

松明を把つたる巡査と他数名の勇者は、頼光の四天王が大江山へ入つたような態度で、再び窟へ引返した。巡査が先ず畚に乗つて降りた。他の者も順々に降りた。

穴の中は依然として暗かつた。松明の光を便宜にして、ここぞと思うあたりの岩穴を一一検査すると、岩壁を穿つたる横穴は数ヶ所に拓かれていた。が、穴の天井は極めて低いので、到底真直に立つては歩かれぬ。人々はのように四つ這いになつて進んだ。

第一の穴は行止りになつていて、別に何者をも発見しなかつた。第二の穴も空虚であつた。

「め、もう逃げたかな。」

更に降つて第三の穴を窺つた。ここは比較的に大きい岩が突出していて、苔に包まれたる岩の面は卓子のように扁平であつた。巡査は松明を片手に這い寄ると、穴の奥から不意に一個の石が飛んで来た。石は松明に中つて、火の粉は乱れ飛んだ。素破や一同色めいて、何れも持つたる武器を把直した。

若者の一人は猟銃を携えていた。或者は棒を持っていた。或者は竹槍を搔込んでいた。巡査は劍の柄を握つて立つた。

敵より投げたる一個の石は宣戦の布告である。人間とと此に戦鬪を開かねばならぬ。

(四十三)

はこの奥に棲んでいると見当は付いた。が、敵の方にも何んな準備があるか測り知られぬので、巡査等も容易には進み兼ねた。敵の方でも最初の石を投げた後は、鎮り返つて音も為さない。

併し此のままに何時までも睨み合っている、際限が付かぬ。塚田巡査は此に一策を案じ出した。

「松明を消せ。燈火を消せ。」

敵は最も火を嫌うのである。此方が火を消したならば、恐く勢いを得て突出して来るであろう。そこを待受けて囲み撃つという計略であった。守ること固きものは誘うて之を撃つ、我が塚田巡査は孫子の兵法を心得ていた。

躡して人間よりも愚であった。松明の火が消されると共に、俄に石を投げ初めた。巡査等は身を屈めて其的に立つのを避けた。敵は愈よ増長して、穴の奥から二匹三匹這い出して来た。彼等は我が術中に陥つたのである。

「占めたツ。」

巡査は心に喜んで、闇を探りながら衝と寄つて、其の一匹の襟首を掴んだ。が、敵も中々素捷かつた。忽ち其手を払い退けて、口に啣えたる刃物を把直した。其切先は危くも巡査の喉を掠めて、背後の岩に戛然と中ると、澆と立つ火花に敵は眼が眩んだらしい。其隙を見て巡査は再び組んだ。背の低い敵は巡査の足を取った。而も此方は柔道を心得ているので、倒れながらに、敵の腕を引担いで投げた。が、生憎に穴の入口へ向つて

投げたので、彼は奇怪な叫聲を揚げながら、再び奥へ逃げ込んで了つた。

は一匹でなかつたが他は入口に立つて格闘の模様を窺っていたらしい。で、今や真先の一匹が斯る始末となつたので、少しく怯れが出たのかも知れぬ。何れも奥へ引退つて、再び石を投げ初めた。何分にも暗いので始末が悪い。巡査は危険を冒して、穴の奥へ潜り込んだ。他の者共も勇を鼓して後に続いた。

敵は屈せずに石を投げたが、幸いに石が小さいのと、距離が余りに接近しているのと、我には差したる損害を与えなかつた。それでも二三人は顔や手に微傷を負つた。もう斯うなれば騎虎の勢いで、今更後へは引返されぬ。巡査も頬に打撲傷を受けながら、猶も二三間進んで行くと、天井は少しく高くなつて、初めて真直に立つことができた。

敵は幾人居るか判らぬが、兎にかく石を投げ尽したらしい。今度は木のような物や、骨のような物を投げ初めた。骨は尖つているので、巡査は又もや左手を傷けた。

もう仕方がないので、巡査は剣を抜き閃かした。或者は猟銃を撃つた。散弾が轟然として四辺に迸ると、頑強の敵も流石に胆を挫がれたらしい、踵を旋してばらばらと逃げ出した。巡査等は勝に乗って追い詰めると、穴は漸く広くなつた。ここが恐く行止りで、彼等は今や袋の鼠になつたろうと思ひの外、何処を何う潜つたか知らず、漸次に蹙音も消

えて了つて、後は寂寞たる闇となつた。

「奴等は何処へ隠れたらう。」

松明は再び点されたが、広い穴の中に何者の影も見えなかつた。幾らでも隠形おんぎようの術を心得ている筈はない。恐く何処にか隠れ家があるうと、四辺あたりを隈なく照し視ると、穴の奥には更に小さい間道ぬけみちが有つた。彼等は此処から這い込んだに相違あるまい。巡查等は続いて其穴を潜つた。

穴は極めて低く狭いので、普通の人間には通行甚だ困難であつたが、人々は宛ら蝦蟇さながのようになつて僅に這い抜けた。行くに随つて水の音が漸々に近く聞えた。水の音ばかりで無い、日の光も薄く洩れて来た。

路は漸次に明るくなつた。暗い湿つぽい岩穴は全く尽きて、人々は大いなる谷川の畔に出た。岩を噛む乱流は大小の滝布を作して、滔々と漲り落ちている。川に沿うて熊笹の藪が生い茂つていた。左右は峻しい岩山である。此の間道から山深く逃げ入つたのである。

(四十四)

「到頭逃して了った。」

塚田巡査は齒齧をした。微傷ではあるが、其の手首からは血が流れていた。他の二人も顔や手の傷を眺めながら、失望と疲労との為に霎時は茫然と立っていた。

この時、頭の上で人声がわやわや聞えた。仰げば高き絶壁の上に、大勢の人の行き違う姿が見えた。初めて知る、ここは恰も虎ヶ窟の前に横われる谷底で、頭の上に立騒いでいる人々は、彼の七兵衛や権次の群であった。

斯くと知るや、下からはおういおういと呼んだ。上からも答えた。中にも権次は岩の出鼻に縋りつつ、谷に向つて大きな声で叫んだ。

「は何うした、捕つたか。」

「駄目だ、駄目だ。間道から逃げて了った。」と、下でも叫んだ。

「惜いことを為たな。今お医師が来て、角川の小旦那は蘇生つたぞ。」

「蘇生つたか。」

「大丈夫だとお医師が受合つた。何しろ、早く上つて来い。」

「おお。」

上と下とて遙かに呼び合っていたが、何を云うにも屏風のような峭立の懸崖幾丈、下では徒爾に瞰上げるばかりで、攀登るべき足代も無いには困った。其中に、上では気が注いたらしい。

「待て、待て。畚を持って来るぞ。」

斯う云つて権次は立去つた。下の人々は唯ある大岩に腰を卸して、先ずほつと一息吐いた。其間も巡査は油断が無い、川に沿うて往きつ戻りつ、ここらの地形を案じていた。

この川は人跡絶えたる山奥から湧いて来るのである。凄じい勢いで滔々と流れ落ちている。其の支流は虎ヶ窟の下を潜っているらしい。窟の底で絶えず轟々たる響を聞くのは之が為であろう。近く聞けば水の響は、実に耳を聳するばかりであつた。

其の水音に消されて、今までは誰も聞付けなかつたが、何処やらで微な唸声、聞えるようである。巡査は忽ちに耳を敬てた。そこか此処かと声する方を辿つて行くと、彌が上にも生い茂れる熊笹や齒朶の奥に於て、確に人の呻くを聞いた。そこらの枝や葉は散々に踏躡られて、紅い山椿の蕾が二三輪落ちていた。

巡査は進んで熊笹を掻分けると、年の頃は五十ばかりの坑夫体の男が、喉を突かれて倒れていた。巡査も驚いた。他の人々も駈集つた。昨日から今日にかけて、種々の出来事

が何うして斯う続発するのであろう。一同も聊か呆れた形であつた。

「一体、これは何者だろう。」

「これも に殺されたのか知ら。」

兎に角も引起して介抱すると、男には未だ息が通つていた。巡査は谷川の水を掬つて飲ませると、彼は僅に眼を睜いたが、警官の姿を視るや俄に恐怖と狼狽の色を現わして、頻に手足を悶いていたが、何分身動きも自由ならぬ重傷である、彼は呻りながら又倒れた。

崖の上ではおういおういと呼んだ。畚は今や卸されたのである。人々は順々に乗つて、瀕死の男も同じく乗せられた。塚田巡査は最後に上つた。

市郎は医師の手当に因て、幸いに蘇生したので、既に麓へ昇き去られていたが、安行とお杉と と四個の屍体は、まだ其儘に枕を駢べていた。そこへ又、此の怪しい男が朱に染みたる身を横えたのである。昔から魔所と伝えられた虎ヶ窟の前に、斯る浅ましい姿の者が四個までも列んだのを見た人々は、抑如何に感じたであらう。白昼ではあるが山風は寒かつた。人々は顔を見合わして物を云わなかつた。

この驚くべき報告が麓へ拡まると、町からも村からも大勢の加勢が駈着けた。安行の屍体は自宅へ、お杉と 骸は役場へ、其れ其れに引渡しの手続を了えた。まだ息

の通かよっている怪しひとまの男は一先ず駐在所へ運び入れて、医師の手当を受けさせた。

塚田巡査は疲労をも厭ただわず、直ちに事件の取調べに着手した。お杉と山　との死は市郎の申立もつたてに因よつて事情判明したが、安行は如何いかにして殺されたか能く判らぬ。次に此この瀕死の男は何者の手に掛かつたのか、それも判らぬ。彼はお杉や　に關係があるか或あるいは別種の出来事か、それも判らぬ。猶其他なむのほかにも昨夜の惨殺屍体と云うものが有る。それと之これと因縁の糸が連絡しているか何どうか、それも亦疑問である。巡査も此この解釈に就つては大いに頭なやまを悩なした。

(四十五)

「どうも判らぬ。」と、塚田巡査も頻しきりに考えた。市郎に就つては此この上に取調べようも無い。わろは逃げて了しまつた、重太郎は行方不明であつた。唯ただここに残のこっているのは、重傷に苦くるめる彼の坑夫てい体の男一人いちにんである。これに就ついて嚴重に詮議するより他はないが、何分せいめにも生命いきどく危篤いという重体であるから、手の着つけようが無い。

昨夜村境さくやむらざかいで発見した惨殺死体は、面つらの皮を剥はがれているので何者か判らぬ。この男

も言語不通であるから何者か未だ判らぬ。仮い被害者は誰にもあれ、其の加害者は何れもであるとは断定してしまへば、無造作に解釈は着くのであるが、以外にも何等かの因縁があるらしく感じられた。而して又、彼の惨殺死体と此の負傷者との間には、何か眼に見えぬ糸が繋がっている様にも感じられた。が、それは単に「感じられる」と云うに過ぎないので、巡査にも其理屈は到底説明し得られなかつた。

負傷者は容易に死なず、医師の説に依れば幾分か持直した気味だと云う。巡査は拗らしく手を束ねて、其の快癒に向うのを待つ中に、四五日は徒爾に過ぎた。

虎ヶ窟を中心として起れる此の奇怪なる殺傷事件は、忽ち飛驒一國に噂が拡まつて、更に隣國をも驚かした。明治の世の中に が出現したと云うすらも既に新聞であるに、況て其れが人を殺したと云い、巡査と格闘したと云う。の牝が大石で頭を砕かれたと云う。これと同時に幾多の殺人事件が降つて湧いたと云う。鬼婆が殺されたと云う。聞く事毎に人を騒がす事ばかりなので、或者は嘘だろうと云い消した。けれども、事實は争われぬ。地方の各新聞は筆を揃えて、其の顛末を記載した。の屍体の写真まで掲げられた。市郎の遭難実話が載せられた。塚田巡査の探偵談が記された。噂は更に尾鱗を生じて、殆ど前代未聞の大椿事とまで伝えられた。

無論、斯うなつては塚田巡查一人の手に負える問題ではない。高山からも警官が大勢出張した、岐阜の警察からも昼夜兼行で応援に來た。狭い駅中は沸返るような混雑である。

「どうも大変な事が起つたね。」

大学の制帽を被つて、旅行用の大革包を提げた若い男が、四辺の光景を幾度か見返りながら、急ぎ足で角川家の門を潜つた。門口には七兵衛老爺が突ツ立っていた。

「やあ、吉岡の小旦那……。どうも苛え騒動が出来ましてね。」

「そうだツてね。驚いたよ。」と、若い大学生は首肯いて、「併し市朗君は大した事もないのか。」

「はあ、お庇様で大分快い方で……。何、大丈夫だとお医者も云つて居ますが……。何しろ、一時は胆を潰しましたよ。」

「そうだろう。まあ、早く行つて逢おうよ。に殺され損なうなんて、馬鹿な話だ。言語

同断だよ。」

大学生は七兵衛に誘われつつ、威勢よく奥へ駈込んだ。彼は吉岡家の長男忠一である。妹の冬子が市郎と結婚するに就て、十一月初旬には帰郷する心構えをしていた所が、更に

市郎から年末休暇まで延期しろと云つて来た。と思うと、やがて又冬子から電報が来て、大變が出来たから直に帰れと云う。何が何だか少しく煙に巻かれたが、兎も角も大變とあつては聞捨てにならぬ。忠一は早々に旅装を整えて帰郷の途に就いた。

富山へ来ると、例の噂が既う一面に拡つていて、各新聞にも精細の記事が掲げられていた。読んで見ると成ほど大變である。が、彼は其の大變に驚くと同時に、此事件に就て一種の興味を湧した。彼は此の機会に乗じて、所謂山なるものを十分に研究したいと思つた。冬の夜の明けぬ中に富山を発つて、午後四時過る頃にここへ着いたのである。

安行の葬儀は市郎全快の上で営む事に決したので、一旦は火葬に附し、其遺骨は広い座敷の正面に祭られてあつた。親戚や近所の人々も大勢控えていた。忠一の母お政も来ていた。それ等に対する挨拶は後にして、忠一は先ず市郎の病室に入った。

市郎は書齋の八畳に寝ていた。其傍には冬子が看護していた。

「あら、兄さん。」

「どうしたい。飛だ騒動が持上がったもんだね。」と、忠一は其枕元に坐り込んだ。室内には既う洋燈が点つていた。

(四十六)

「冬子さんから電報を打つたと云う談は聞いたが、よく早く帰つて来られたね。」

市郎は痛む手を抱えながら起きようとするのを、忠一は慌しく制した。

「まあ、無理をしずに寝て居たまえ。阿父さんは何うも飛んだ事だったね。そこで、君の痛所は何うだ。もう快いか。」

「いや、まだ悉皆快いという訳には行かないよ。何でも三週間ぐらひは懸るだろうと思うが……。併しまあ、生命に別条の無いのが幸福さ。」

市郎は苦笑いした。顔の色はまだ蒼ざめていたが、元氣は左のみ衰えたようにも見えないので、忠一も先ず安心した。

「生命に別条があつて堪るものか。相手は多寡がじゃアないか。はははは。」

「でも、一時は真実に喫驚しましたわ。」と、冬子は眼を丸くして云つた。

「そりやア誰でも喫驚するさ。僕だつて、一旦は驚いたよ。吉岡忠一の友人が、そんな馬鹿馬鹿しい目に逢つたかと思うと、実に唾然とせざるを得なかつたよ。全体、なんて云う者に苦められると云うのが、文明人の恥辱だからね。と云うと、君ばかりでなく、死

んだ阿父さんまで侮辱するようだが、實際話らない災難に逢つたものだよ。」

「恥辱でも仕方が無いわ。先方から不意に襲つて来るんですもの。」と、冬子は少しく不平そうに兄を顧つた。

「いや、不意に襲われると云うことが已に不覚だよ。」と、忠一は笑つて、「の如き者は一挙して全滅して了うか、左もなくば之を教化して真人間にするか、二つに一つの方法を択ぶより他はないよ。唯漫然と打捨つて置くから、往々にして種々の禍害を醸すのだ。勿論、打捨つて置いても、自然に亡びつつあるには相違ないが、それには未だ尠からぬ年月を要するだろう。」

「真人間にするツて……。 健張人間でしようか。」と、冬子は眉を顰めた。

「人間だよ、確に人間だよ。ねえ、市郎君、この夏も君と 就て種々と研究した事があつたじゃないか。」

「むむ。僕も委しく研究したいと思つて、参考の為に親父にも種々訊いている中に、今度の騒動さ。親父はあんな氣象にも似合わず、因襲的に を恐れていたらしかつたが到頭こんな事になつて了つた。そこで、君はいよいよ 人間と見極めたのか。」

「や山男のたぐいは皆人間だよ。僕も従来はに就て多くの注意を払つていながつたが、

此夏君と話し合つてから、俄にわかに

研究を思い立って、東京へ帰る直すぐに人類学の書物を種い

々いろいろあさ獵あさつて見た。諸先輩の説も聴いた。何分研究の日が猶なほ浅いのみだから、僕も余り詳細すくなくの説明は能できないが、兎とにかく我々と同一の人類であると云うことだけは明白に云えるよ。尠すくなくも僕は然そう信じているよ。」

「我々と同じ人間が何どうして なんぞになつたのでしょうか。」と、冬子うたがひ疑がい惑がいは解けそ
うも無かつた。

「委くわしく云えば長いことだが、まあ簡かん短たんに説明すると、こんな理屈になるんだ。」

冬子が注ついで出す茶を一杯飲んで、忠一は鉄てつ縁ぶちの眼鏡を掛け直しながら、今や本論に
入いらうとする時、彼かの七兵衛が襖ふすまから顔を出した。

「あの、駐在所から塚田さんが見えましたが……。」

「むむ、此方こつちへ通して呉くれ。」と、市郎が首肯うなずいて見せると、七兵衛は心得て去つた。

「塚田巡査、相変らず勤勉だね。」と、忠一は微笑した。

「実際、勤勉だよ。殊に今度の事件に関しては、殆ど寢食を忘れて奔走しているんだ。今
日来たのも、何か犯人搜索上に就ついて僕に聞き合あわせにでも来たんだらう。」

「あの巡査は と格闘したと云うじやアないか。職務とは云え流石さすがに偉いよ。」

こんなことを云っている中に、噂の主は帯剣を蔓めかしながら入つて来た。近所の人であるから、忠一とも予て相識つていたのである。双方の挨拶は式の如くに終つた。

「何かお急ぎの御用ですか。」と、市郎が問うた。

「いや、急ぎと云うでも無いですが、今日は虎ヶ窟を検査に行くと、不思議なものを発見したのです。」

「ははあ、何んなものを……。」

「岩穴の壁に沢山の字が書いてあるのです。恐く字だろうと思つたのですが、我々には到底読めないで……。」

「字が書いてありましたか。」と、忠一は思わず乗出した。

(四十七)

虎ヶ窟の壁に文字の跡が有るといふのは、頗る興味を惹く問題であつた。一座悉く耳を傾けると、塚田巡査は首を拵りながら、

「今も申す通り、我々には字だか絵だか符号だか實際判然しないのですけれども、何うも

文字らしく思われるのです。勿論、刃物の尖で彫付けたもので、何十行という長いものです。あれが悉皆判れば余ほど面白からうと思うのですが、何うでしょう、あなたには……。読んで下さることは能ますまいか。」

「さあ、読めるか何うか判らんですが、兎にかく何んなものだから、是非一度見たいもんですな。」と、忠一も非常の乗気であつた。

「今日は既う遅いですから。明日御案内を為しましょう。」

「どうか願います。若し果して其れが文字であるとすれば、わろに対する僕の意見が愈よ確実になる訳ですから……。」

「何か 就て御意見があるですか。」

「忠一君には大いに意見があるんだそうで、今これから大演説を始めようと云う処へ、あなたが見えたんです。」と、市郎は笑いながら喙を挟んだ。

「それは好い所へ来ました。わたくしも参考の為に是非伺いたいものです。」と、巡査も熱心に膝を進めた。

「兄さん、お話しなさいよ。」と、冬子も強請むように迫り問うた。

聴者が熱心であるだけに、弁者にも大いに挑発が付いて、忠一も更に形を改めた。

「いや、大いに意見があると云う程でも無いんですが、近頃僕が取調べた所では、概略先ずこんな訳なんです。日本ばかりでなく、支那にも昔から山鬼さんき又は野婆やばなどと云う怪物の名が伝えられています。山鬼は日本で云う山男或は山のたぐいで、野婆は即而やまうば姥ばあでしよう。尤も地方に因て其名を異にするようで、日本でも奥羽地方では山人やまびとと云い、関東地方では山男と云い、九州地方では山やまわろと云い、ここらでも主にと呼よつ様です。そこで其そのなるものは元来何であるかと云うと、大和民族の我々よりも早く既此この本土に棲んでいた人種で、其中そのうちにはアイヌもありましょう、所謂いわゆる土蜘蛛という穴居人種けつきよもありましょう、又は九州の熊襲くまその徒やからもありましょう。斯こういう野蛮人種が我々大和民族と闘つて、或ある者は亡ほろされた、或ある者は山奥へ逃げ込んだ。其その逃げ込んだ奴等が深山しんざん幽谷ゆうこくの間あいだに隠れて、世間普通の人間とは一切の交通を断たつて、何千年か何百年かの長い間、親から子、子から孫と其その血統を伝えて来たもので、兎とに角人間かくには相違ないんです。現に誰も知しっている一例を挙げれば、肥後ひごの山奥にある五ごヶ庄かしょうです。壇の浦で亡ほろびた平家の残党は彼かの山奥に身を隠して、其後そのご何百年の間、世間には知られずに別天地を作っていました。

「成程なるほど……。」と、巡査は酷く感心して聴きいていたが、市郎は少かしく頭かしらを傾かけた。

「君の説も一応は道理の様に聞えるが、五個の庄の住民は矢はり普通の人間で、決してや山男類では無いと云うじゃアないか。」

「無論さ。」と、忠一は首肯いて、「五個の庄の住民は何れも平家に由縁の者で、彼等は久しく都の空気を呼吸していた。平家の公達や殿原は其当時に於る最高等の文明人種であつたのだ。随つて彼等が如何なる山村僻地に流落しても、或程度までは自己の有する文明を維持して行く力を有つていたから、子孫相伝えて兎も角も今日に至つたのだ。之に反して、彼のアイヌや土蜘蛛の種族は元來の野蠻人種で、最初から自己の文明というものをも所有してないから、彼等が山に隠れ、谷に潜んで何十代を送る間には、野蠻の程度が愈よ加わるのみで、寧ろ漸々に退化して、人間か獸か区別が付かぬ様になつて了つたのだ。昔から山や山男と云うのは即翹だ。彼の頼光が足柄山から山姥の児を連れて来たと云うのが実説ならば、其の金太郎と云うのは即ち山の人で、文明の教育を受けた結果、後に坂田金時という立派な勇士になつたのだらう。」

「成程……。」と、巡查は又首肯いたが、市郎と冬子は未だ腑に落ちぬらしく、霎時は黙つて考えていた。広間の方には坊さんでも来たのか、鉦を叩く音が低く聞えた。

(四十八)

「先まず然そう云う理屈であるから、我々の先祖は勝利者で、わろの先祖は敗北者で、我々がを恐るる筈は無いのだ。けれども、先祖の歴史を委くわしく知らぬ我々が、何百年の後のち、不意に山奥で異形いぎようの者に出逢うと、何か一種の魔者まものであるかの様に考えられて、跡をも見ずして逃にげ帰るといふ事になる。又、彼等は先祖代々深山幽谷しんざんゆうこくに棲んでいるから、山坂を駆かけ歩あくことは普通の人間よりも素捷すばやいであろうし、腕力も亦強またいかも知れない。随したがつて種々いろいろの臆説おそいが甲それから乙それへと附会ふかいされて、何だか神秘的の色彩を帯びた怪談が伝えられる様ようになつて了しまつたのだ、要するに　は、人間漸次しだいにに退化して所謂猿人いわゆるえんじんに近くなつたものだと思えば可いい。」

忠一が息も吐つかずに弁ひじるのを、市郎は徐しずかに遮かきつた。

「まあ、待ち給え。君の議論も一通りは解わかつたよ。けれども、長い年月の中うちには、何どうか云う機会いきばで　生捕いけどる事もありそうなものだ。若もし生捕いけどつて調べたらば、総ての疑問は疾とうに解決そとされている筈だ。日本にも昔から種々いろいろの冒険者もあれば、勇士もある。誰たか其その　を生捕いけどるとか退治たいぢするとか云う人もありそうなものだつたが……。」

「そんなことも無いでは無かったが、惜おしむらくは之これを研究するほどの熱心家ねっしんかも無し、学者も無かつたらしい。現に今から百余年前ぜん、天明年間に日向国ひゆうがのくにの山中やまなかで、獵人かりゆうどが獸を捕る為に張つて置いた菟道弓うじゆみというものに、人か獸か判らぬような怪物が懸かつた。全身が女の形で色が白く、赤まっばだか裸まで黒い髪を長く垂れていた。獵人等は驚いて、之は恐これおそく山の神であろうと、後のちたたりの祟まを恐れて捨てて置いたら、自然に腐つて骨に化なつて了しまつたと、橘たちばな南なん谿なんけいの西遊記せいゆうきに書いてある。これなども山たすらの女性であつたに相違ないが徒爾たすらに腐らして了しまつたのは惜おしい事であつた。同じく西遊記に山ただその事も記してあつたと記憶している。昔から諸国に其そんな例も沢山あつたのだろうが、唯其ただその一地方の夜話よばなしに残るだけで、識者しきしやが研究の材料には上のぼらなかつたのだ。いや、然そういう例に就つて、もつと面白い話がある。これは日本の出来事じゃアないが、現に英国で其その敵とりおき押えた人の実話だ。まあ、聞き給え。」

忠一の研究談は尽つくる所を知らなかつた。人々も耳を澄すましていた。

「何でも西曆千七百二十年頃の事だ。プットバリーの講師にレヴェレンド・シメオン・ピジョンと云う人があつた。この人の邸やしきで屢々しばしば家禽かきんを何者にか盗まれる。土地の者は之これをピキシ―と云う怪物の仕業だと昔から唱えていたが、講師は之これを信じなかつた。で、暗い

晩に鶏小舎とりこやの蔭に隠れて待つっていると、例の如く午前一時頃に何者か忍んで来た。何でも小児こどものような奴であった。講師は不意に飛び出して取押とりおさえようとする、賊は刃物を振りまわりまわ廻して激しく抵抗した。何しろ、其奴そいつの正体を見届けようと思つて、講師は先ずま燐寸まっちを擦すり付けると、相手あいては俄にに刃物を投ほうり出して、両手で顔を隠して了しまつた。」

「むむ。」と、市郎も思わず蒲団から乗出のりだした。彼も に対して、ピジョン氏と同じような経験もを有もつているからであつた。

「そこで難なく取押とりおさえて、貴様は何者だと問うたが、賊は何とも返事を為しない。兎も角とかくも家うちの中で引擦ひきすつて行こうとしたが、燐寸の火が消えると共に、相手あいては再び強くなつて、講師を突き退のけて何処どこへか逃げて行つて了しまつた。が、其その一刹那せつなに講師が認めた彼の姿は、極めて背せいの低い、殆ど赤裸あかはだかで、皮膚の色は赭土色あかつちいろで……。」

云う事ことごと毎ごとに符合している、市郎も巡査も同時に叫んだ。

「むむ、それから……。」

「それから講師が現場げんじょうを調べて見ると、そこには賊の刃物が落ちていた。能く能く研究よすると、これは古代の羅馬人ローマじんが持っていた短い剣けんの類たぐいであつた。而已のみならず、其附近そのにはローマンケープと昔から呼ばれている岩穴が有る。それや是これやを綜合して考えると、

賊はピキシ―と云う怪物ばけものでも何でも無い、恐おそらく古代の羅馬人であろうと鑑定した。が、土地の者は容易これに之を信じないで、矢やはりピキシ―の仕業だと云っていたので、講師は更に斯こう云う説明を加えた。」

(四十九)

わろの正体も漸だんだん々に判りかかつて来た。忠一は咳しわぶきして又語り続けた。

「ピジョン講師の説明に拠よると、其昔その羅馬人ローマじんが英国へ侵入して来た時に、其一部が戦たたか闘たたかに敗まけて此この地方へ逃げ込んで来た。が、固もより敵地であるから、到る処で追詰おいつめ追お巻まくられた結果、山の奥深く逃げ籠こもつて了しまつた。其子孫が相伝えて今日こんにちに至いたつたのである。と云つたら、男ばかり集あつまつていて、何どうして子孫が絶えぬかと云う疑問おこが起るに相違ちがないが、彼等は夜に乗じて麓ふもとの里へ降くだつて、見当り次第こどもに小児こどもを攫さらつて行く。で、女の児こは生長するのを待つて結婚する、男の児こは自分達の眷族けんぞくにしてしまう。勿論もちろん、同族結婚などを頓とん着ちやくしているのでは無い。然そういう風であるから、肉体も精神も漸次しだいに退化して、殆ど猿のような野蠻人になつて了しまつたが、兎とにかくに今日まで其血統そのを維つないでいら

たのである。併し彼等が漸々に亡びて行くことは争われぬ道理で、昔に比べると其人^{そのにん}数も非常に減つて来たに相違ない。聽ては自然と亡び尽すであろう。で、彼等は平生日光^{のめ}を見ない穴の中に隠れ棲んでいて、暗い夜になると窈かに出て歩く。その習慣が幾代も続いて来たので、眼の働きが甚だ弱いものになつて了つて、火のような強い光線に出逢うと、眼を明いては居られない様になつたのである。又、彼等の皮膚が赭土色に化つて了つたのは、生れてから死ぬまで岩石や赭土の中に棲んでいる為である。其の体軀が小児のように小さいのは、同族結婚や野蛮生活に因て身体の發育が衰えた為である。と、先ず斯う云うのだ。」

「いや、解りました。よく解りました。」と、塚田巡査が先第一に降伏した。

「成程、然うかも知れませぬえ。」と、冬子も再び兄に反抗する勇氣は無かつた。

「實際、そうだろう。君も些との間に大分研究したね。」と、市郎も笑つた。

三人を目前に説破した忠一は、自から得意の肩を聳かす様になつた。

「であるから、この虎ヶ窟に棲む山なる者の正体は、大抵想像する難からずで、矢はり前に云つたような種類に相違ないんです。それにしても、文字が彫つてあると云うのは頗る面白い問題で、若し其の文字の解釈が能たら、の正体愈よ確實に判りましょう。」

「然うです、然うです。明日は是非御案内を為ましよう。今日は丁度好い処へ来合せまして、種々有益なお話を伺いました。岐阜や高山から出張している同僚の者にも、参考の為に能く云い聞かせましよう。」

塚田巡査が喜んで歸つた後は又寂寞になった。

「馬鹿馬鹿しいの、詰らないのと云うものの、君の阿父さんが斯んなことになろうとは、実に夢にも思わなかつたよ。」と、忠一は今更のように嘆息して、「一体其のなる奴が、何故然う執念深く君の一家に祟るのだろう。新聞に拠ると、お杉婆が種々の原因を作している様だが實際然うなのか。」

「さあ、それは僕にも判然とは解らないが、何うも然う解釈するより他は無いのさ、僕の祖父もに殺されたそうだが、親父亦今度のような事になった。究竟一種の因縁とでも云うのだろうよ。」と、市郎も嘆息した。

「むむ、それから……。」と、忠一は思い出したように、「あの柳屋の女ね、確かお葉と云つた女だ。新聞の記事に拠ると、彼奴も何か今度の一件に就て、関係があるらしいじゃないか。妙な事があるもんだね。」

「いや、関係があると云う訳でも無いらしいが……。」と、市郎は冬子を顧つて、「兎に

かく親父が攫さらわれた日に、お杉婆しばあさに誘さそわれて山へ行つたことは眞実ほんとうさ。何故行つたか判らないが、少し狂氣きちがいじ染しみみた女だから、何だか夢のようにふらふら出掛けたらしいよ。で、明ある日ひ茫ぼんやり然なり帰かへつて来たんだ。警察の方でも無論これ之これに目を注つけて、再三取調べたけれども更に要領を得ない。實際、親父の死つひに就つては何にも知らないらしいんだ。」

「それで何どうした。」

「何どうも仕方が無いさ。相変らず柳屋へ帰つて、唄うたなんぞ謳うたっているそうだ。」

「暢のんき気きな奴やつだな。併しかし彼あの女の事ことだから、然そうだろうよ。」と、忠一も笑い出した。

(五十)

忠一は其夜その、安行の霊前に通夜した。明ある日は陰くもつて寒ひやかった。が、そんなことに余り頓とんちやく着やくする男おとこでは無いので、草鞋わらじ穿ききの扮装いでたち甲斐あがい甲斐あがしく、早朝から登山の準備とりに取とりかかっていると、約束を違たがえずに塚田巡査が来た。活発なる若い学生と勤勉なる若い巡査とは、相あ携いたずさえて角川家を出発した。

「兄さん、気を注つけてお出いでなさいよ。」と、冬子は門かどまで送おくつて出た。

「心配するなよ。わろを五六匹お土産みやげに持って来るから、わろじる汁でも拵こしらえる支度をして置くが可いいさ。」と、冗談を云いながら兄は去った。

巡査は彼の事件以来、日々にちにち通い馴れているので、險阻けんその山路やまみちも踏み迷わずに、森を過ぎ、岩を越えて、難なく虎ヶ窟の前に辿り着いた。足の達者な忠一は巡査ちつに些ちつとも後おくれなかつた。

窟の入口には落葉を焚いて、一人の警部と二人の巡査が張はり番ばんしていた。重太郎や なんどきふるす何時旧巢へ帰つて来るかも知れぬので、過かじつらい日かじつらい来かじつらい昼夜交代で網を張つていのである。塚田巡査は挨拶した。

「どうです、奴等は姿を見せませんか。」

「影も形も見せないよ。多分山奥へ逃籠にげこもつて了しまつたのかも知れないが、これだけの所を山狩やまがりするのも大変だからなあ。」と、警部も少しく倦うんだ形であつた。

塚田巡査の紹介に因よつて、忠一は直ただちに穴へ入ることを許された。巡査の案内に従つて、松明たいまつを片手に奥深く進み入ると、此頃このは昇降の便利を計る為ために、横木よこぎを架わたした繩梯子なわぼしごが卸おろしてあるので、幾十尺の穴を降くだるに格別の困難を感じなかつた。二人は中途とつしゆに突とつ出したる岩に立つて、霎時しばらくあたり四辺を照てらし視みた。

「この岩の上です。角川の阿父さんの屍体が横わっていたのは……。」と、巡査が指さして教えた。忠一は肅然として首肯いた。

「まあ、順々に御案内しますが、の棲んでいたの此下の穴です。」

巡査が松明を振翳す途端に、遠い足下の岩蔭に何かは知らず、金色の光を放つ物が晃乎と見えた。が、松明の火の揺くに随つて、又忽ちに消えた。

「おやッ。」と、忠一も共に火を翳したが、岩に遮られて何にも見えなかった。

「何でしょう、今光つたのは……。」

「さあ。」と、巡査は考えて、「何だか知らんが時々光るのです。けれども、光線の工合で見える時もあり、見えない時もあります。私も過日から不思議に思っているのです……。」

斯う云いながら、巡査は無闇に松明を振廻すと、火の光は偶中りに岩蔭へ落ちて、燦たる金色の星の如きものが暗に浮んだ。が、あれと云う間に又朦朧と消えて了つた。

「何だろう。」

「兎も角も行って見ましようか。」

好奇心に駆られた二人は、松明を振廻しながら更に降つた。

「ここらでしたね。」と、巡査は的も無しに又もや松明を振り廻すと、忠一も四方を照して視た。が、ここぞと思ふ辺には何物をも見出さなかつたので、二人は失望の顔を見合せて立つた。

「不思議ですね。」

「何うも不思議ですね。」

鸚鵡返しの声が終らぬ中に、忠一の持った松明の火先が左へ揺れると、一間許り下の大岩の間に又もや金色が閃いた。

「あ、彼処だ。」と、二人は跳つて飛び降りた。岩は宛ら獅子が口を明いたような形で、其の喉とも云うべき奥の処から、怪しき金色の光を発するのであつた。二人は松明を差付けて窺うと、これは意外、幾百年を経たりとも見ゆる金の兜であつた。

山の棲家に金の兜を発見するとは、豚小屋から真珠掘出したようなもので、何人も想像の及ばぬ所であろう。歴史の智識に富んでいる大学生は、早くも之を鎌倉時代の物と見た。五枚鍔の大兜、これが火の光に映じて輝いたのであつた。それにしても、こんな貴重な物が何うして此処に隠してあつたのか。何処からか盗み出して来たのか、但しは以前に此処に棲んだ者があるのか。忠一も即座に判断は付かなかつた。

兜は岩の上に据えられた。げにも由緒ありげな宝物である。忠一も霎時は飽かず眺めていたが、やがて手に取って打返して見ると、兜の吹返しの裏には、「飛驒判官藤原朝高」と彫つてあつた。

(五十一)

「飛驒判官というのは何者でしような。」と塚田巡査は首を傾げた。

「飛驒判官朝高という人は、曾て此の飛驒国の地頭職を勤めたことが有る様に記憶しています。左様、何でも鎌倉時代の中葉、北條時宗頃の人でしたらう。蒙古退治の注進状の中に、確か此人の連名もあつたかと思ひますが……。いや、それは調べれば直に判ります。何しろ、面白いものを掘出しましたよ。」

忠一は此の歴史的遺物発見に就て、慥からぬ興味を覚えたらしく、大事そうに金の兜を捧げて起つた。

「それから例の不思議な文字というものは、何処にあるんですか。」

「あの岩穴の中です。」

巡査は先に立つて少しく登った。ここは曩さきの日に、巡査等わろがと戦闘せんとうを開いた古蹟こせきである。低い穴を横くわくに潜くぐつて奥深く進んで行くと、天井は漸ようやくに高くなつた。ここを行き過ぎると、更に広い場所へ出た。行止ゆきしりのように見えて、実は狭い間道ぬけみちのある所であつた。

「彼の穴から逃げたのです。」と、巡査は残念そうに云つた。

「ああ、そうですか。」と云いながら、忠一は何なに心なく四辺あたりを見廻したが、忽たちまちあつと叫んだ。

ここにも彼を驚かすものが有つた。それは累る々たる人間の骸骨で、規則正しく順々に積み上げてあつた。年を経て全く枯れたる骨は、松明たいまつの火に映じて白く光つていた。更に仔細に検査すると、下の方に敷かれた骨は普通の人よりも稍やや大きい位であるが、上の方へ行くに従したがつて骨格が漸だんだん々に縮まつて、終局しまいには殆ど小児こどものように小さくなつた。之これを見ても彼等が漸次しだいに退化したことが證しょうめい明される。忠一は自己の想像の謬あやまらざりしことを心窃ひそかに誇つた。

「これです。御覽下さい。」

巡査の翳かげす松明かたえは傍せきの石壁あざやかを鮮明てらに照した。壁は元來が比較的ひらたに平い所を、更に人間の手に因よつて滑なめらかに磨かれたらしい。其その面には何さま数十行の文字もんじらしいものが彫付ほりつ

けてあつた。忠一は眼鏡を拭つて熱心に見詰めていた。

「どうも文字もじのようすな。」と、巡查みかえが顧ると、忠一は黙つて首肯うなずいたが、臆やがて衣兜かくしから手帳てりだを取出して、一々これを写し始めた。石の面おもてには所々ところどころ缺けた所があるので、全く写おわし了るまでには尠すくなからぬ困難と時間とを要した。巡查も根好こんよく待つていた。

「これは確たしかに蒙古もうこの字です。僕には全部は判りませんが、所々は臆おぼろげに其その意味が推察すさされます。」と、忠一は手帳を収しまいながら、「これに因よつて考えると、彼かのなるもの謎げんの蒙古の子孫らしい。彼等が隠していた飛驒判官の兜と対照して研究したら、頗すこぶる面白い歴史上の事実を発見するかも知れません。唯ただ、蒙古の人間が何どうして斯こんな山中に隠れ棲んでいたかと云うことが甚だ疑問ですが、東京へ帰つて蒙古語専攻の学者に此この文章を読んで貰もらい、又一方に飛驒判官の伝記を調べて見たら、秘密は自然に解決されるでしょう。何しろ、お庇かげ様で種々いろいろの興味ある発見を為しました。」

二人は再び繩梯子を伝つて、穴の入口へ登つた。窟たむろの前に屯たむろしていた警部等も、金の兜には驚いた。

「何処どこに有つたのです、そんなものが……。」と、皆口々に問い寄るので、忠一は先まず其その概略を説明した上で、これは何なんびと人も私わたくしすべきもので無い、事件が落着するまでは何分宜よろ

しく保管を頼むと云えば、警部等も快く承諾した。で、兜は警官の手に渡して、二人は早々下山の途に就いた。

やがて麓に近い頃、忠一は唯ある樹根に腰をかけて草鞋の緒を結び直した。巡査は之を待つ間に不図何を見出したか、忽ち疾風の如くに駈け出して、あなたの岩蔭へ飛び込んだ。忠一は呆気に取りられて見送つてみると、霎時して巡査は悄悄引返して来た。「何うしたんですか。」

「今あの岩の蔭に重太郎の隠れているのを見付けましたから、直に追掛けて行つたのですが、彼奴中々足が捷いので、忽ち見えなくなつて了いました。残念なことを為たです。」
 巡査は酷く口惜そうであつた。

(五十二)

それから又二三日過ぎた。忠一は実家と角川家との間を往来しながら、熱心に飛驒の古い歴史を研究して、飛驒判官の伝記及び彼と蒙古との関係を明白にすべく努めていた。一時は口も利かれぬ程の重態であつた坑夫体の負傷者も、医師の手当に因て昨今少しく

快方に向つたので、警官は直ちに取調を始めた。彼は中々の横着者で、最初は兎角に自分の素性来歴を包もうと企てたが、要するに其れは彼の不利益に終つた。彼が不得要領の申立をすれば為るほど、疑惑の眼はいよいよ彼の上に注がれて、係官は嚴重に取調を続行した。

で、或時係官がお杉と重太郎との身上に就て彼に語り聞かせて、お前を傷けた当の相手は恐く行方不明の重太郎であろうと告げるや、彼は俄に色を変えて、「然う云えば過日、虎ヶ窟で見付けた婆の死骸は何うもお杉に肖ていると思ひましたよ。悪いことは能ねえもんだ。私は実の倅に斬られたんです。」と、此に初めて自分の暗い秘密を打明けた。

彼は重太郎の父の重蔵であつた。今から殆ど三十年以前に、彼は角川家を出奔して、お杉と共に諸国を流浪して歩いた。が、頼むべき親戚もなく、手に覚えた職もないので、彼は到る処で種々の労働に従事した。其間にも酒や博奕や女狂いや、悪い道楽は何でも為尽した。斯うなると、二人が仲にも温かい春の続こう筈はない。年上で嫉妬深いお杉は、明暮に夫の不実を責めて、或時はお前を殺して自分も死ぬとまで狂い哮つた。重蔵は愈よお杉に飽いた。が、蛇の申子と噂された程のお杉の執念は、飽までも夫に附纏うて離れなかつた。彼は幾度かお杉を置去りにして逃げようと企てたが、何日も不思議に其

の隠れ家を見付出された。

「妾を捨てて逃げるような料見だから、お前さんは一生涯碌なことは無い。終局には必然酷い死様をするよ。」と、お杉は鬼のような顔をして、常に夫を呪った。重蔵は愈よお杉に飽いた。飽いたと云うよりも寧ろ恐れたのであった。そんな状態で幾年かを無意味に送る間に、お杉は懐胎して重太郎を生んだが、産後の肥立が不良いので久しく床に就いた。其隙を窺つて重蔵は逃げて了つた。

今度は既う諦めたのか、但しは病中の為か、流石のお杉も執念深く追つては来なかつたので、これを幸いに重蔵は又もや漂泊の旅路に上つた。或時は土方となり、或時は坑夫となつて、甲から乙へと際限もなく迷い歩く中に、二十年の月日は夢と過ぎた。彼の頭には白髪が殖えた。先頃までは加賀のあたりに徘徊していたが、近来飛驒に銀山が拓かれて、坑夫を募集しているという噂を聞込んだので、彼は同じ仲間の熊吉と云う老坑夫を誘つて、殆ど三十年振で故郷の土を踏んだのである。

変遷の著るしからざる山間の古い駅ではあるが、昔に比ぶれば家も変つた、人も變つた、自分も老いた。誰に逢つても昔の身上を知られる気配もあるまいと多寡を括つて、彼は平気で町中を歩いた。旧主人の角川家の前も通つた。駅を抜けて村境まで

出ると、日が暮れかかつて来て、加之に寒い雨が降つて来た。目ざす銀山まではまだ三里もあるので、二人は其処らで野宿をすることに決めた。

ここらの案内は重蔵が善く心得ているので、彼は熊吉を導いて、樅林の奥へ入った。木立の深い処には、人を容るるに足るほどの天然の土穴が所々に明いているので、二人はここへ潜り込んで、雨を避けながら落葉を焚いた。此のままに眠つて了えば、彼等は平和に夢を結ばれたのであろうが、斯る徒の癖として重蔵は懐中から小さな賽を取出した。二人は焚火の傍で賽の目の勝負を争つた。

斯る賭博に喧嘩の伴うのは珍しくない。二人は勝負の争いから忽ちに喧嘩を始めて、熊吉は燃未了の枝を把るより早く、重蔵の横面を一つ撲つた。熱いのと痛いので眼が眩んだ重蔵は、衣兜から把出した洋刃を閃かして、矢庭に敵の咽喉を一抉りにした。が、腹立紛れに人を殺したものの、わが眼前に横われる熊吉の屍体を見ては、彼も俄に怖しくなつた。

「どうしたら可かろう。」と、彼は犯跡湮滅に就て考えた。

重蔵は不図彼のを思い出した。この殺人事件をして、所為であるかのように粧つて、他の目を晦まそうと考へた。彼は熊吉の屍体を抱き上げて、咬殺した如くに其の疵口を咬んだ。が、猶不安に思われるので、更に洋刃を以て其の顔の皮を剥ぎ取つた。衣服も剥いで赤裸にして了つた。斯うして置けば手懸も付くまいと、今度は其死骸を引抱えて行つて、一町ばかり先の小川の畔へ捨てて来た。

この時、村の方から松明の火が近いて、大勢の人声や蹙音が乱れて聞えたので、脛に疵持つ彼は狼狽えて逃げた。而も人里の方へ逃げるのは危険だと悟つたので、彼は案内知つたる山の方へ逃げ込んだ。雨はますます降つて来たので、彼は唯ある大きな岩陰に隠れて、眠るとも無しに一夜を明かした。夜が明けると、雨は止んだ。けれども、麓では昨夜の殺人事件の詮議が厳しかろうと推察されるので、彼は直ちに山を降るほどの勇氣は無かつた。今日一日は山中に潜伏して、日の暮るるを待つて里へ出る方が安全であろうと、飢い腹を抱えて当途も無しに彷徨う中に、彼は大なる谷川の畔に出た。

瞰上れば我が頭の上には、高さ幾丈の絶壁が峭立つていて、そこは彼の虎ヶ窟なることを思い當つた。若い男と女とが社会の煩さい圧迫を脱れて、自由なる恋を楽んだ故蹟であ

る。

「俺もあの時は若かったな。」

重蔵も漫ろに三十年前の夢を辿つて、谷川の流に映る自己の白髪頭を撫でた。それに付けてもお杉は何うしたろう。生きては俺を恨んでいるだろう、死んでは俺を呪っているだろう。

「俺も悪いことを為した。」と、彼は今更の様に悔恨の情に打たれた。が、其のお杉は二十年前から此の旧巢へ戻つて、加之も今や其の老たる屍を窟の底に横えていようとは夢にも思い及ばなかつた。何はあれ、ここは屈竟の隠れ家である。万一、が昔のままに棲んでいるならば、之に乞うて何等かの食物を得て、一時の空腹を凌ごうとも思つた。其昔、を友としていた重蔵は他の人のように、を恐しい者とも思わなかつた寧ろ旧い友達を尋ねて、当分の隠れ場所を借りようか位に思つていたのである。

彼は窟に暫く棲んでいたの、岩穴から此の川辺へ抜け出る間、通を心得ていた。彼は直ちに其穴を見出して、蛇のように潜り込むと、暗い中で恰も彼の市郎に出逢つたのであつた。市郎は彼が家出の後に生れた児であるから、相互に顔を見識ろう筈はなかつたが、其詞の端に因て、重蔵は早くも彼が角川家の倅であることを悟つた。で、一旦は其

奇遇きぐうに驚いたが、今は其そんなことを詮議する場合でない。彼は頼まるるままに角川家へ使つかする意つもりで、兎とも角かくも窟くの外へ走り出た。

外へ出ると、又もや重太郎に逢った。が、これも相互たがいに顔を見識みしらなかつたので、二十年振ぶりで初めて邂逅めぐりあつた現在の父と子が、此ここに忽たちまち敵となつた。二人は引組ひっくんだままで崖から転げ落ちると、下には幸いに熊笹が茂つていたので、身体には別に怪我けがもなかつた。けれども、格闘たたかひは此このままに止やまなかつた。二人は此こで又もや組討くみうちを始めたが、若い重太郎は遂おいに老たる父を捻伏ねしふせた。彼は母の仇かたきと叫びつつ、持もつたる洋刃なifuを重蔵の喉のどへ差さ付しけたのである。

急所を刺された父は殆ど氣を失つて倒れた。重太郎は恐おそろく何処いずこへか立去たちさつたのであろう。それから塚田巡査に発見されるまでは、重蔵も夢心地で何にも知らなかつた。

老おいたる浮浪者の懺悔ざんげは之これで了おわつた。

「私も女房や子を捨てて逃げました。友達を殺して逃げました。それだけの罪でも碌ろくなことの無いのは当あたりりませぬ。二十年振ぶりで現在の子に邂逅めぐりあいながら、其手そのに掛かつて殺されると云うのも自然の因縁でしょう。斯こう何も彼かも白状して了解しませば、私は人殺しの犯人ですから何どうせ無事には済みますまい。寧いっそ此このまま死んで了しまつて、地獄にいるお杉に謝まつた

方が可うございます。」

彼の眼には悔恨の涙が見えた。警官も医師も其の自殺を懼れて昼夜警戒していたが、彼は一旦快方に赴いたにも拘らず、爾来再び模様が悪くなつて、嚙言のように斯んなことを叫び続けた。

「お杉……堪忍して呉れ。俺が悪かった。お杉……お杉……重太郎……。熊吉、赦して呉れ。熱い、熱い、地獄の火が……。」

斯くして、三日の後に重蔵は死んだ。人間の運命は不思議なもので、彼は故郷の土と化るべく、偶然にここへ歸つて来たのであつた。

(五十四)

十一月も中旬になつた。

飛驒の冬は愈よ迫つて来て、霜は臆て雪となるらしい、鯨の群のような黒い雲が山から里へ掩つて来た。この三日ばかりは日も見えなかつた、風も吹かなかつた。唯天地暗澹の中に、寒い日が静に暮れて、寒い夜が静に明けた。この沈黙は恐るべき大雪を齎す前兆

である。里の人家では何れも冬籠の準備に掛った。

午後三時、一人の青年が村境の小高い丘に立つて、薄暗い町の方を遠く瞰下していた。彼は重太郎である。大方の冬木立は赤裸になつた今日此頃でも、樅の林のみは常磐の緑を誇つて、一丈に余る高い梢は灰色の空を凌いで轟々と聳えていた。この深林を背景に、重太郎は無言の俳優として舞台に立つていた。

彼は恋しいお葉と泣いて別れた。更に父と知らずして父を傷けた。お葉が形見の山椿の枝を抱えて、一旦は其場から姿を隠したが、流星に遠くは立去らなかつた。彼は木間や岩蔭に潜んで、絶えず其後の模様を窺つていると、安行も死んだ、お杉も死んだ、わろの一人も死んだ。其屍体は何れも里へ運び去られたのである。

安行やの死就ては、彼は何にも考えなかつたが、お杉の死は彼の胸を深く抉つた。二十年来この窟に隠れ棲んで、殆ど人間との交際を断つていた此の母子二人は、さながら車の両輪の如き関係であつた。今や其母を亡つて、彼は殆ど片輪になつて了つた。曩の夜、母から十日の内には死ぬと云い聞かされた時には、彼は心窃かにお葉というものを頼みにしていた。が、それも希望の綱が切れた。彼は枝を離れた木葉のように、風のまにまに飛んで行くより他は無かつた。

ここばかりが自分の天地でないことは、重太郎も流石さすがに知らぬでは無かった。母に別れ、お葉に離れて、必ずしも此この山奥に棲んでいる必要は無いつつ。けれども、窟くわの底には母に教えられた大切の宝が有る。之これを持出もちだして他に売れば、自分は大金満家おおかねもちになれるのである。乞食しを為しないでも済むのである。ここを立去たちさる前に、先まず彼の宝かを持出もちださねばならぬと、彼は昼夜あたりこの辺あたりを徘徊ひそして、窺ひそかに好い機会いを窺ひそっていたが、彼の事件か以来、窟には多数の警官が絶えず見張あっているので、彼も迂濶うかつに踏ふみこ込こむ隙を見出し得えなかつた。

と云つて、此このままに立去たちさるほどの断念あきらめは付かぬ。断念あきらめの付かぬのも無理はない。重太郎は宝たからに心を惹ひかされて、徒いたずら爾らに幾日いくじつかを煩悶うちの中に送おくつた。勿論もちろん、普通ふつうの人とは違ちがつて、山やまに馴なれたる彼は寢床ねどや食物じきには困こらなかつた。岩いわを枕まくらにして眠ねつた、木実このみを拾ひろつて食たつた。斯かくして日ひを暮くらす間に、塚田むらた巡査あいだに一度見付みけられたが、幸さいいに逃にげられた。

「あの宝たからは俺おれの物だ。俺おれが持つて行くのに不思議ふしぎがあるものか。」

重太郎しむたろうは斯こうも考かんへた。けれども、自分の姿すがたを見れば直ただちに追跡おひする警官等けいが、其理その屈くつを肯きいて呉くれるや否いなやを危あやんだ。警官等けいは自分の敵てきであると彼は一いち瞬しゆんに信しんじていた。寧いっそ腕力うでづく付つて奪うばい取とろうかとも考かんへたが、劍けんを佩おびたる多数たの警官と闘たたかうことは、彼も流石さすがにはばかはかかつた。この場合ばあい、味方あいと頼たのむのは多年た年ねん同棲どうせいしたる。であるが、彼等そ其その以来いらい何処どこへ隠かくれ

たか姿を見せぬ。母と友とに離れたる孤独の重太郎は、ここらあたりを出没して空しく夜と昼とを送っているのであった。

其そのあいだ間も彼は山椿の枝を放さなかつた。紅い蕾つぼみは疾とくに碎けて了しまつたが、恋しき女の魂魄たましいが宿れるもののように、彼は其その枯枝を大事に抱えていた。

今日も漸ようやく暮れかかつて来た。灰色の低い雲は町の空一杯に拡がっていた。

「雪が来るな。」と、重太郎も思った。

更に山の方を振返ふりかえつて見ると、三方崩れさんぼうくずの彼方あなたから不思議な形の黒雲くろくもが勃々むくむくと湧き出して来た。例えば大入道のような怪物が黒い衣服きものの裳すそを長くひいて、太い片腕ひを長く突き出したような形で、徐しずかに北の空から歩んで来た。重太郎は眼も放さずに怪物ちかづの近くちかづのを仰みぎ視みた。

普通の人は之これを不思議の雲と見るであろうが、重太郎は更に之これを不思議の物と見た。彼は之これを一種の悪魔であると思つた。あの雲が出る時には必ず人間わがわがに禍わざわいがあると、小児こどもの時から母に教えられたのであった。

現在の重太郎に取つては、里の人間は総て我が敵であると云つても可よい。其その里に向つて、悪魔は天を翔かけり行くのである。彼は云い知れぬ一種の愉快を感じて、猶なほも雲の行方を

睨んでいると、黒い悪魔の手は漸次に拵がつて、今や重太郎の頭の上を過ぎた。彼は思わず跪ずいて、天を拝した。

(五十五)

日は全く暮れた。悪魔のような黒雲は町から村へと大きな手を拵げて了つた。ここに有るほどの家も人も、総て悪魔の黒い袖の下に包まれたのであつた。

今までは凍り着いたように静寂であつた町も村も、俄に何となく鬧しくなつた。鴉や雀は何物にか驚いたように啼き出した。犬も頻に吠え出した。山の方では猿が悲しそうに叫び出した。重太郎も一種の不安を感じて、何の意も無しに丘を駈け降りた。

鳥の声は又止んだ、犬や猿も啼き止んだ。天地は再び旧の寂寞に復つたかと思うと、灰のような細かい雪が音もせず降つて来た。斯ういう前触の気配を以て降つて来た雪は、一丈に達せざれば止まぬのである。重太郎も骨に沁むような寒気を覚えた。

「山へ歸つて焚火でも為ようか。」

懐中を探ると、燐寸の箱は既う空虚であつた。彼は舌打して明箱を投り出した。

此^{このうえ}上は何とかして燐寸を求め得ねばならぬ。重太郎は思案して町^{かた}の方へ歩み去った。燐寸の尽きたる時、これを人家より盗み去るのは彼が年来^{ならい}の習であつた。

今^{この}も此目的で彼は町^{かた}の方へ忍び出た。細^{こまか}い雪は益々烈しく降つて来た。

駅^{しゆく}へ入ると、大方の家は既に戸を閉じていた。雨風を恐れぬ重太郎も、此^{この}雪には流石^{さすが}に面^{おもて}を向けられぬので、成^{なる}べく人家の軒下を伝つて歩くと、暗い町の中で唯^{ただ}一軒、燈火^{あかり}の外^もへ洩れる家を見た。門^{かど}には枯柳が骸骨のように立つていた。

「ああ、柳屋か。」

重太郎の血は俄^{にわか}に沸いた。眼に見えぬ糸に曳^ひかるる様^{よう}に、彼はふらふらと其^その門^{かど}口^{ぐち}に窺^{のぞ}い寄ると、奥には春めいた空気が漲^{みなぎ}つて、男や女の笑い声が聞えた。やがて三味線の音が冴えて聞えた。

美濃^{みの}の柳と、近江^{おうみ}の柳。

風のまにまに纏^{もつ}れて解^とけて、

国は違えど、恋はする。

唄の声は正しくお葉であった。重太郎は枯柳に犇と取付いて、酔えるように耳を澄していた。雪はいよいよ降頻つて、重太郎も柳も真白になった。

糸の音が止むと、又もや話声や笑い声が聞えた。其中にお葉の声も聞えるかと、重太郎は猶も耳を傾けていた。

客は矢はり鉾山に關係の人らしい、酔を帯びた調子は高かった。

「何うだい、到頭降つて来たらしいぜ。過日から催していたんだから、滅多に止むまいよ。困つたもんだ。」

「可いじやありませんか。何うせ寒い中は休みでしょうから、当分はこの家に冬籠りを為さいよ。」と、若い女の声。これはお葉ではなかった。

「だが、雪が降つて食物が無くなると、が山から里へ出て来ると云うじやアないか。迂濶酔倒れている処を、攫つて行かれちやア大変だからね。ははははは。」

「大丈夫、蹶う何処へ行つて了つてよ。」と、今度はお葉の声であった。

「ほんとうに過日の騒動は大変だったわねえ。」と、若い女が相槌を打った。

「妾あの騒動じやア酷い目に逢つて了つた。」と、お葉が口惜そうに云った。

「お前も攫われたんだと云うじやアないか。」と、客は笑った。

「嘘よ。妾はお杉婆の魔法遣いに電気を掛けられて、夢中でふらふら行つたんですわ。だから、何にも知りやア為ないのに、警察では種々な詮議をして……。ほんとうに忌になつて了つた。角川の大旦那が殺されたと云うことも、家へ歸つてから初めて聞いた位ですもの……。」

「でも、若旦那は運が好かつたのね。」と、若い女の声が聞えた。

「そうさ。危くお杉婆に殺される所を、若旦那が早く気が注いたんで、お杉の方が反対に穴の底へ墜落ちて死んだんですとき。何でも人の話で聞くと、お杉婆の身体は粉微塵になつて居ましたとき。」

この説明はお葉の口から出た。これと聞くとや重太郎は俄に顔色を変えた。彼は懐中から秘蔵の洋刃を把出して、例の「千客万来」の行燈の火で屹と視た。雪には少しく風が交つて来た。

(五十六)

燐寸を盗む為に里に出た重太郎は、今や柳屋の門に立つて、思いも寄らぬ秘密を聴き出

したのであった。彼は理由を能くも糺さずに、彼の怪しき坑夫体の男を母の仇と一図に思
い定めて、其場を去らずに彼を刺止めた。これで復讐の役目は果したものと信じていた処
が、今この人々の話を聞くと、それは自分の思い違いで、当の仇は角川市郎であつた。自
分に取つては恋の仇とも云うべき角川市郎であつた。重太郎は驚き且怒つて、思わず拳を
握つた。

母の仇は必ず討つと、彼は曩の日お杉に誓つたのである。其仇の名は今やお葉の口から
洩れた。気の短い重太郎は既う一刻も猶予はならぬ、仇の血を舂るべき洋刃を把出して、
彼は俄に身繕いした。奥では又もお葉の笑い声が聞えた。が、恋しい人の媚かしい声
も、熱したる彼の耳には既う入らなかつた。復讐の一念に前後を顧みぬ重太郎は雪を蹴立
てて手負猪のように駈け出した。

角川の家では未だ眠らなかつた。市郎の傷も漸く癒えて、此頃は床の上に起き直られ
る様になつたので、看病の冬子は一旦わが家へ歸つた。今日は忠一が昼から遊びに来てい
たが、此雪の為に今夜は泊る事となつて、市郎の枕辺で相交らずの研究談に耽つて
いた。

「雪が降ると世間が静だね。」

「殊にここらは山奥だもの。」と、市郎は笑つて、「まあ、これから来年の春までは、蛇や熊のように穴籠りあなごもをして居るんだよ。」

「穴籠りと云えば、の奴等此雪このに何うどしているだろう。」と、忠一は自ら問い、自ら答えて、「あんな奴等だから、雪の融とけるまで何処どこかの穴にでも潜もぐっているだろうね。」

「そうだろう。併しかしあの以来、の噂も消え様ようだよ。まあ、好塩梅いいあんばいだ。何しろ、金の兜かぶとは掘出物かぶとだったよ。」

「あれが真実ほんとうの掘出物と云うのだろう。僕も県史や飛騨誌などを調査した結果、飛騨判官朝高という人物の伝記も大抵判つた。愈いよいよ元の蒙古いげんに疑い無しだ。」

「そうかねえ。」

この時、庭の竹藪たけくさでがさりと云う音が聞えた。忠一は話を止やめて耳を立てた。

「何、竹が折れたんだろう。」

「いや。」と、忠一は考えて、「竹の折れる程は未だ積つもるまい。じゃアないか。」と、笑いながら猶なほも耳を澄すましていた。

音もせぬ雪は一時間うちの中に余よほど積つもつたらしい。庭には雪を踏む蹠あしおと音ががさがさとして聞えて、雨戸の外へ何者か窺のぞい寄よるような氣息けいを感じた。二人は顔を見合わせた。

「いよいよ かな。」

「真逆……。」と、市郎は笑った。

何者か雨戸に触れた。南天に積っている雪がばらばらと落ちた。忠一は衝と起つて縁側の障子を明けると、外の物音は止んだ。忠一は続いて雨戸を明けた。一面に降頻る粉雪は、戸を明けるのを待つて居た様に、庭の方から忽ち颯と吹き込んで来た。

「や、酷く降るな。」と、忠一は袖で顔を払った。それから更に庭を見渡したが、白い木立、白い竹藪、その他には何にも見えなかった。

「じゃア、風が知ら。」

云う中に、彼は雪に印せる人の足跡を見付けた。確かに人の足である。加之も入口の方から庭伝いに縁先へ来て消えている。何者か忍び込んだに相違ない。忠一は愈よ眼を輝かして四辺を見渡したが、雪明では何うも判然と解らぬ。

「鳥渡、燈火を貸し給え。」

彼は洋燈を持出して庭を照すと、足跡は確に残っているが、人の形は見えぬ。猶も燈火を彼地此地へ向けている中に、雪は渦巻いて降込んで来た。袖で掩う間も無しに、洋燈の火は雪風に吹き消されて、室の内は俄に闇となった。

忠一は引返して燐寸を擦ろうとする時、一個の小さい人間が闇に紛れてひらりと飛び込んで来た。重太郎は縁の下に潜んで内の様子を窺っていたのである。暗い中でも眼の鋭い彼は、洋刃を逆手に振翳して直驀地に市郎の寝床へ跳り蒐つた。

(五十七)

何者か知らぬが、不意に庭から飛び込んで来たので、忠一は早くも其の背後から組付いた。重太郎は焦つて振放そうと試みたが、此方も多少は柔道の心得があつた。

「こん畜生、温順く降参しろ。一体、貴様は何だ、何者だ。」

重太郎は物をも云わなかつた。羽翅締めはがいじの身を悶もがきながら、洋刃を逆にして背後を払うと、切先きつさきは忠一が右の臂ひじを擦かすつた。これで思わず手を弛ゆるめる隙を見て、彼は一足踏ふみこ込んで当の仇かたきの市郎に突かいて蒐かると、対手あいては早くも跳はね起きて、有合ありあう衾よぎを投げ掛けたので、小さい重太郎は頭から大きい衾を被かぶつて倒れた。

「占めたッ。」

忠一は衾の上から乗のりかかつて押えた。が、何しろ暗いので始末が悪い。

「早く燈火あかりを持つて来い。燈火を……燈火を……。」と、市郎が呼んだ。

雪は降つても未だ宵である。入口の爐ろを囲んでいた人々は、この声を聞いてばらばらと起つて来た。或者は手に洋燈らんぷを持った。

「何です、何うしたんです。」と、皆口々に問うた。

「賊だ、賊だ。賊を取押とりおさえたんだ。」と、忠一は叫んだ。

「何、賊だ。」と、人々は眼を皿にして衾あひらの周圍まわりにどやどやと集つた。重太郎は土龍もぐらもちのように衾の下で蠢くのであつた。が、彼も流石さすがに考えた。斯かかる始末となつて多勢たせいに取巻かれては、到底本意とてほんいを遂げることには覺束おぼつかない。一旦はここを逃げ去つて、二度の復讐ふくせうを計る方が無事である。と、斯こう考えたので、彼は故意ことしに小さくなつて、宛さながら死せるように鎮しずまつていた。対手あいてが温順おとなしいので、忠一も少しく油断した。

「燈火あかりを此方こつちへ出し給え。兎とにかく何んな奴だか面つらを見て与やるから……。」

云いいつつ徐しずかに衾あひらを剥めくると、待構まちかまえたる重太郎は全身の力を籠めて曳えいやと跳ね返したのはで、不意を食つた忠一は衾を掴んだまま仰向けに倒れた。重太郎は洋刃ないふを閃かして轟然すつくと起つた。と思うと、忽たちまちに人の袖を潜くぐつて、縁先から庭へひらりと飛び降りた。

「あ、逃げた。」

人々は続いて追った。忠一も齒嚙はがみをして追った。重太郎は狐のように雪を飛んで、早くも門外まで逃げ去った。

けれども、飽あくまで不運なる彼は此こゝで又もや強敵に逢った。巡回中の塚田巡査あたかが恰あもこゝへ来きあわせて、角燈かくとうの火を其その鼻の先へ突付つきつけたのである。重太郎も之これには少ひしく怯ひるんだ。背後うしろからは忠一を先に、角川家の人々が追つて来た。前には巡査が立っている。敵に前後を挟まれた重太郎は、先まず当面の邪魔を攘はらうに如しかずと思つたのであろう、刃物を揮ふるつて巡査に突いて蒐かつた。巡査は体たいを替かわして其利腕そのききうでを掴つかんだが、降積ふりつむ雪に靴を滑らせて、二人は折おり重かさななって倒れた。

忠一は駈け寄つて其襟髪そのえりがみを取ろうとしたが、此この場合、身体こゝろの小さいと云うことが重太郎に取つては非常の利益であつた。彼は早くも忠一の足の下を潜くぐつて這はいた。加之しかも二間けんばかりは四つ這はいになつて走つて、又ひらりと起たち上あつた。犬だか人だか判らぬ。「賊だ、賊だ。」と、人々は口々に叫びながら追つた。

この騒さわぎを聞付ききつけて、町の家々でも雨戸を明けた。「賊だ、賊だ。」と叫ぶ声が甲それから乙それへと伝えられた。重太郎は哀れや逃場にげばを失つた。それでも彼は猶な一方の血路けつろを求めて、唯とある人家の屋根へ攀よじ登のぼつた。茅葺かやぶき、板葺こけら、瓦葺かわらぶきの嫌きらいなく、隣から隣へと屋根

を伝つて、彼はしゆくはすれ 駅尽頭の方へ逃げて行つた。

追手は漸次に人数を増して、前から後から雪を丸めて投げた。此の雪礫を防ぐ手段として、重太郎も屋根から石を投げた。雪国の習として、板屋根には沢山の石が載せてあるので、彼は手当次第に取つて投げた。石の礫と雪の礫とが上から下から乱れて飛んだ。

而も敵は益々殖えるばかりである。何処も同じ彌次馬が四方から集つて来て、警官や忠一等に声援を与えた。其中に長い梯子を持出して来る者もあつた。塚田巡査は靴を脱いで屋根に登つた。二三人の消防夫も続いて登つた。斯う肉薄して来られては堪らぬ。重太郎も流石に根負がして、遂に屋根から飛び降りた。但し往来の方へ出るのを避けて、彼は裏手の方へ飛んだ。

(五十八)

重太郎の飛び降りたのは、美濃屋という雑穀屋の裏口であつた。追手の一組は早くも駅尽頭の出口を扼して、他の一組は直ちに美濃屋に向つた。ここらの町家は裏手に庭や空地を有つているのが習であるから、巡査等は同家に踏込んで先ず裏庭を穿索した。

が、縁の下にも庭の隅にも重太郎の姿は見えなかつた。

見えないのも道理で、重太郎はここへ飛び降りると、直に垣根を乗越えて、隣から隣へと四五軒も逃げた。折から烈しく降る雪は、彼の小さい足跡を直ちに埋め消して、人には鳥渡判らぬのであつた。

「この雪の降るのに何を騒いでいるんだらうねえ。」

お葉は独語を云いながら裏庭の雨戸を明けた。柳屋の客も女も、この騒ぎを聞附けて、何れも表へ見物に出たが、お葉は「何の、詰らない。」と云う風で、先刻から一人残つていたのである。彼女は大分酔つていた。

雪風に熱い頬を吹かせながら、お葉は快心地に庭前を眺めていると、松の樹の下に何だか白い物の蹲踞んでいるのを不図見付けた。どうやら人のようである。

「誰だい。そこにいるのは……。」と、お葉は試みに声をかけた。

声の主を早くも其れと知つたのであろう、白い物は勃勃と起き上つて、縁の前へ忍んできた。障子を洩るる燈火の光に透して覗ると、それは雪だらけの重太郎であつた。先刻からの格闘で疲れたと見えて、流石の彼も切なそうに肩で息をしていた。

「まあ、重さん。」

お葉も少しく意外に驚いて、雲時其顔を眺めていた。雪は小歇なく降っていた。

「燐寸を呉れないか。」と、重太郎は低い声で云った。

「燐寸が欲しいの。そんなものは幾許でも上げるけれども、一体どうして今頃こんな所へ来たのさ。」

「仇を討ちに行つたんだ。」

「何処へ……。」

「角川の家へ……。」

お葉は愈よ驚いて、縁から半身乗出した。

「それで何うしたの。仇を討つたの。」

重太郎は口惜そうに頭を掉つた。

「角川の息子を殺して与ろうと思つて行つただけけれども、見付かつたんで無効だった。それから大勢に追掛けられて、ヤツと此処まで逃げて来たんだ。」

「じゃア、今の騒はお前さんだね。だが、角川の若旦那を何故殺そうとしたの。」

「阿母さんの仇だ。」

「どうして……。」

「先刻さつぎ、お前まへが然そう云いつたのを聞いていた。俺おらが表うらに立たつていると、お前まへが人ひとに話はなして
 いたんだ。」

お葉はなは又また驚おどいた。自分の口くちから斯こんな騒さわぎが 出しゅつ来たいしたとは、今の今いままで些ちつとも知ら
 なかつたのである。

「そりやア間違まちがいだよ。お前まへさんの鑑かん違ちがいだよ。成なるほど、妾あたいは然そう云いつたけれども、若わ
 旦那だんなが手てを下おろしてお前まへの阿母おつかさんを殺ころしたんじやアない。お前まへの阿母おつかさんが背うしろ後ごから不意ふい
 に突つこうとするのを、若旦那わかつだんなが氣きが注ついて急いそに避よけたもんだから、阿母おつかさんは自分おれで踉蹌よろ
 けて墜落おっこちたんだよ。究竟つまり、お前まへの阿母おつかさんの方が悪わるいんだよ。ね、考かんえて御覽ごらん。」

考かんえて見みろと云いわれて、重太郎じゅうたろうは素直すぢに考かんえていた。

「一体いったいを云いえば、お前まへさん達たちの方が仇あだなんだよ。角川かくがわの大旦那おほだんなを殺ころしたのは誰たれだえ。お前まへ
 の阿母おつかさんやわろだろ。それだから、若旦那わかつだんなの方かたこそお前まへさん達たちを怨うらんでも可いいのに、お
 前まへさんの方かたで反あべこべ対たいに若旦那わかつだんなを怨うらむなんて、早はやく云いえば外道げだうの逆さからみ恨うらみで、理屈まろが全まる然ぜん間
 違まちがっているんだよ。ね、然そうだろ。能よく考かんえて御覽ごらん。」

再またび考かんえろと云いわれて、重太郎じゅうたろうは又また考かんえた。いかに野育のそだちの彼かれでも多少たうの理屈まろは呑込のみこ
 るのである。加しか之かも是これはお葉はなの説教せつきょうである。復讐ふくせうに凝こりかた固たまつた彼の頭腦あたまの氷こも、愛あの温ぬ

味たたかみで少しく融とけ初そめて来たらしい。

「そうかなあ。」と、彼は嘆息ためいきを吐ついた。

「そうさ。解とつたろう。」

重太郎は黙もくつて又考くわえていた。表でも裏でも大勢のわやわや云う声が聞きえた。

(五十九)

曩さきの日、椿の枝を折おつて別わかれてから、お葉は重太郎を憎にくんで居ゐなかつた。怨うらむまじき人を怨うらんだのは、彼の料見りょうけん違ちがいには相違さむかないが、人並ひとなみならぬ彼むかに對むかつて深こく之これを責せむるのは無理である。兎とにかく市郎の身みに恙つつがなかつたのは何なによりの幸福さいわいであつたと、お葉は安堵なでおろの胸むねを撫なで下くだすと同時に、我われが眼め前まえに雪ゆきを浴あびて、狗いぬ児このように跼うずくまつている重太郎を哀あはれに思おもつた。

「何なにしろ、此方こつちへお出いでよ。」

お葉は重太郎の手を取とつて、縁えんに腰こしを掛かけさせた。

「可いいよ。追手おつての人が来きたら隠かくして上げるから、安やす心しんしておいで。お前まえさん、寒ふかアないか

い。」

お葉は座敷へ復つて、徳利と洋盃とを持って来た。

「お燗が熱過ぎているかも知れないが、一杯お飲みよ。温暖になるから……。」

「こりやア何だ。」

「お酒だよ。飲んで御覧。妾のお酌ですよ。」

重太郎はお葉の酌で、満々と注がれたる洋盃を取った。が、生れてから今日まで酒と云うものの味を知らぬ彼は、熱い酒を飲むに堪えなかつた。彼は一口飲んで忽ち噎せ返つた。

「熱いの。」と、お葉は微笑んだ。重太郎は顔を皺めて首肯した。

お葉は更に起つて縁先に出た。左の手には懐紙を拵けて、右の腕も露出に松の下枝を払うと、枝も撓に積つた雪の塊は、綿を丸めたようにほろほろと落ちて碎けた。其の白い一片を紙に受けて、「さあ、これで温暖に上げて上げるよ。」

冷い雪はお葉の白い手から洋盃に移された。重太郎は無言で雪と酒とを一所に飲んだ。が、口に馴れぬ酒は矢はり苦いと見えて、彼は二三口ばかり飲んで洋盃を置いた。

「旨くないの。これを飲むと温暖になるんだけど……。」と、お葉は笑つた、「じ

やア、妾あたしが助けて上げますよ。」

お葉は其その洋盃を取つて、一息ぐっにと飲み干した。重太郎は眼を丸くして眺めていたが、やがて懷ふところ中から椿の折枝おりえだを把出とりだして見せた。いかに大切にしても、過日このあいだから水も与やらずに我肌わがはだに着けていたのであるから、蕾つぼみは已すでに落ち尽つくした、葉も已すでに枯れ尽して、枝も已すでに折れていた。恋しい人の形見と思えばこそ、花も葉もない斯こんな枯枝を、彼は幾多の不便を忍んで今まで身に添えていたのである。

「お前さんも可愛い人ねえ。」

お葉の眼には涙が見えたが、衝つと起たつて再び座敷へ復かえつた。床とこの花はな瓶いけには彼かの椿つばきが生なけてあつて、手入ていれの好いい所せ為いでもあろう、紅い花は已すでに二輪ほど大きく綻ほころびていた。彼女かれは其その枝えだを持つて出た。

「これ、御覽ごらん。お前さんに貰もらつた花は、妾あたしの方かたでも大事だいじにして、此この通とほりに花を咲かしてあるよ。」

重太郎は手に取つて、紅い花をつくづく眺めた。彼は自分の魂たましい魄いが此この花はなに宿よつて、お葉の温ぬかき情なさけを受けているようにも思つた。

「どうだい、よく咲いたろう。」

「むむ。」と、重太郎も笑まじげに答えて、猶も飽かずに其花を眺めていたが、「ねえ、此花を一つ呉れないか。」

「ああ、欲ければ上げますよ。丁度二輪咲いてるから、お前さんと妾とで一個ずつ分けようじゃアないか。」

二輪の花を折って縁側に列べると、重太郎は其の一個を取った。

「紙に包んで上げよう。」

お葉は白い紙に紅い花を軽く包んで渡すと、重太郎は菓子を買った小児のように、莞爾しながら懐中に収めた。

「お前さん、これから何うするの。」

「宝物を持出して何処かへ行くんだ。」

「宝物ツて、金の兜じゃ無いの。」

「むむ、何でも其んなものだ。」

「そりやア既う駄目。警察の方で引揚げて了つたと云うことよ。」

「そうかい。」

重太郎も驚いて声を揚げた。其声が度外れに高いので、お葉は慌てて四辺を顧った。

(六十)

母に別れ、棲家を失った今の重太郎に取って、唯一の依頼というのは彼の尊き宝であった。それを手に入れたいばかりで、彼は嚴重なる警官の眼を潜りつつ、今日まで此の辺を漂泊つていたのである。而も其の希望の光は今や消えた。

「俺ア矢ツ張り乞食をするより他は無いんだなあ。」と、彼は泣かぬばかりに嘆息した。実際、彼は泣くにも泣かれぬ絶望の淵に沈んだのである。

「ほんとうに可哀そうだねえ。」と、お葉も共に嘆息した。親戚も無し、職業も無し、金も無い此の人が、これから他国を彷徨いて、末は何うなることであろう。何時までも乞食をしているより他はあるまい。いや、其の乞食すらも満足に能るか何うだか解つたものでは無い。斯うなると、人間よりも犬の方が寧ろ優である。お葉は犬にも劣つた重太郎の不幸に泣いた。

が、二人は何時までも泣いている場合でなかった。追手は美濃屋の庭を探し尽して、更に両隣を獵り始めた。人の声が漸次に近いた。警官の角燈が雪に映じて閃いた。

「あ、此方へ来たよ。」

お葉が眼を拭いて起ち上ると、重太郎も無言で起つた。雪を踏む大勢の蹠音が隣に近いて来た。

危険が漸く迫ると知つて、重太郎の眼は俄に峻しくなつた。彼は例の野性を再び發揮したのであろう、洋刃を逆手に持つて庭の真中に進み出た。

「其方へ行つちやア危ない。此方から窃と出る方が可い。」

お葉は素足で雪を踏んで、庭口の裏木戸を音せぬように明けると、重太郎は何にも云わずに走つて出た。何を思い出したか、お葉は急に「あ、鳥渡……。」と呼び止めたが、重太郎は見返りもせずには駈けて行つた。

たとい乞食をするにしても、土方をするにしても、之から他土地へ行こうと云うには、多少の路銀が無くてはならぬ。咄嗟の間にお葉は之を思い出したのであつた。

彼女は慌てて又もや座敷へ引返して、先ず有合う燐寸を我袂に入れた。更に見廻すと、床の間の傍には客の紙入が遺してあつて、人はまだ誰も歸つて来なかつた。お葉は其紙入から札と銀貨を好加減に掴み出して、数えもせず紙に包んだ。之を懐中に押込んで、彼女も裏木戸から駈け出した。

この時、塚田巡査を先に四五人の追手が裏口へ廻つて来た。素足で雪の中を駈けて行くお葉の姿を不思議と見たのであろう、巡査は角燈を翳して呼び止めたが、お葉は聞かぬ振をして駈抜けて了つた。

「変な奴ですな。」と、忠一が云つた。

「あれは此の家のお葉という女ですが……。 」と、云いながら巡査も考えた。不徳要領の為に一旦は釈放したものの、お葉は一件に就て何等かの関係ありげにも見ゆる女である。それが今この場合に雪中を跣足で駈歩くのは、何か仔細があるらしくも思われるので、巡査も職掌柄、直に其跡を追つて行つた。

夜の雪はますます烈しくなつて来た。風も亦吹き募つて来た。天から降る雪と地に敷く雪とが一つになつて、真白な大浪小波が到る処に渦を巻いて狂つた。其の凄じい吹雪の中を、お葉は傘も挿さずに夢中で駈けた。

「重さん……。重太郎さん……。 」

声は吹雪に隔てられて聞えないので、重太郎の小さい姿は十間ばかりの先に見えつ隠れつしながらも、お葉は容易に追い止めることが能なかつた。加之も風の吹き廻しで、声は却つて後の方へ響くので、巡査は彼女が重太郎を呼ぶ声を聞いた。忠一の耳にもお葉の声

が聞えた。重太郎の名を聞いては愈よ捨置かれぬ、巡查も人々も続いて其跡を追った。が、何分にも眼口を撲つ雪が烈しいので、人々は火事場の烟に噎せたように、殆ど東西の方向が付かなくなつて来た。

この中でも、お葉は例の本性を發揮して、飽までも強情に吹雪を衝いて進んだ。駅を出ると風も雪も愈よ強くなつて来た。山国の冬に馴れたる彼女は、泳ぐように雪を掻いて歩んだ。が、心は矢竹に遡つても彼女は矢はり女である。村境まで来る中に、遂に重太郎の姿を見失つたのみか、我も大浪のような雪風に吹き遣られて、唯ある茅葺屋根の軒下に蹉き倒れた。雪は彼女の上に容赦なく降積んで、さながら越路の昔話に聞く雪女郎のような体になつた。

この茅葺は隣に遠い一軒家であつた。加之も空屋と見えて、内は眞の闇、鎮り返つて物の音も聞えなかつた。

(六十一)

お葉は雪を払いつつ又起き上つた。酒の酔も全く醒めて了つた。

彼女も流石に狂人ではない。此の吹雪の中を的途も無しに駈け歩いたとて、重太郎の行方は知れそうも無いのに、何時まで彷徨っているのも馬鹿馬鹿しいと思った。

「もう諦めて帰ろうか。」

それにしても生憎に雪が酷い。兎も角も一時を凌ぐ為に、彼女は此の空屋の戸を明けようとすると、半朽ちたる雨戸は折柄の風に煽られて礎と倒れた。お葉は転げるように内へ入った。

「おお、寒い。」と、彼女は肩を縮めつつ四辺を見廻すと、暗い家の中には何物も無かった。更に雪明りで透して視ると、土間の隅には二三枚の荒蕘が積み重ねてあったので、お葉は之を取出して先ず框の上に敷いた。腰を卸して扱ほつと息を吐くと、彼女は今更のように骨に沁む寒気を感じた。

何か焚火でもする材料は無いかと、お葉は急に我が袂を探ると、重太郎に与ろうと思つて折角持つて来た燐寸は、何時の間にか振落して了つた。仕方がないと舌打しながら、倒れた戸の間から表を覗いて見ると、風も雪もますます暴れて来た。こんな所に何時までも躊躇していたら、凍えて死んで了うかも知れぬ。夜の更けぬ間に些とも早く帰つた方が怜悧だと、お葉は鬢の雪を払いつつ、弛んだ帯を締直して起つた。

この時、がさがさと雪を踏む躑音あしおとが聞えて、何者か此の門口かどぐちへ走り寄つたらしい。若もしや重太郎か、但ただしは追手おつての者かと、お葉は眼を据えて透すかし視みる間に、人か猿か判らぬような者が雪を蹴つてちよこちよこと飛び込んで来た。加しか之も其それは二人であつた。と思うと、後あとから又一人入つて来た。後の一人は色の白い女を抱えているらしい。

「おや、何だろう。」

お葉も不思議に思つた。暗い隅の方へ身を退ひいて、霎しばらく時そ其の様子を窺つていると、新しく入つて来た三人は一種奇怪な声を出してキキと笑つた。其その声は確たしかに記憶おぼえがある。曩さきの日彼かの虎ケ窟うで聞いた山やまの叫なび声であつた。此この雪の夜に、何処どこからか若い女を攫さらつて来たのであろう。お葉は愈いよいよ驚あやき怪しんで、猶なおも窃ひそかに其その成行なりゆきを窺つていた。家の中は何なに分ぶんにも暗いので、お葉は女の顔を能よく見ることが能できなかつたが、若もし其その顔を知しつたらば彼女かれは更に驚おどいたに相違ちがない。今や攫さらわれて来た若い女は、彼かの吉岡の冬子であつた。何なに故ゆゑに冬子を奪さらい出して来たのであろう。彼等の料見は到底普通の人間の想像し得うべき限かぎりでないが、兎とにかく或ある罪悪を犯すべき穢いけにえ性せいとして、若い処しよ女よを担かぎ出して来たものと察せられた。冬子は口に桃色の手はんかち巾ふを捻ねじ込まれているので、泣くにも叫なぶにも声を立てられなかつた。

我が恋の仇とも云うべき冬子が斯る危難に陥っていると知ったら、お葉は此際何んな処置を取ったであろう。が、表より洩るる臙の雪明では、お葉に其れと判然解らなかつた。彼女は単に餌食となるべき若い女の不幸を憫れんで、何とかして之を拯つて与りたいと思つたのである。而も對手は三人で此方は女一人、迂濶加勢に飛び出したら自分も何んな酷い目に遭うかも知れぬ。お葉は息を殺して猶も窺つてみると、彼等は頻にキキと笑いながら冬子を彼の荒蕙の上に投げ出した。

冬子も一生懸命である。裳を乱して一旦は倒れたが又忽ち跳ね起きて、脱兎の如くに表へ逃げ出そうとするのを、は飛蕙つて又引据えた。お葉も既う見では居られぬ。さりとて何等の武器をも持たぬ彼女は、咄嗟の間に思案を定めて、頭に挿している銀の簪を抜き取つた。

目前の獲物に気を奪われていた 共は、暗い中から突蹴り出たお葉の姿に驚く間もなく、彼女が逆手に持つたる簪の尖端は、冬子に最も近き一人の左の眼に突き立った。不意と云い、急所と云い、彼は猿のような悲鳴を揚げて倒れた。

「**④** 留生め。何を為やアがるんだ。早く何処へ行つて了え。」と、お葉は勝誇つて叫んだ。思いも寄らぬ救援の手を得た冬子は、鞆のように転がってお葉の背後に隠れた。

けれども、敵はまだ二人を刺している。加之も一人の味方を傷けられた彼等は、瞋つて哮つてお葉に突進して来た。洋刃と小刀は彼女の眼前に閃いた。冬子も恩人の危険を見ては居られぬ、這いながら一人の足に絡み付くと、は鉄のような爪先で強蹴放したので、彼女は脾腹を傷めたのであろう、一旦は氣を失つて倒れた。は左右からお葉に迫つた。

「畜生……畜生……。」と、お葉は罵りながら逃げ廻つた。

(六十二)

追手の人々も同く村境まで走つて来たが、折柄の烈しい吹雪に隔てられて、互に離れ離れになつて了つた。其中でも忠一は勇氣を鼓して直驀地に駆けた。が、咫尺も弁ぜざる冥濛の雪には彼も少しく辟易して、逃るとも無しに彼の空屋の軒前へ転げ込んだ。

雪明と一口に云うものの、白い雪も斯う一面に烈しく降つて来ては雨と変らぬまでに天地は暗いのである。況て鎖された家の内は殆ど真の闇であつたが、彼は危くも吹き

倒されんとする雪風を凌ぐ為に、兎も角も一步踏み込もうとする途端に、内には怪しい
 うなりこえ
 唸声^{うなりこえ}が断続^{きれぎれ}に聞えた。

彼は俄に立止^{たちどま}つて声^{こゑ}する方を透^{かたすか}し視^みたが、生憎^{あやにく}に暗いので正体は判らぬ。更に耳を澄^{すま}
 して窺^{ひとり}うと、声は一人でない、尠^{すくな}くも二人以上の人が倒れて苦^{くるし}んでゐるらしい。扱^{さて}はこ
 にも何か椿事^{ちんじ}が起^{おこ}つてゐるに相違ないと、忠一も驚いて身構^{まっち}えしたが、燐寸^{りんすん}を持たぬ彼は
 やみ^{やみ}て^てら^ら暗^{くら}を照^てす^すべき便宜^{べんい}もないので、拔^{ぬき}足^{あし}しながら徐^{そろそろ}々と探^{たず}り寄^よると、彼^{かれ}は忍^たち^ち或^{あるもの}物^{つまず}に蹉^す
 いた。跪^{ひざます}いて探^{たず}つて見^みると、之^{これ}は女^{おんな}らしい、長い髪^{かみ}を乱^{みだ}して土^{つち}に曳^ひいて、其^{その}頬^ほから喉^{のど}の辺^{あたり}
 には生^{なま}温^{あたた}かい血^ちが流^{なが}れていた。

忠一も一旦^{ひとたび}は愕^{おどろ}然^{おどろ}としたが、猶^{なほ}其^{その}様子^{ようす}を見届^{みと}ける為^{ため}に、倒^たれたる女^{おんな}を抱^{かか}え起^{おこ}して、比
 較^{ひかく}的^{てき}薄^{はく}明^{めい}るい門^{かど}口^{ぐち}へ連^つれ出^でして見^みると、正^{ただ}しく女^{おんな}には相^あ違^{ちが}ないが、もう息^{いき}は絶^たえていた。

「これは一体何者だろう。」

彼は猶^{なほ}能^{あた}く其^{その}顔^{かほ}を見届^{みと}けようと、臃^{おぼろ}の雪^{ゆき}明^{あかり}を便^{たより}宜^いに凝^{じつ}と見詰^{みづ}めてゐる時^{とき}、忽^{たち}ち我^{われ}が
 背後^{うしろ}に方^{あた}つて物^{もの}の気息^{けいき}を聴^きいたので、忠一は驚^{おどろ}いて屹^{きつ}と顧^{みか}ると、物^{もの}の音^{おと}は又^{また}止^やんだ。雪^{ゆき}
 風^{かぜ}はいよいよ吹^ふき募^つつて、此^この一軒^{いっけん}家は大地^{おおいしん}震^{しん}のようにめりめりと揺^ゆいだ。

内^{うち}には此^{この}女^{おんな}の他^{ほか}にも未^まだ何^{なに}者^{もの}か倒^たれて居^ゐる筈^{はず}であるから、忠一は再^{また}び探^{たず}りながら入^いつた。

が、不意に何んな敵が襲つて来ぬとも限らぬので、彼は大いに用心して、土間に身を伏して這いながら進んだ。微な唸声かすか うなりごえが左の隅に聞えたので、彼は其方へ探つて行くと、一枚の荒蕙あらむしろが手に触れた。蕙を跳退けて進もうとすると、何者か其蕙の端を固く掴んでゐるらしい。更に探つて見ると、果して此処にも人らしい者が拳を握つて倒れていた。

と思う途端に、又もや背後に物音が聞えた。暗い中から猿のような者が刃物を閃かして来て、忠一の頸を刺そうとするのであつた。はつと驚くと同時に、彼は幸いに這つていたので、矢庭に敵の片足を取つて引いて、倒れる所を乗掛つて先ず其の胸の上に片膝突いた。

「貴様は何者だツ。」

敵は何とも答えずに、力の限り跳返そうと悶いたが、柔道を心得たる忠一は急所を押えて放さぬので、敵は倒れながらに刃物を打振つて、下から忠一の喉を突こうと企てた。が、右の腕も緊と掴まれたので自由が利かぬ。敵は獣のような奇怪な声を絞つて、頻に唸つた。

「さあ、どうだ、降参しろ。」

忠一は左に敵の腕を押えて、右の手で敵の喉輪を責めた。敵は苦しそうに唸つて悶いて

いたが、もう叶わぬと覚悟したのであろう、一生懸命に跳返すと同時に、右の手に握つたる刃物を左に持換えて、我と我が胸を力任せに抉ると、鮮血は颯と迸つて、上なる忠一の半面を朱に染めた。腥さい血汐に眼鼻を撲たれて、思わず押えた手を弛めると、敵の亡骸はがつくりと倒れた。

目前の敵を殲し得た忠一は、先ずほつと一息吐くと共に、俄に渴を覚えたので、顔に浴びたる血の飛沫を拭いもあえず、軒の外へひらりと駆け出して、吹溜りの雪を手一杯に掬つて飲んだ。風は相変らず轟々と吼えて、灰とも烟とも譬えようの無い粉雪が、あなたの山の方から縦横上下に乱れて吹き寄せた。

その雪烟の中に迷うが如き火の光が一点、見えつ隠れつ近寄つて来たので、忠一は思わず声をあげて呼んだ。

「おうい、おうい。」

火の光は漸次に近いた。それは全身に雪を浴びたる塚田巡査の角燈であつた。

「やあ。」

「やあ。」

双方が顔を見合せて叫んだ。

「あなたはお早い。既うここへ来ていたのですか。」と、巡査は雪を払いながら軒下に立った。

「まあ、早く燈火を見せて下さい。ここに大勢の人間が倒れているらしいんです。」
巡査は角燈を翳して内へ入った。

(六十三)

今や角燈の火に照し出されたる、此の暗い空屋の内の光景は慘憺、実に眼も当てられぬものであつた。先ず入口に黒髪を振り乱して横わっているのは彼のお葉で、彼女は胸や肩や喉に数ヶ所の重傷を負つていた。続いて眼に触れたのは醜怪なる三人の屍体で、一人は眼を貫かれた上に更に胸を貫かれ、一人は脳天を深く刺れて、荒蕙の片端を握んだまま仰反つていた。最後の一人は左の手に小刀を持って、我と我が胸に突き立てていた。

以上四人の浅ましき屍体の他に、朱に染みたる重太郎も亦倒れていたのは意外であつた。其傍らには、彼の運命を象徴するような紅い椿の花が、地に落ちて砕けていた。

「もう是だけかな。」

巡査は更に四辺を見廻すと、鮮血の臭の漲る家の隅に、猶一人の若い女が倒れていた。これが最も忠一を驚かしたのであつたが、冬子は単に氣を失つた丈のことで、身には別に負傷の痕も無かつたので、手当の後に息を吹返した。

飛驒の山国の風雪の夕、この一軒家に於て稀有の悲劇を演じたる俳優の中で、僅に生残っているのは幸運の冬子一人に過ぎぬ。随つて委しい事情は何人も知るに由ない。単に冬子の口供を基礎として、其余は好加減の想像を附加するだけの事である。

で、諸人の説は先ず斯ういうことに一致した。虎ヶ窟に棲める眷族は、其数果して幾人であるか判らぬが、曩の日彼の市郎の為に其の女性の一人を亡つたのは事実である。其後彼等は警官に逐われて山深く逃げ籠つたが、食物は兎もあれ、女性の缺乏ということが彼等の間に一種の不足を感じたらしい。そこで彼等三人は此の大雪に乗じて里に降り、何処からか女を攫つて行こうと試みた。之に魅まれたのが彼の冬子で、彼等は吉岡家へ忍び寄つて窺う中に、便所へ通つた冬子は手を洗うべく兩戸を明けたので、彼等は矢庭に飛び蒐つて彼女を捉えた。猶其袂から手巾を取出して、声立てさせじと

口に喰ませた。斯くして冬子は、彼の空屋まで手取り足取りに担ぎ去られたのであった。空屋には偶然にも彼のお葉が居合せて、彼女は冬子を拯わんとしてと鬪った。そこまでの事は冬子も知っているが、氣を失つて倒れた後の出来事は些とも判らぬ。又何うして此処へ重太郎が引返して来たか判らぬ。恐くは烈しい吹雪に途を失つて、再びここまで迷つて来ると、恰もお葉がに殺されんとする所に会つたので、彼は又お葉拯わんとして鬪つた。其結果、お葉も討たれ、重太郎も討たれた。二人も枕を駢べて死んだ。究竟双方が相撃となつた処へ、忠一が後から又来合せて、残る一人のも自殺を遂げるよ
うな事になつたのであろう。

但し是は一種の想像に過ぎぬ。この以外にも彼等の間に何んな秘密の糸が繋がれているかも知れぬ。普通の世間の出来事にも、人間の浅い智慧では想像や判断の付かぬことは幾許も有る。況てやお杉や重太郎等の關係に至つては尋常一様の理屈を以て推断することは能まい。

これで何百年來この山国を開した魯族も、果して全滅したのであろうか。或は猶其のよる余類が山奥に潜んでいであろうか。それは何人も返答に苦む所であるが、兎にかく此の物語はお葉と重太郎の最期を一段落として、読者と別離を告げねばならぬ。

大雪は其後幾日も降りつづいて、町も村も皆埋められた。悲劇の舞台たりし彼の一軒家は、三日目の夕暮に遂に潰されて了った。

*

*

*

*

*

*

市郎と冬子の結婚は、安行死去の為に来年まで延期されたので、忠一は一先ず東京へ帰った。それから半月ほど経過後、彼は市郎の許へ長い手紙を遣した。に対する調査の報告書である。地方の各新聞は市郎に懇願して、何れも其記事を紙上に連載した。原文は頗る長いものであるが、大略先ず斯ういう事であつた。

*

*

*

*

*

*

今から六百余年前の弘安年中に、元の蒙古の大軍が我が九州に襲つて来た。北條

時宗邀え撃つて大いに之を敗つたことは、凡そ歴史を知るほどの人は所謂「元寇の役」として、誰も諳じている所である。

この大戦に参加したのは九州の諸大名ばかりでない。鎌倉からも出征した、東海東山中国からも出征した。其当時、飛驒国の地頭職は藤原姓を冒す飛驒判官朝高という武將で、彼も蒙古退治の注進状に署名したる一人であつた。

(六十四)

朝高は異国の敵を撃破つて歸つた。彼は凱陣の家土産として百人の捕虜を牽いて来た。飛驒の国人は驚異の眼を以て、風俗言語の全く異なる蒙古の兵者を迎えた。

彼が捕虜を牽いて来たのは、単に其功名を誇るが為では無かつた。九州の戦鬪に於て、最後の大勝利は幸いに我に歸したけれども、初度の戦鬪は屢々我に不利益であつた。敵の弓矢とは、其威力に於て著るしい相違があつた。朝高は早くも之を看取して、我も彼と等しき巨砲を作ろうと思ひ立つたのである。が、其製法を知る者は日本に無いので、彼は居城高山を距る一里の処へ新に捕虜收容所を設けて、ここに百人の

蒙古兵を養い、彼等に命じて異国の を作らせようと企てた。

斯時代に於て斯着眼は頗る聡明であると云わねばならぬ。が、彼の企画は不幸にも失敗に終つた。主将の意思は必ずしも然うでは無かつたのであろうが、敵を愛することを知らぬ部下の者共は、此の異国の捕虜に対して甚だしき侮辱と虐待を加えたので、彼等は甘じて仕事に着かなかつた。監督の武士と捕虜との間に日々衝突が絶えなかつた。朝高も終局には 疔癩を起して、彼等を悉く斬れと命じた。

これが捕虜の間にも洩れたと見えて、百人の蒙古兵は風雨の夜に乗じて逃走を企てた。番兵が追掛けて其幾人を捕え、其幾人を殺したが、余の七八十人は山を越えて何処へか姿を隠して了つた。飛驒は名に負う山国であるから、山又山の奥深く逃げ籠つた以上は、容易に狩出すことも能ないので、余儀なく其儘に捨置いた。

斯くて一年ばかりも過ぎると、或夜何者か城内へ忍び入つて、朝高が家重代の宝物たる金の兜を盗み去つたのである。無論、其詮議は極めて嚴重なものであつたが、其犯人は遂に見当らなかつた。或は曩に逃走したる蒙古兵が、一種の復讐手段として斯る悪事を働いたのではあるまいかと云う噂もあつたが、確な証拠も無くて終つた。兜の行方は遂に不明であつた。

朝高の家は三代で亡びた。其後幾多の変遷を経て、豊臣氏時代から徳川氏初年までは金森氏なもりここを領していたが、金森氏が罪を獲てから更に徳川幕府の直轄ちよつかつとなつて、所謂代官支配地として明治まで引続いて来たのである。で、此土地の人の名を唱え初めたのは、何時の頃からか判然せぬが、古い昔には其んな噂も聞かず、そんな記録も残っていないのを見ると、恐らく前に記した蒙古一件以後の事ではあるまいか。他に新しい発見がない限りは、先ず彼のを以て蒙古人の子孫と見るのが正当の解釈であろう。

彼等は収容所を逃れ出でて深山の奥に隠れた。で、彼のビジョン講師の説明した如く、人の目を避けて穴の中に世を送っていたのであろう。最初は遠い山奥に棲んでいたのも、他の人間社会と接触する機会も少かつたが、生活上の都合で漸次に山奥から降つて来て、比較的里へ近い虎ヶ窟に移り棲むようになったのではあるまいか。里人が此の窟に対して、日本に無い虎という獣の名を冠せたのも、何やら蒙古に関係があるらしくも思われる。里へ近くに随つて、彼等は折々に人間に出逢うことが有る。又必要に迫られて、人家の食物を奪い、婦女小児を奪うことが有る。人がの名を口にするに至つたのは多此以後の事であろう。元来野蛮の蒙古人が山奥に棲むこと多年、其のますます畜化したのは怪むに足らぬ。

彼等の種族が漸次に減つて行くのも亦当然の結果である。而も猶連綿として六百余年の生活を継続扱つたのは、彼等が折々に里を荒して、婦女を奪い小児を攫つて行くが為に、辛くも子孫断絶を免れ得たものと察せられる。唯、いかに彼等が蛮化したとは云え、僅に五六百年の深山生活に因て、猿か人が判らぬまでに甚しく退化するや否やと云うことは、少しく疑問に属するのであるが、先ず右の如くに解釈するより他はあるまい。

窟の内に彫つてあつた文字は正しく蒙古の字で、自分等は元の民であるが捕われて此国に来つた。日本の大将が残酷に取扱うので、同盟して此の山中に隠れたと云う意味を記し、最後に数十人の姓名が連署してあつた。金の兜も果して彼等が盗み出したのであつた。

之に因れば、蒙古人が此の窟に棲んでいたと云うことは已に疑いもなき事実である。が、蒙古人即ちであるか。蒙古人は疾くに死絶えて、更に他のなる者残つて棲むようになったのか。そこには未だ幾分の疑いが無いでもない。併し岩穴の中で発見された多数の骨が、最初は普通人以上の骨格を有し、其れが漸次に退化して小児のようになっているのを見ると、蒙古人が五六百年の間に著るしく退化して、遂にとなつたとも云得べき相当の根拠が有る。

是等これらの理由よつに因よつて、吉岡忠一は
識者ししやを待まちつのである。

を以もつて蒙古人もんこじんの子孫こそんと認めめた此この以上いじやうの考證かうじやうは、他たの

青空文庫情報

底本：「飛騨の怪談 新編 綺堂怪奇名作選」メディアファクトリー

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

初出：「やまと新聞」

1912（大正元）年11月13日～1913（大正2）年1月21日

※「市郎君」と「市朗君」の混在は、底本通りです。

入力：川山隆

校正：江村秀之

2013年8月11日作成

2013年9月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

飛騨の怪談

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>